
がんばれぼくらのノーカン先生！

あすてか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

がんばればくらのノーカン先生！

【Nコード】

N8646X

【作者名】

あすてか

【あらすじ】

Arcadia様に投稿しているものと同一作品です。

・・・だったのですが、いろいろと変更点、新展開、新ヒロインなどがございます

ふと気がつけば異世界に転移してしまっていた主人公、四季村秋彦が、冒険者育成学園での厳しい迷宮探索の日々や、世界各地を渡り

歩いた旅を経て、十年後、学園の教師となったところから物語は始まります。

生粋の変態である屍霊術士の少女や、生粋の変態であるハイエルフさんや、生粋の魔界大元帥であるロリババアさんなどに好かれたり押し倒されたり殺されかけたりなどしつつ、自分が担当する冒険者パーティを育成していくお話、らしいです。

すでにステータスが限界まで上昇しているのでめっちゃくちゃ強い主人公。

たまに主人公の過去のお話などに飛んでいきます。

《ノーカン先生》

暖かくて柔らかな日差し。

優しく流れる、心地のいい風。

背中を包み込むような草の絨毯。

学園都市リノティアは、今日も平和だ。

「あ、せんせ、ボールそっち行くからあぶねーよ」

「ぶぐおっ」

顔面！ 顔面に衝撃！

木陰に寝転んで優雅に昼寝としゃれ込んでいた俺の顔面を、遠くのほうから飛んできたボールが襲ったのだ。

当然、俺は飛び起きて、向こうのほうに突っ立っているガキどもに対して叫んだ。

「くおら、このクソガキどもっ！ どこ見てボール蹴ってたッ！」

「うわっ怒ったよノーカン先生が」

「ばか、怒るだろあれは普通」

「逃げよう逃げよう」

「えー、俺のボールどうすんだよ」

「そんなの放つとけ、ほら逃げるぞっ」

五人の生徒が俺に背を向けて走っていく。

……しょうがねえな。

俺は足元に転がっていたボールを思いきり蹴り飛ばした。

綺麗な放物線を描いて宙を飛ぶ球体。それは俺の狙い通り、ガキどもの頭上を通り過ぎて、その目前に落ちていった。

彼らは振り返って俺を見た。

「先生……？」

「これからは気をつけて遊べよ。ていうか俺も混ぜろ」

昼寝も飽きたところだったのさ。そろそろ体を動かさなくちゃな。俺はガキどものほうへと歩いていく。

彼らはちよつと迷ったようだったが……すぐに全員一致で迎え入れてくれた。

この学園の校庭はやはりアホのように広い。好きなだけボール遊びを楽しめた。

それでも昔はサッカー選手に憧れて練習してたんだぜ。地区予選の準決勝で大活躍できるくらいには熟達さ。いやいや、十数年ぶりにボールに触ってみたが、俺の脚もまだまだ捨てたもんじゃないな。もつともこつちではサッカーじゃなくてダッティンとかなんとか言うらしいけどな、この遊びは。まあ基本は変わらんさ。青空の下で球ころを追いかけるっていう基本はな。

俺が前人未到の美しいオーバーヘッドシュートを決めて、敵チームのゴールにボールを叩き込んだとき、昼休みの終了を告げるチャイムが鳴った。

「お、そろそろつぎの授業が始まるな」

「えー、いいじゃん先生、もうちよつとやろうぜー」

「あと五分くらい大丈夫でしょー」

「ばーか。俺はおまえらとちがって忙しいし、おまえらも授業の用意があるだろうが」

と言つて、近くにいた緑髪の少年の頭を撫でてやる。こいつの年齢は十四歳くらいだろう。周りの仲間たちもそんなもんだ。耳が尖ってるって部分も含めてな。あ、ひとりは人間族みたいだ。エルフのチームに人間が混ざっているというのは珍しいかもしれない。

「ほら、さつさと行け。遅れたら怒るぞ」

「んー、じゃあそうするよ。でもさ、せんせ、次はあの曲芸みたいなシュート、ぜったい止めてやるかな」

「うはははは馬鹿め、気賀島ヘラクレスバトラーズの得点王と呼ばれたこの俺さまのオーバーヘッドシュートが、そう簡単に止められてたまるか」

「キガジマ……？ なにそれ」

それがあまりにも耳慣れない単語だったのか、きょとした表情を浮かべる、エルフの少年。

……ああ、悪いな。俺もびっくりしてる。もう思い出すことも少なくなってるんだが。

「俺の故郷の名前さ。さあ、もう本当に行け」

「わかったー」

「んじゃね、ノーカン先生！」

「ノーカン言うな！ クソガキども！」

まったくガキというのは気安くて遠慮というものを知らない。

馴れ馴れしくてうるさいもんだ。

だから俺は、子供のことが好きなのさ。

ムンドウースと呼ばれるこの世界の地図の中心に、ギアラという大陸がある。

学園都市リノティアは、ギアラ大陸の南西に位置する大国エルイストアートの、その王都からはやや離れたところに建造された、この世界でも有数の超巨大教育施設だ。

生徒数は二十万人だったか、三十万人だったか。敷地面積はどれくらいだろう？ 学園都市というだけはあるて、とにかく広い。東京ドームで数えるの馬鹿らしくなるくらいには広大だ。そしておよそこの世にあるもののほとんどはここにある。敷地内には学生寮もあればパン屋から本屋、武器屋から、凶悪な魔物が出現するダンジョンまで、なんでもござれ。

で、この教育施設がなんのつもりで造られて、そしてここでなにを教えるのかっていうと、それには色んな答えがある。たとえば剣を振る戦いかただったり、魔法を使う方法だったり、薬草や鉱物の知識、歴史、うまい商売のやりかた……これまたなんでもござれ。

だがまあ、つまるところを言えというなら、それはたったひとつだろう。

生徒たちを強く鍛えて、優秀な冒険者として外界に送り出す。それがこの学園都市で、そして全世界の同様の施設でも行なわれている。

人間族、獣人族、エルフ、ドワーフ、ノーム、竜人族、悪魔族、天使族……多種多様な種族の子供たちがここに集められて、最新の教育をたっぷりと受けたあとで、外の世界に旅立っていくわけだ。なんでもこの世界には魔王という強大な存在……世界中の魔物どもの親玉がいて、人間や亜人の連合軍は、そいつを倒すためにちよつとでも戦力を増やしたいらしい。意外と重要なのだ、この施設は。で、俺はというと、この学園都市に数え切れないほど所属している教師のひとり。

天然パーマのせいであつぷりとクセのある髪は茶色っぽい。身長はだいたい百八十センチくらい。顔立ちは渋みのあるナイスガイといたいところだが、まあ、普通なんじゃないのか。自分のことはよく分らん。けっこう鍛えているつもりだから全身にたつぷりと筋肉がついている。着ているものは、白いシャツと黒いズボン、そしてその上から羽織った灰色のロングコート。容姿については、こんなところか。

この学園での肩書きは、用務員、兼、迷宮探索実技担当教官、兼、非常事態解決専門特別臨時教師。

四季村秋彦。それが、俺の名前だ。

なんとも純和風な名前だろう。この中世ヨーロッパっぽい雰囲気の世界では、どうしたって浮きまくる名前さ。まあそれも当然だ。俺はもともとこの世界の住人ってわけではないんでね。

あれは、そう、十年前……西暦二〇〇八年のことだったか。

当時、普通の高校生だった俺は、その日もまたごく普通に学校に通って、普通に授業を終えて、普通に帰宅して、普通に家族と団欒して、普通に風呂に入って、そして普通に寝て、普通に起きるはず

だったのだが、最後のところでどうやらなにかを間違っただけらしい。

目覚めてみれば、そこはすでに異世界だった。

大変だったのはそこからだ。なんの後ろ盾も金銭もなかった俺だが、ちょっとした幸運が重なってこの学園に入学することが許されて、ダンジョン探索と猛勉強、自己鍛錬に明け暮れる毎日が始まった。仲間たちとパーティを組み、ダンジョンの地下の奥深くにまで潜り込み、凶悪な魔物たちと戦い、一度か二度は世界の危機っぽいものを防いで、気付いてみれば学園を卒業していた。で、ほかにやることもないからこの学園の教師として活動している。

考えてみれば、俺がこの世界にやってきてから十年も経つのか。

時間が流れるのは、早いな。

俺も、もう二十七歳。もうちょっとでおっさんだ。……まだ、お兄さんだ。

「二十七歳は立派なおっさんの領域だと思いますけど、先生？」

「いきなり背後から声をかけるのは感心しないな、ルーティくん。それと他人の心を勝手に読むのはやめなさい」といつも言っているだろう」

硬くて冷たい声の主のほうへと振り返る。

最初に断言しておくが、この少女、真正のサディスティンである。小柄な少女だった。人間族。かなりの美少女だと思う。艶やかな黒髪を肩にかかるあたりで綺麗に切りそろえている。いつもながら出ているところも引っ込んでいるところもないスレンダーな肢体。やたらと長くて細くて白い脚。すっきりとした鼻筋と、よく薄ら笑いを浮かべている唇の持ち主。切れ長の瞳とフレームレスの眼鏡という組み合わせが、この少女の風貌の知的さを強めている。着用しているのはこの学園の制服。白を基調としていて、デザインは洗練されていた。

この少女の名を、ルーティ・エルディナマータという。

ちなみにこの学園の高等部一年生でもある。

「性癖とプロフィールを紹介する順序が逆ではありませんか？」

「いやだから他人の心は読んじやいけませんって。ていうか性癖については弁解とかしないのね」

「はい。事実ですから」

にんまりと浮かぶ、暗い笑み。

うわー、背中にゾゾゾって悪寒が。

「で、ルーティくん。この俺になんの用事かな」

「マスター・ゾルディアスが、あなたにお話したいことがあると」

「……先生が？ ああ、分かった。いつものところか？」

「はい。できるだけお急ぎくださるようにとのお達しです」

「ほいほい。すぐ行くわ」

ルーティに軽く手を振って、俺は歩き出した。

正直、ほかのくだらん用事なら、無視してしまうのも有りだったんだが。あの先生に関わる用事だというなら、そういうわけにはいかんだろう。

十分ほどかけて、俺は目的の場所へと到着した。

校舎の隅っこのほうで俺を待ち受けていたのは、木製の頑丈そうな扉。そこを飾る金属製のプレートにはこう記されていた。

《屍霊術学科資料室》

そしてその下にもうひとつあるプレートには、

《第三職員室》

と、ある。

屍霊術。ネクロマンシーともいう。それを使う連中のことを、屍霊術士とか、ネクロマンサーという。

剣術、槍術、薬草学から錬金術まで、この学園はありとあらゆる学問の教師を招き入れているので、当然、屍霊術を専門に教える教師も在籍しているし、それを学ぶ生徒もいる。まあ、屍霊術っていうのは、死体やら悪霊やらを操る術のことだ。多くの地域では外道と呼ばれて蔑まれてる一派でもあることだし、好かれていない。授業を受けている生徒の数は、すべての学問のなかでいつもワーストのトップを争っている。

で、そんな屍霊術を教える唯一の顧問教師が、この扉の向こうにいるわけだ。

ここは通称、魔の第三職員室。呼び出されて帰ってきた者はいないという、リノティア学園一〇八不思議のうちのひとつたる暗黒スボット……！

いや俺はしょっちゅう呼び出されてるんだけどね。噂というのはあてにならないものなんだなあ。

ま、生徒たちが無気味に思うのも仕方はない。屍霊術という暗くおぞましいげな学問の資料を集めている場所だということに加えて、追いやられるようにしてこんな校舎の端っこにあるというのも、怪談として仕立て上げるにはうってつけといったところだろう。さらにもうひとつ、この職員室を使っている教師がただひとりだというのも奇妙ではあるはずだ。この学園は広く、生徒の数は膨大だ。となるとそれに対して教師の数も増やす必要がある。そのため、職員室の総数は三桁にも膨れ上がっていたりする。

が、この職員室に席を置いているのは、たったひとり。実際、占有もいいところだ。

……おっと。考えることをしている場合じゃなかったな。早く入らないと。

俺は拳の裏で扉を軽くノックした。

「秋彦です」

「開いていますよ、どうぞお入りなさい」

低く、よく通る、落ち着いた声の返事が聞こえた。

扉を開けて、入室。

「失礼します」

後ろ手で扉を閉じる。

入ったとたんに、左右を大きな本棚で挟まれる。

資料室の内部は、そんなに広くはない。というかけっこう狭い。もともと十五畳ほどの面積だったのだが、いろいろな本やらそれを置くための本棚やら、薬品やらマジックアイテムやらを詰め込んで

いるうちに、こんなことになってしまったのだという。とはいえ主人が綺麗好きなおかげで薄汚れていたりはしない。むしろさっぱりとしていて小綺麗だ。

本棚の廊下が正面の奥まで伸びていて、いろいろな資料を見て回るためには、まずそこまで進まなければならない。

で、その、俺から見て正面の奥に、マーキアス・グラン・ゾルディアスという男はいた。座り心地のよさそうな椅子に深く腰掛けていて、大きな机の上に何枚もの書類を広げている。手にはペン。どうやら事務仕事の最中だったようだ。

彼の年齢は、外見だけで判断するなら、二十代の後半から三十代の前半といったところだろう。もっとも俺が初めて出会った十年前から容貌が変化していないが。長い髪は腰まで届くほど長く、その色は闇よりも暗い。顔立ちが伶俐。しかも整いすぎているほど整っていて、そのせいか酷薄で非人間的な印象さえ受ける。死魚のそのように濁った瞳はいっさいの明かりを宿していないが、その深みのある黒からは底知れない知性を感じられる。身長は俺よりも高い俺もけっこう背丈はあるんだが、マーキアス先生はたぶん百九十センチはあるだろう。かといってひよる長いわけではなく、体つきはけっこうがっしりとしている。真っ白なシャツと黒いズボンを着こなしていて、その上から漆黒の上着を着用していた。きつちりと身だしなみを整えているのはいつものことだ。

マーキアス先生は俺のほうを見てにっこりとほほ笑むと、ペンを置いた。

「やあ、アキヒコ。よく来てくれましたね。いつもいきなり呼び出して申しわけありません」

「気にしないでください。先生のためならいつでも時間を作りますよ」

「そう言っていたけると助かります」

先生は少しだけ嬉しそうに言って、それから、自分の使っている机の前に置いてある、ほぼ俺専用と化している椅子を勧めてくれた。

そこに座りながら、俺は尋ねた。

「で、どうしたんですか？」

「生徒がひとり、行方不明になりました」

……やっぱり、か。

まあ、なんとなくそんなことだろうという予感はしていた。俺がここに呼ばれるのは、だいたいそういう、厄介な事件があったときだからな。

「どこで、ですか？ 生徒の詳細は？」

「生徒の名前はウィルス・ルーモニア。高等部の一年生で、レベル七十三の錬金術師。《イゾルデ大迷宮》の地下三十五階で仲間たちからはぐれてそれっきり、だそうです」

「……イゾルデにレベル七十三のひよっこが？ そりゃあ無茶つてもんでしょう。監視員はなにをやってたんですか」

この学園にいくつか置かれていた大転移装置からは、大陸の各地に点在しているダンジョンへと瞬時に移動できる。《イゾルデ大迷宮》というのは、なかでも極悪な難易度だということでは知られている。レベルが最低でも一〇〇を越えていないと、地下一階をうるついている魔物どもですら死神に見えるだろう。

で、あまりにも場違いなほどレベルの低い連中が高難易度ダンジョンに挑むのを防ぐために、すべてのダンジョンの入り口にはいつも監視員がいて、身のほど知らずの無謀な連中を通さないようにしている。はずなんだが。

先生はため息をついて、言った。

「最近、一部の生徒たちのあいだに出回っているアイテムがありません。レベルの解析をごまかせる効果を持つのだそうです」

「あー……、つたく、自業自得だな、馬鹿が」

そこまでして上級のダンジョンに挑みたかった理由は、まあ、察しがつく。いまの自分では手が届かないほど希少価値の高いアイテムが欲しかったとか、強い敵と戦いたかったとか、周りの仲間たちに見栄を張りたかったから、だとか。なんにしてもくだらない

ことだ。

だからといって見捨てるわけにはいかんだろうな。なにせ、生徒だ。

普通ならこんなことにはならないがね。危険な魔物が無数にうつつくダンジョンを探索するんだから、当然、死の危険性はある。胸糞の悪い話だが、行方不明になった生徒すべてに気を回してはこんな施設は運営できない。生徒の生死はすべて自己責任の結果として扱われるのが、この学園での常識だ。それでも俺が呼ばれたんだから、それなりの理由があるんだろう。ま、そこは詳しく追求しないさ。どうでもいいことだからな。

俺は立ち上がった。

「すぐ行きますよ」

「すみません。あなたには無理ばかりを言ってしまいますね」

「気にしないでくださいって。先生は俺とちがって忙しいんですから、そこで書類を片付けていてくださいよ。ま、こういうのも恩返しだと思えば苦にもなりません」

そう、俺はマーキアス先生に、返しても返しきれないほどの恩義がある。

……この世界にやってきたばかりのころ、俺はひどく荒れていた。そりゃそうだろう。いきなりいままでの人生をなかったことにされて、右も左も分からないこの世界で、これからずっと生きていけと宣告されたんだ。心は荒むさ、無理もないといまでも思う。

そんな不良人生まっしぐらの俺を、周囲を傷つけてばかりの大馬鹿野郎だったこの俺を、それでも見捨てずに見守ってくれたのが、マーキアス先生だった。先生がいなければ俺はこの世界で希望の光を見失い、暗黒と絶望に屈して二度と立ち上がれないところだっただろう。

いいひとなのさ。とんでもなく。……見かけがものすごく悪そうなのが難点だけだな。ゲームとか漫画とかだと絶対にラスボスになる顔だ。でもいいひとなんだぜ。ラスボス顔だけど。

そして俺がこの仕事を断れないのは、なにも、先生への恩返しについてそれだけが理由ってわけじゃない。

マーキアス先生に背を向けて、言う。

「子供は好きですからね。死ぬところは見たくないし……せめて遺体だけでも見つけてやりたい」

「素晴らしいご意見ですね、先生」

「だからねルーティくん、他人の背中からいきなり声をかけるのはやめなさい」

びつくりするからさあ。

レポートの魔法なんて使えたっけ、きみ？

「単なる隠密機動術の初歩ですよ、先生」

「はっはっは。そうかいそうかい。で、俺はこれから緊急の用事があるんだがね」

「はい。分かっています」

「……その手を離しなさい。前に進めないでしょうが」

ルーティは俺のコートを掴んでいるのだった。よしなさい、ただでさえヨレヨレなのに。独身の男にとってはね、衣服にいちいちアイロンかけるのも面倒くさいですよ。

半身だけ振り返って、ルーティを見る。

少女は、とんでもないことを言った。

「私も連れて行ってくださいますか？」

「はあ？ 駄目だよ駄目。いちおう訊いておくけど、おまえのレベルはいくつだっけ？」

「一七〇です」

「邪魔だ。ここにいろ」

俺はできるだけ冷たく聞こえるように言い放った。

《イゾルデ大迷宮》への挑戦権利が与えられる最低レベルは一五〇だ。その点でいえばルーティは合格しているといってもいいだろう。

だが、問題の生徒が行方不明になったというのは、地下三十五階

もの奥深くだ。そこで生き残るために必要となるレベルは二〇〇を軽く越える。明らかに、ルーティでは力不足だ。

というわけで、俺はルーティの手をコートからやりわりと引き剥がした。

……だが。

「アキヒコ。私からもお願いします。ルーティを同行させてやつてはもらえませんか」

「……先生？ 本気ですか？」

「ええ。ちょうどその子にも新たな試練が必要だと思っていたところです。心配ならば無用ですよ。なにせ私にとっていままででもっとも優秀な弟子ですからね。才能は保障します。あとはそれを磨く苦難を与えるだけです」

やれやれ……先生の趣味にも困ったものだ。

このひと、自分があまりにも完璧に完成しているからって、我欲というものがまるでない。その代わりといってはなんだが、弟子を育成するということにかけて普通ではないほどの労力を注ぐのだ。

俺も昔はよく鍛えてもらったものさ。もともと、ろくな成果は出なかったのだが。

先生の頼みごとだととなると、断るわけにはいかなかった。生徒の安否も気になることだし、ここであだこつだと口喧嘩している場合じゃないな。

俺は盛大なため息をつきながら言った。

「分かりましたよ、先生。……ルーティ、自分の身は自分で守れよ？」

「もちろんです。ありがとうございます、先生。マスター・ゾルデアアスモ」

ルーティは俺に対して笑みを浮かべ、振り返ってマーキアス先生に対して頭を下げた。

ルーティとマーキアス先生の関係は、ただの生徒と教師というだけではない。このふたり、個人的な師弟の間柄でもあるのだ。

すなわち、このサデイスティンが専門とする職業は

「屍霊術士、ルーティ・エルディナマータ。偉大なるマスター・ゾルディアスの名に恥じぬ働きをご覧に入れると、ここに確約いたします」

そう言つて、ルーティはスカートの裾を両手でちゃんと摘み上げ、優雅に一礼してみた。

……やれやれ、これは、どうも。

楽しいことになりそうだね。まったく。

《ノーカン先生》（後書き）

（´・・・`）いかがでしたでしょうか
これにて第一話は終了になります

もしもこの作品を面白いと思ってくださった読者さん、ぜひとも感想をくださいませ

作者は狂喜乱舞してしまいます。

読者さんの温かいお言葉があすてかの原動力なのです。

ヘイゾルデ大迷宮

さて、行方不明になった生徒を救出することになったわけだが、まずは情報収集することが大事だろうな。

そう思っただけで先生から問題の生徒のパーティメンバーと担当官の名前、所在を覚えてもらい、彼らに話を聞くことにした。

結果は、まずまずといったところだ。

ウィルス・ルーモニア。獣人族。性別は男。高等部一年生、十六歳。主専攻学科は錬金術。レベル七十三。中堅クラスのパーティ、《蒼き竜巻》のメンバー。と、プロフィールはこんなところだろう。容姿についても写真をもらったからちゃんと分かる。性格は、よく言えば大人しくて、悪く言えば臆病だったそう。

そんなウィルス少年がなぜパーティのほかのメンバーとはぐれてしまったのかという点についてだが、これは誰にもよく分からないらしい。気がついたらいなくなっていたのだそう。

ほかのメンバーは慌ててウィルス少年を探したのだが、どうしても見つからない。そのうち彼ら自身のほうも危ないことになった。ウィルス少年以外は平均してレベルが一五〇以上あったのだが、そこはすでに地下三十五階の奥深くだ。魔物どもは凶悪さを増している。できるだけ戦闘を避けていたとはいえ消耗は激しく、ときおり姿を現す強敵に対しては逃げるだけで精一杯。命の危険を感じた彼らは、はぐれた仲間を見捨てるかたちとなって地上に帰還したのだ。

なぜレベルを偽ってまで少年が《ヘイゾルデ大迷宮》に踏み入ったかについては、《蒼き竜巻》のリーダーだというドワーフの少年が教えてくれた。

なんでも、彼は日ごろから、自分だけがレベルが低く、パーティ

のお荷物のような存在となっていて、ひどい劣等感を抱えていたのだという。

かといっていまさらほかのパーティに迎え入れてもらおうにも、彼は彼自身の激しく人見知りする性格により、あきらめるしかなかったのだそう。

そういうわけで、勇気を出して難易度の高いダンジョンに挑み、おのれを鍛えようとしたわけだ。

それがいけないとは言わないが……無謀だよ、少年。気持ちには分かるけどな。

《蒼き竜巻》のメンバーたちの表情や雰囲気は、ウィルス少年をイゾルデに連れて行き、そして見捨てて逃げてしまったことへの悔恨と、彼が行方不明となることを防げなかった自分たちに対する怒りとが、混濁として浮かび上がっていた。

いい仲間に恵まれたな、少年。

そいつにもっときちんと気づくことができているれば、おまえはいや、遅くないさ。まだ遅くない。

遅くないようにするために、俺はこれからおまえのところに行くんだよ。

学園の隅っこのほう、《イゾルデ大迷宮》への転移装置がある建物へと、俺たちはやってきた。外壁も内壁も真っ白で大きなドーム状の建造物だ。内部にあるのは転移装置のみ。周囲にはいくつかつたく同じ建造物が並んでいる。

俺は、横に立つルーティに向かって言った。

「準備はいいかな、ルーティくん」

「はい、先生。いつでも大丈夫です」

そう答えたルーティは、さっきまでとは服装が違っていた。というか、やっぱり制服を着てはいるのだが、その上から真っ黒いローブを身にまとっているのだ。闇色でありながら輝くような、上等そうなやつだった。フードは被らずに背中の方へと垂らしている。手には、金属製の丈夫そうな杖。長さ二メートルってところか。

これが、ルーティ・エルディナマータの戦闘衣装だ。

それに対しての俺はというと、まったくいつも通りのシャツとズボン、それにコート。

これからダンジョンに潜るとは思えないぐらいの軽装だろう。俺もそう感じる。

昔は甲冑やら兜やら着込んでいたんだがなあ……いまでは、ああいうのを着けると、どうも重くて、思うように身動きが取れなくなってきたんだよなあ。体力の衰えを実感するよ。ていうかお兄さんはそろそろおっさんなんだから、全盛期なんてとつくの昔に終えちゃってる身の上なのである。それでもなお、かわいい生徒のためとはいえ体に鞭打って危険に飛び込む、そんな自分の生きざまに惚れる。

「おっさんの自画自賛ほどキモいものはない　モイ・キートン」

「だまらっしゃい。おっさんではありません、お兄さんです。あと勝手に詩人を創作してはいけません」

ていうかね、きみはなんで俺の考えが読めるのだね？

読心魔法でも習得しているの？

「先生のお考えは単純ですから。雰囲気で分かります」

「……あ、そう。……んじゃ行くよ、ルーティくん」

「はい。お供させていただきます。ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします」

ぺこりと俺に頭を下げる、ルーティ。

そうするとなんだかわいらしいほど俺に懐いてくれている生徒のようなのだが、この生徒、隙あらば俺の痛いところを突いてくるわ寝首を吹き飛ばそうとするわ、たいへんな下克上フリーダムっぷりを発揮するので、まったく安心できない。

ま、いつまでもこのサディスティンのことを気にして背後にビクビクしていても仕方がない。

俺は前に進み、正面の巨大な球体に右手をかざした。

球体は光り輝いていた。紫色の小さな太陽だ。小さな、とはいっ

ても、本物の太陽と比べての話だ。こいつの実際の直径は五メートルほどもある。これがダンジョンへと俺たちを飛ばしてくれる空間転移装置だ。遠く離れた場所へと瞬間移動させる必要があるのも、自然とそれ相応のエネルギーを扱う必要がある。よって、こういった巨大さになってしまったらしい。ダンジョンに多く置いてあるやつはもつと小型だ。最低でダンジョンの一階分、多くても数十階分くらいの、縦の瞬間移動でいいからな。

「開け」

短く告げる。

それがこの転移装置を扱うためのキーワード。その瞬間、装置が大きく膨張し、紫の光が俺とルーティを包んだ。視界がすべて、荒れ狂う紫の奔流によって埋め尽くされる。で、つぎに目に映ったまともな風景は、すでにほんの五秒前までとは一変していた。

周囲はすべて硬く分厚い、湿気を帯びた岩肌で囲まれている。

ここはすでに、広大なダンジョンの一部だ。

《イゾルデ大迷宮》。ここはかつて、人間の国を侵略する魔物どもの前線基地として機能していたらしい。司令官たる魔界の貴族が倒されてから千年が経ち、一度は放棄されたこの場所に、百年前から再び魔物たちが住み着くようになったらしい。

かなり暗いが、それでもなんとか視界を確保できるのは、岩盤のいろんなところに生えている苔のせいだろう。不思議なことに、その苔は淡く光っていて、この地下における唯一の光源となっていた。……ここも、変わらんなあ。

初めて足を踏み入れたのは、九年……いや、八年前だったか？あのかきは大変だったな。ユーフィーナのやつがなにを思ったのか勝手に暴走して大暴れ。あやうく俺やウィルダネスまで巻き込まれて死ぬところだった。冷静な顔をしながら下半身がずっぱり地面に埋まってるやつまでいたし。

卒業してから何度かここにくる機会があったが……ここという

より、ダンジョンってやつはまったく、どれだけ年月が経とうとも変わり映えがしない。

俺のほうは、いろいろと変わっちまったっぽいというのにな。

と、昔の思い出なんかに浸っている場合じゃなかったか。

先に進もうとして一步を踏み出すと、ルーティから声をかけられた。

「先生。ウィルス・ルーモニアが消息を絶ったのは、地下三十五階でしたよね？」

「ん、そうだな」

「ならばこの転移装置で直行すればよいのでは？ 教員用の機能があるのでしょうか？」

ふむ、さすがによく知っているな。

ルーティの言葉の通り、ダンジョンの各フロアごとにひとつずつ置かれた小型転移装置は、それぞれ密接にリンクしていて、理論上、そのうちのひとつさえ見つければ、あとはそのダンジョンの内部ならばどこにでもいける。

ただしそれはあくまでも理論上の話だ。普段は意図的にロックされていて、生徒たちが使えるようにはなっていない。

仮にそんな機能を生徒たちに使わせようものなら、いろいろとまずいことが起こるからな。その理由はだいたい大きく分けてふたつある。

周知のことだが、ダンジョンっていうのは、基本的に、地下に潜れば潜るほど敵が手ごわくなっていく。一階では楽勝だった戦いが、二十階や三十階も下れば命がけのものになる……なんてことは当たり前なのだ。つまり、いい気になって慢心した未熟者が一気に最下層まで降りてしまつて自滅するという事態を防ぐ必要がある。これが理由のひとつめ。

ふたつめは、学園は生徒たちを優秀な冒険者へと育て上げたいわけであつて、成果ばかりを楽しめて求める軟弱者を抱えるつもりはない、ということだ。エレベーターやエスカレーターばかり使っ

やありません、階段を使って足腰を鍛えなさい、というわけだな。実際、転移装置での移動に慣れきってしまったやつらなど、外の世界ではどれほどの役にも立たないだろう。

ま、そんなわけで、小型転移装置は、学園への帰還という機能しか使えないようになってるのだ。生徒に限ってはね。俺たち教師はちがうぜ。いままさにこういう場合のような、緊急事態があるからな。機能のロックを解除する方法を与えられているのさ。

もちろん、俺は、行こうと思えばすぐにでも三十五階まで降りられるわけだが……。

「いや、歩いて地道に行くよ」

「なぜですか？」

「んー、それはだな、ウィルス少年がそのフロアから移動しているかもしれないだろ？ まさか下に降りてるなんてことはないだろうが、意外と幸運に恵まれて十階あたりまで上がってきているかもしれない。ていうかむしろ生きているならその方向の可能性のほうが高いかもな。経験上、道に迷ったやつがジツとして動いてないってのはまずありえない。その可能性を考慮して、この一階から虱潰しに探してみる」

歩きながら、話す。

ルーティは素直についてきてくれている。

「ですが、それでは時間がかかりすぎるのでは？」

「……まあな。だから急ぐよ、全力でな」

そう言って、俺は、コートの内側から自分の武器を取り出した。

無骨な、鉄材と木材の結集体。

長さ六十センチほどの、歪な棒状の代物。

銃だ。火縄銃を想像してみてほしい。その半ばほどに巨大な回転式の弾倉を無理やりくっつけてあって、不恰好が極まったような、なんとも情けない外見だ。

が、性能はこの俺がきっちり太鼓判を押してやれる。

キンロッホレヴン社製六連発式魔導銃、ディアハザード。

この俺の、いまの、相棒だ。

俺は銃口をおもむろに前方へと向けた。

二十メートルほど向こうからこちらに走ってくる人影がみつ。

そいつらは後ろ足で直立したトカゲのような風貌をしていて、両方の前足にそれぞれ金属製の盾や剣を装備していた。中堅の魔物、リザードマンだ。

リザードマンどもは黄土色の瞳に爬虫類特有の冷たい光を宿し、こつちを餌だと決めつけて襲いかかってくる。その動きは素早い。このダンジョンにうろついている魔物どものなかじゃあ弱いほうだが、それでも戦闘能力は十分に人殺しに特化している。レベルは八十そこそこってところか。

俺は容赦なく躊躇なく、人差し指で引き金を引いた。

全力で扉を蹴破ったような轟音が、周囲の闇へと鳴り響く。

銃口が火を噴き、それと同時に先頭のリザードマンが後ろに大きく吹っ飛んだ。長い首の上に乗っていた頭部が丸ごと消えてなくなり、脳漿や血をまき散らしながら宙を飛ぶ。

残りの二匹は仲間の死にざまにすら一瞬の動揺も見せなかった。

こいつらにあるのは食欲と性欲だけだ。

俺はまたしてもためらわなかった。

轟音。

片方のリザードマンの腹部に弾丸が命中。そいつは上半身と下半身に分かれて壁にへばりつく。

轟音。

最後のリザードマンは盾を構えて防御しようとしたが、それごと頭を消し飛ばされた。

初戦が、終わった。

硝煙のにおいを嗅ぎながら、俺は弾倉に新たな銃弾を装填した。

この銃の優れている点は、個人の持つ重火器として、俺のもいた世界ではありえないほどの大口径でありながら、片手で容易に扱えて、しかも撃ったときの反動がものすごく小さいということところだ。

さらにはほとんど磨耗したり故障したりすることがない。さすがは魔法の世界の産物だな。

もともとこいつはドラゴンや巨人族と喧嘩をするために作られたというだけはあるて、威力は抜群。狙いが少し甘いのが難点だが、そのあたりに使い手の技量で補ってやりさえすれば

頭上に発砲。奇襲をかけてきたリザードマンの股間から脳天までを一発で貫く。

補ってやりさえすれば、こんなもんさ。

俺は歩みを止めなかった。

横幅が五メートルほどの真っ直ぐな道。左右には岩壁。

下へ降りる階段を探し、あたりを注意深く見わたしながら、早足で歩く。

そんな俺の真横の壁が、いきなり木っ端微塵になって砕け散った。岩石のシャワーの向こうから現われたのは、牛頭人身の巨躯。

ミノタウロスか。こいつは迷宮を歩くにあたってもっとも警戒しなければいけない魔物のうちの一匹だったりする。なにせ、強いからな。

身長五メートルはあろうかというミノタウロスは、俺の眼前で、その手に持った斧を振り上げた。

巨大な旋風が唸りを上げる。

触れただけで挽き肉に成り果てる死の一撃を、俺は後ろへと跳ぶことによってなんとかかわした。

……おいおい、ここの一階にミノタウロスなんていたっけか？

しかもこいつ、明らかにレベル二〇〇は越えている。土気色の分厚い肌、はちきれんばかりに膨れ上がった筋肉。鼻息も荒く俺を睨みつけるその双眸には、目の前の適を殺すことしか考えにないという、狂った殺意が宿っていた。

舌打ちしつつ、銃を持ち上げて素早く照準を定める。狙いはもちろんミノタウロスの眉間だ。

発砲。

鉛の飛礫が、俺の意思に従って忠実に、牛頭の急所へと真っ直ぐに飛翔する。

が、俺の耳に聞こえたのは、銃弾が肉を穿つ重い音ではなく、鉄が鉄に弾かれるときの甲高い音だった。

ミノタウロスはその斧の柄を盾のようにして、自分を襲う銃弾を弾き返したのだ。

……器用なことを。

などと、感心している場合じゃなかった。

そのまま俺の頭上へと持ち上がる戦斧、それは俺が銃の引き金を引く前に、俺の脳天へと

ミノタウロスの斧が、ほとんど同型の斧の一撃によって弾かれた。横合いから俺の窮地を救ったのは、こちらも、筋骨隆々としたミノタウロス。ルーティが召喚魔法で呼び出したのだ。

ただしその容貌は異様だった。まず、全身の肌の色が部分によってちがうのだ。紫だったり、肌色だったり、あるいは赤だったりもした。色違いの肌と肌を、太い糸による縫い目がつなぎ合わせている。さらには右半身と左半身で大きさや形が異なっている。右腕のほうはやや長いし、左腕の太さは右腕のその倍もある。背中からは大鷲の翼が生えていて、尻尾はサソリのそれだ。それでも頭は牛のもので、ミノタウロスっぽいのだが、双眸の色は左右でちがっていた。右は燃えるような赤。左は凍るような青。顔面にもそこを半分に分けるようにして痛々しい縫い目が走っている。

ミノタウロスというよりは、キメラ 数多の生物を組み合わせた合成魔獣だな。

そして実際、俺の感じた印象は、正しい。

「我が敵を速やかに葬れ、ドレッティーナ」

ルーティが静かに告げた。

ドレッティーナと呼ばれたキメラミノタウロスが、無言で動く。

地響きを上げて前へと踏み込む、ドレッティーナ。斧を振り上げる。当然、敵のミノタウロスも応戦した。上から叩き斬るようなド

レッティーナの斧と、下からすくい上げるようなミノタウロスの一撃が、ぶつかり合って火花を散らす。

ミノタウロスの斧が、砕けて散った。

たたらを踏みながらも、そいつはいまだに戦意を失わず、雄叫びを上げる。

その頭を、ドレッティーナの右腕が掴んだ。

驚くべきことが起こった。

ミノタウロスの膝が、曲がる。上から押さえ込まれる力に屈して膝が曲がった。ミノタウロスの瞳に、俺から見てもはつきりと分かるほどの驚愕の色が浮かぶ。おそらくはいまままでに一度たりとも力比で負けたことなどなかったんだろう。たぶん理性などないはずなのに、それほどの驚きだったということか。

ミノタウロスが声を上げた。それだけで地鳴りが起こりそうなほどの大音声。腕が一回りも太くなるほどパワーを上げてドレッティーナの右腕を掴む。

だがなんの変化も起こらない。

ドレッティーナは無言。ただ、無慈悲に、機械のように愚直に、ミノタウロスを押さえ込んでいく。

ミノタウロスの脚から骨が砕ける音が聞こえた。そして腰の骨が折れた。断末魔の悲鳴が上がる。それでも押さえ込む力はゆるまない。やがてミノタウロスが悲鳴を上げたがそれでも止まらない。巨躯の胴体が潰れて地面にめり込み血の海が広がっていく。

時間にして一分もかけずにぐしゃぐしゃと潰れきったミノタウロスは、文字通り、原形をとどめていなかった。

ルーティはロープの裾を摘み上げて、俺に一礼してみせる。

「いかがでしょうか、先生。我が屍霊術の働きは」

「……相変わらずネーミングセンスが最悪だよ、ルーティくん。ドレッティーナはないだろ」

「あら、かわいらしくてよいでしょう？」

ドレッティーナこそは、ルーティの屍霊術のひとつの成果だ。彼

女が《屍骸遊戯》という二つ名で呼ばれる理由でもある。

屍霊術は死体を操ることを得意とするが、それはなにも、死体をそのまま操るというだけではとどまらない。死体を自在に操るということは、ただ死体を動かすだけではなく、死体を術者の思い通りの形態へと作り変えるという意味をも持つのだ。たとえば基本となる死体をミノタウロスに決めたとして、そこにグリフオンの死体から翼をもつてきて取り付けたり、大サソリの尻尾をもつてきて取り付けたりと、屍霊術士は好き勝手にやれるというわけだ。

古いもの、壊れたものを捨て去って、新しく強いものへと交換する。劣っている部分を取り除いて、より優れた部分を持つてくる。それを繰り返して、屍霊術士は自分の好みの死体を造り上げるというわけだ。もちろん、自分の身を守るための護衛、いわば一種のゴーレムへと仕立て上げるために。まさに死体のパッチワークといったところだな。

俺が知る限りだと、ルーティのゴーレムは全長十メートルはある怪鳥のはずだったんだが……ここしばらく姿を見ないと思っていたら、どうやら新たな作品の製作にご執心だったらしい。ていうかドレッティーナの背中の中があの怪鳥のなれの果てか？　ちなみに怪鳥の名前はキャサリンとかいったはずだ。ああ恐ろしいまでに外見と名前がかみあっていない。

ドレッティーナが、ルーティの足元へと、その逞しすぎる手の平を下ろす。

ルーティはそこに乗りながら、俺のほうへと振り返った。

「ねえ、先生」

「んー？」

「邪魔には、ならなかったでしょう？」

勝ち誇ったような、邪悪な笑み。

この娘、やはり、サディSTEIN。

俺は降参するようにして両手を挙げた。

「ありがとう。助かったよ、ルーティくん」

「うっふふふふっ！ お礼なんていいんですよ、先生！ 当然のことをしたまでですから！」

愉快な高笑いがダンジョンに響く。

……ついてくるなって言ったこと、じつは怒ってたりするのか？
ずしんずしんと足音を響かせて進むドレッティーナ。その肩に座ったルーティの背中を見送りながら、俺はため息をついた。……今日はよくため息をつく日だ。

《キルドゥーヤ》

ルーティとドレッティーナの活躍は素晴らしかった。

彼女たちの前に敵はいない。バジリスク、サイクロプス、マンティコア……凶暴で名の知れた魔物どもを瞬く間に葬っていくドレッティーナの怪力には、俺はもう感心するというより呆れるしかなかった。しかもただの馬鹿力だけではなく、対石化能力や対毒能力まで付加してあるとは。念の入ったことだ。もはやあのキメラミノタウロスはちよつとした動く要塞だな。

というわけで、ルーティたちが大暴れしている後ろで、俺は思存分にダンジョンの調査と行方不明の生徒の搜索を行なえたわけだ。そしてやってきました地下三十五階。

ここまでウィルス少年の影も形もなし。

……まさかとは思うが……いや、けっこう可能性は高いんだが……すでに魔物の餌になっていて胃袋の中身、なんてことはないだろうな。だとするとどうやっても探しようがないということになる。

一階からここまで、見落としはなかったはずだ。だから、この階にもいなかったとしたら、もつと下層の階にいるということになるんだが……それだと少年の生存率はますます低い。

俺たちがこのダンジョンに足を踏み入れてから、すでに五時間が経過している。ルーティたちのおかげでかなり素早くここまで来ることができたが、少年の姿が消えてから十二時間ほども経っているというのは、かなり危険な状態だ。

俺は若干の焦りを感じつつあった。

と、そのときだった。

「先生。あれが問題の少年なのでは？」

ルーティが前方を指差して言った。ドレッティーナの肩に乗って

いるおかげで、彼女は高いところから遠くのほうまで見渡せる。

俺のほうでも、目視で確認した。

ダンジョンの床に誰かが横たわっている。

当然、俺はすぐにその誰かのところへと駆け寄った。

白いローブを身にまとった獣人族の少年だった。そばには木の杖が落ちていた。

「先生、彼が？」

「ああ、そうだろうな」

短めの黒髪。頭の高いところから飛び出ている耳は猫のそのよう。写真で見せてもらったウィルス少年の容姿と特徴が完全に合致する。

少年は気絶しているのだろう。目を瞑っていて明けようとしてもしない。だが少年の呼吸する音はたしかによく聞こえるし、ローブを着ていても分かるほど胸は上下にゆっくりと動いていた。まだ、命はある。

……しかも、無傷のようだ。奇跡的にも。

俺はその場にしゃがみこみ、少年の頬をぺちぺちと叩きながら呼びかけた。

「おい、大丈夫か？ 助けにきたぞ」

「う……う、うつつ……？ うあああつ！？」

しばらく経ってからようやく目を覚ました少年は、青い瞳を見開き、脅えたように後ろへと飛び退いた。

……かわいそうに。さんざん怖い目にあったせいで、気が動転しているんだろう。

俺はできるだけ少年が安心できるように、阿呆のように、へらへらと笑ってみせた。

「怖がるなよ。お兄さん傷つくぞー」

「あ……、あ、も、もしかして学園の？ 僕を助けに来てくれたんですか……！？」

「おう、その通りだとも。俺は四季村秋彦……リノティアの先生だ。

あつちは生徒のルーティくんとドレッティーナちゃん。まったく災難だったな、少年。さ、こんなところに長居は無用だ。とっとと帰ろうぜ。自力で歩けるか？ 肩を貸そうか？」

「だ、大丈夫です。自分で歩けます。……よかった、これで家に帰れる」

ウィルス少年は、ほっとしたように胸を撫で下ろした。

少年の身長は百五十センチくらいだろうか。黒髪と青い瞳の持ち主。顔立ちは甘くて女の子に好かれそうなタイプだったが、どうも雰囲気は弱々しく、双眸には気弱そうな光が揺れていて、ちよつと頼りなさげだった。まあそういうところが母性本能をくすぐるかもな。話に聞いていた通りの少年だ。

……さて。俺がここにきた目的は、すでに終わった。少年に言った通り、こんなところに長居は無用だ。さつさと地上に戻るとするか。

俺たちはしばらくダンジョンを歩いて転移装置を見つけると、すぐさまそれを起動した。

先頭に立っている俺が装置に手をかざし、唱える。

「開け、万里の門」

そして装置が膨れ上がり、俺たち三人を包み込んだ。あの大型転移装置のときと規模は違うが、あとはほとんど同じだ。

もうひとつ違うのは、景色がまったく違っていいほど変わっていなかったことだな。

俺たちはまだ、ダンジョンの内部にいる。

ルーティが不思議そうに首をかしげて尋ねてきた。

「先生？ どうしたのですか？」

「いや、すまん。使いかたをちよつと間違えた。一気に学園に帰るはずだったんだが、上層階へ移動しちまったみたいだ」

「……おっさんを通りこしてお爺さんになったのですか？ 脳細胞が死んでいますよ」

「なははは、手厳しいなあ、ルーティくん」

俺は髪をかきながら馬鹿笑いを上げて、そしてコートのポケットから一冊の手帳を取り出した。

「ま、こういうのもご愛嬌だと思ってさあ、許してちょ。ああ、そうそう、少年。おまえにちょっと訊かなくちゃいけないことがあったんだよ」

「え？ なにをですか？」

「いや、たいしたことじゃないよー。こういうときは本人かどうか確認しなくちゃいけないんだけどな、そのための質問。せっかくだからいまのうちに訊いておくわ。ごめんな、面倒くさいだろうけどこれも規則だから」

手帳に書いてあるウィルス少年の個人情報に目を通す。

俺は訊いた。

「少年の名前は？」

「ウィルス・ルーマニアです」

「種族は？」

「獣人族」

「年齢は？」

「十六歳です」

「生年月日は？」

「聖王暦五〇〇四年九月六日」

「所属しているパーティと、その担当官の名前は？」

「パーティは『蒼き竜巻』。担当官はブイリー・ゴードン」

「よしよし。生徒番号は？」

「はい。二四七八九〇〇二四六〇六四二九〇です」

「そうかそうか。よし、全問正解！」

「ええ、当然のことですけどね」

「うん。でも不合格。残念でしたー」

少年の眉間に、ごつい銃口を押し当てて、俺は言った。

俺の後ろから、ルーティが、感心したように言う。

「なるほど。はっきりましたね」

「だろー？ ……あのね、少年。いや少年に化けたどこかの誰かさん。そんなに不思議そうな顔をしなさんな。おまえの答えは完璧すぎたんだよ。名前やら生年月日を答えるのは当然だ。そいつはできなくちゃまずいだろう。だがな、完璧に変装して敵を騙すためには、答えちゃいけない情報だつてあるんだよ。たとえそれが本人の知ってる個人情報であつてもな」

ウィルス少年の姿をまねた何者かは、まだ瞳に困惑の色を浮かべていた。

……生徒番号だよ、馬鹿が。生徒番号は学園創立以来、すべての生徒に与えられているものだがね。あんな長つたらしくて不規則な、それでいて生徒にとつてはまったく実用性のない数字の羅列、誰が好きこのんで覚えているもんかよ。俺のもといった世界でクレジットカードの会員番号なんて誰も覚えようとしなのといっしょだ。そんなくだらないことを覚えているとすればそれは、そいつになりきるうとして情報を完璧に集めるあまり墓穴を掘った、どつかの間抜けな誰かさんぐらいのものさ。

「あとな。おまえの格好はあんまりにも綺麗すぎた。レベル七十三の小僧が、こんな危険区域でそんな綺麗なままでいられるもんかよ。腕の一本や二本はなくしてるだろうと覚悟してきてみりゃ、てめえのそのさまだ。あんまり見え透いているもんだから怒りを堪えるのに必死だったぜ」

……それでも、期待していなかったといえば、嘘になるがな。

「もうひとつだけ訊いておくか。……本物の少年をどこへやった？」

「その質問に答える必要はあるのか？ 薄汚い人間め」

耳まで裂けた口で、そいつは笑いながら言った。嘲笑だった。

直後、引き金にかけた指に力をこめる。

発砲。

超至近距離で、そいつの眉間に鉛弾をぶち込む。

そのとき俺が首をかしげて体を捻るようにすることができたのは、単純に、長年にわたって研ぎ澄まされてきた直感と経験のおかげだ

った。

俺の耳の肉をちよつと削つて後ろへとすつ飛んでいく不可視の刃。
「先生！」

ルーティの叫びを聞きながら、俺は横へと跳んだ。そのままごろごろと地を転がり、すぐさま体勢を立て直して立ち上がる。

目の前、十メートルほど向こうに、ウィルス少年に化けていた者の正体がいた。

壮年の男だ。少なくとも外見は。身長は俺と同じくらいか。全身の筋肉は引き締まっっていて獣のよう。足首まで届くほど伸ばした銀髪を、後頭部のほうへと綺麗に撫で付けている。容姿は整っているのだが、その顔には邪悪でどす黒い感情が幾重にもへばりついていてどうしようもない。漆黒のタキシードのようなものを着ていて、長いマントを羽織っていた。

青白くて血色の悪い肌。

薄い唇の向こうから覗く、異様に鋭く長い犬歯。

真紅の瞳。

外見の特徴から推察するに、正体は吸血鬼、か。人間の生き血をすすって生命を永らえる、闇夜の種族。高い知能と戦闘能力をかねそなえる、もつとも厄介な魔物のうちのひとつだ。

その吸血鬼は、大仰に両腕を広げながら、余裕たつぷりと尊大に言う。

「我が名はキルドウーヤ。《風と幻夢》のキルドウーヤだ。人間よ、ほめてやろう。よくぞ我が幻術を見破った」

「おまえの名前なんざ訊いちゃいねーよ。それよりこっちの質問に答えろ」

怒りをこめて、鋭く答える。

後ろからいまにも突撃しそうになっているルーティを、片手で制止。

キルドウーヤはなにがおかしいのか、くつくつと笑った。
大口を開けて、べろんと舌を垂らす。

「あの小僧ならば、ここから入って」

その口腔の奥を、細くて骨と皮ばかりのような指で指し示した。
つぎにキルドゥーヤが指差したのは、自分の尻だ。

「ここから出て行っただぞ。いろいろと必要な情報は私の体に残ったがね……ははははは！」

発砲。

これ以上、ゲスの台詞を聞いてやるほど我慢強い耳は、俺にはない。

ドラゴンの鱗をも砕いて貫くほどの威力を持つ弾丸が、キルドゥーヤに向かって飛ぶ。

「まあ待て、焦るな、人間」

キルドゥーヤはまったくの余裕を見せ付けていた。

やつの頭部を木っ端微塵にするはずだった弾丸は、その目的を果たす直前でなぜか軌道が変わり、あさつての方角へと飛んでいつてしまっている。

なにこともなかったかのように、キルドゥーヤは話を続けた。

「なぜ私が人間などに化ける必要があったのか、知りたくはないのか？ 冥土の土産に教えてやろう、我が遠大にして精緻なる計画を」
「そのくだらん話は、レベルをごまかす装置をなぜ作ったかつてところから始まるのか？」

弾倉に新たな弾をこめながら言った。

キルドゥーヤは、初めて不遜な笑み以外の感情を顔に浮かべた。

驚きと、わずかな警戒心。

「……ほう。あれを作ったのが私だと、なぜそう思う？」

「おまえの目的は、まあ、だいたい分かる。学園に潜入して内部から破壊する、つてところだろ。冒険者を多く輩出する学園はおまえら魔族にとって邪魔でしかないからな。ダンジョンにもぐりこんできた生徒たちを上手く騙すなり誘惑するなりして装置を渡すことぐらい、幻術を使うおまえなら簡単だ。そうやって未熟者が高難易度のダンジョンに入れるようになれば自然と死者が増えて未来の戦士

が減るし、装置の効果を試すテストもたくさんできる。で、最後の仕上げとして、完成したその装置を使つて完璧に生徒に化けたおまえ自身が学園に乗り込んで、破壊工作やりまくりつてわけだ。あの装置は手帳サイズだから持ち込むのも簡単だしな。ところでそろそろ始めてもいいか？　ここで動かすべきなのは舌じゃないだろうか

六発の弾をこめた銃を、だらりと下げる。適度な脱力。だけど脚には一瞬の爆発を準備させる。

キルドゥーヤは啞然としていたが　すぐ、唸り声を上げて俺を睨み付けた。

「ふざけるなよ人間の若造。小賢しいだけの、弱くてくだらぬ虫けらが、この私と勝負するつもりか？　勝てると思っているのか、このキルドゥーヤに？」

「思つてるよー」

「……そんな豆鉄砲で、なにができる？」

「おまえをブチ殺して地獄に落とせる」

言つて、跳躍。キルドゥーヤに対して右側、斜め前方に低く跳ぶ。引き金を引く。

連続して響く轟音。

吸血鬼に向かつて、銃弾が飛翔する。

死の鉛を、キルドゥーヤは取り戻した余裕と共に迎え入れた。高笑いが響く。

「学習能力のない猿だ！　私には銃弾など通用せん！」

その通りだ。銃弾はすべて、やつに命中する直前で、軌道を無理やり捻じ曲げられてあらぬ方向へとすつ飛んでいく。キルドゥーヤにはかすりもしない。

あの現象の正体には、もう見当がついている。

風の防御壁だ。強烈に、しかも局所的に発生した風の渦が、キルドゥーヤを守っている。それが俺の発射した弾丸をすべて受け流し

遠距離からの攻撃では、やつは倒せない。

だったら近距離からの攻撃ならどうだ？

俺にばかり集中しているキルドゥーヤの頭上から、ドレッティーナの斧が襲いかかった。ルーティがドレッティーナを疾駆させたのだ。山のような巨体だつていうのに、驚くべき瞬発力だ。

剛力無双、キメラミノタウロスの戦斧。その威力ときたら、堅固な鱗で覆われたドラゴンの首ですら一刀両断するだろう。

だがそれですらキルドゥーヤには通用しなかった。

やつは信じがたいことに、掲げた片手で刃を掴むようにして、超重量の一撃を受け止めていたのだ。

「白兵戦でなら勝てるっても？」

にやりと、吸血鬼が口の端を吊り上げる。

その手にちよつと力をこめた　俺にはそのようにしか見えなかった　ただだというのに、戦斧の刃が粉々になつて砕け散つた。

舞い散る鉄の破片。

キルドゥーヤはそのまま、斧を砕いたのとは反対側の手をドレッティーナに向ける。その手の平は紫色の輝きを放っていた。

「人間ごときの手に堕ちた、哀れなる者よ。安らかに眠れ」

細く長い、紫の閃光。

鋼鉄をも焼き切るビームが横なぎに煌めいて、ドレッティーナの首をはね飛ばした。さらに連続して縦横無尽に走つたビームが、巨躯を瞬時にしてただのバラバラ死体へと変える。

悔しげに怨嗟の声を上げたのは、使い魔の戦いを見守っていたルーティだった。

「よくもドレッティーナを……！」

罪深く救いがたき者どもよ

！　その背に負う罪科を捨て去り、地獄の責め苦から逃れたいというのであれば、彼方から我が手元へと集え！」

金属の杖の石突きが、地面を叩く。

ルーティを中心として巨大な赤い魔方陣が浮かび上がった。

屍霊術の行使。新しいゴーレムを召喚するつもりか。

だがそんなことをキルドウーヤがおとなしく許すはずなどない。

「愚か者め。隙だらけだ」

笑いながら、キルドウーヤはぞんざいに手を振った。繰り出した攻撃はビームじゃない。もっと危険な一撃だ。目には見えない、不可視の攻撃。最初に俺の耳をちよつと削った、あれだ。

ルーティは呆然としたように目を見開いていた。自分に迫る死の運命に対して、なんの防御もできていない。まさに無防備つてところだな。

弾丸の軌道をずらした方法からも分かる通り、キルドウーヤが得意としているのは、風の魔法だ。いま、あいつがルーティに向かつてはなったのも、やはりそれだ。殺人かまいたち。人間のひとりやふたりぐらい大根のようにぶった切れる、巨大な真空波。

二秒、いや一秒の先の未来、ルーティは脳天から股間まで真つ二つになって死ぬ。

そして俺はそんな未来など許さない。

限界まで全力を出して走ったかいがあつて、なんとかルーティを押し倒すようにして転がり、殺人かまいたちから逃れることに成功した。

やれやれ、困ったもんだ。お兄さんにあまりきつい運動はさせないでくれよ、ルーティくん。

「ルーティ。遠くのほうへ逃げてろ。あいつがそう簡単におまえに魔法を使わせるとも思えないからな」

「せ、先生」

「ほらほら、さっさと行きなさい。お兄さんの言うことはよく聞くものですよ」

やれやれ、コートが泥で汚れちゃったぜ。ぱんぱんと土埃を払いのけながら、俺は立ち上がる。

銃は……さすがだな、ぜんぜん大丈夫だ。けっこう無茶な衝撃を与えたかと思つたんだが。

戦いに支障はない。

だというのになぜだかルーティは焦っていた。

「でも、先生」

「はいはい、話ならあとで聞くから」

「血が、うで、腕が、血……！」

そういえば、かまいたちがちよつとだけ右腕をかすっていたか。ま、たいしたことじゃないけどな。ただ感覚はないし動く気配もないから、この戦いで使うことはもうできないだろう。

たいしたことじゃないさ。

だからそんなに泣きそうな顔をするなよ、ルーティ。こんな腕の痛みなんぞよりも、そっちのほうが、俺にはつらい。

「気にするなよ、ルーティくん。悪いのはあの吸血鬼野郎だ」

「でも、でもっ！ 私をかばったせいで、先生、そんな　そんな　ちぎれそうなの……！」

「大丈夫だから。唾でもつけときや治るよ、こんなもん。マジでマジで。ほんとだって。信じなさいよ、お兄さんを。信頼しなさい。お兄さんの半分は正しさで出ています」

ちなみに、あとの半分は意地と根性とやせ我慢だ。

俺は、無事なほうの腕で銃を強く握ってから、歩き出した。

正面では、腕組みしているキルドゥーヤが、待ち構えている。

「別れの挨拶は終わったか？」

「なんの話だそりゃ？　ていうかとりあえずいっぺん死ねよデメエは」

狙いをつけて、正確に三回、引き金を引く。

キルドゥーヤは、嘲笑など浮かべなかった。すでに呆れたように俺を見ていた。

「馬鹿が」

「どつちがだい？」

俺はもちろん、串刺しになっているおまえのほうだと思うがねえ。キルドゥーヤは、自身の足元の床から生え出た何本もの鋭く長い杭によって、股間から頭のとっぺんまで、あるいは脚や腕をまとめ

て、無慈悲に刺し貫かれていた。それでもまだ生きているというのがびっくりだが、吸血鬼とはそういうものだ。まともには死なんのさ、こいつらは。

信じがたい、とても言いたげな表情のキルドウーヤだったが、なにも驚くようなことじゃあないだろう。ダンジョンにはあって当然のものだ。すなわち、侵入者を撃退するためのトラップだ。

俺が地下三十五階まで歩いているときに見つけたトラップ。

そして俺がここに　地下十六階に転移した理由だ。床のとある一部分に衝撃を加えれば発動するキル・トラップさ。さっきの銃撃はおまえ自身を狙ったわけじゃない。おまえのちよつと手前にある床を狙ったのさ。いい具合にトラップの仕掛けてある場所に立っていてくれて助かったよ。

まともに身動きもとれず、もがき苦しみながら、キルドウーヤは言う。

「ひ、卑怯な　」

「おうとも。当たり前でしょうが。こちとらおまえさんの言った通りの、弱っちい虫けらなもんでね。せいぜい小賢しくいかせてもらうぜ。大人は汚いものなのです、お兄さんは卑怯なものなのです」さて、とどめを刺すとするか。吸血鬼はもともとかなり不死身なんだが、見たところ、キルドウーヤは上等な部類だ。心臓をぶち抜いた程度でも死ぬかどうか分かん。弾倉に残った三発の銃弾で、頭に二発、心臓に一発。正確にぶち壊させてもらおうでしょう。

キルドウーヤが叫んだのは、そのときだった。

「なめるなよ、人間ッ！」

やつの体を蹂躪していた杭の群れが、一瞬にして弾け飛んで消滅する。

それをなしたのは、キルドウーヤが全身から放った魔力の膨張だった。

怒りで赤い瞳を燃え上がらせて、鼻面には皺を寄せ、憤怒の形相で俺を睨みつけてくる。やつを穴だらけのチーズみたく見せていた

無数の傷口も、すでに塞がっている。魔力で無理やり治療したのか。見かけによらず荒っぽいことをする。

「ゆるさん、許さんぞっ……！　よく私の体に傷を！」

「もう治っただろ。かたいことを言っなよ」

「黙れクズッ！」

やつはあまりの怒りのために、自分の手で俺を殺さなければ気がすまないとも思ったのだろう。魔法も使わずに、直接、その爪を鋭いカギ爪へと変化させて、襲いかかってくる。

吸血鬼という種族のもっとも恐ろしい点は、その高い知能や魔法力、眷族を増やす能力じゃなくて、突出した身体能力にこそある。

ミノタウロスの斧をも受け止める馬鹿力。そして、残像すら生む速度で駆ける瞬発力。

俺とキルドウーヤのあいだにあった十メートル近い距離が一瞬で消し飛んだ。

まるでコマ落としのよう。

それほど、吸血鬼は素早い。

ルーティの悲鳴が聞こえた。

心配するなっ。大丈夫だからさ。

斜め上から俺の首を狙って振り下ろされるカギ爪を、低く身をかがめるようにしてやり過ごす。と同時に草を刈るような回し蹴りを放った。足を払われて体勢を崩したキルドウーヤの胸を、対空砲火のような蹴りで吹っ飛ばす。

少し、浅かったか。骨を砕いた感触はあるんだが、その程度では、不死身の吸血鬼にとっただいたいしたダメージにはならない。

驚愕の表情を浮かべる、キルドウーヤ。

怒りすら忘れたかのように、俺から飛び退くようにして距離をとった。

「馬鹿な……貴様、人間の分際で、なぜ私のスピードについてこられる？」

「さあて、なぜだろうねえ」

はぐらかすように、おどけて言う、俺。

実際は、そんなに余裕はないんだけどね。

心臓は限界まで鼓動を早めていて、いまにも爆発しそうだ。全身の筋肉が悲鳴を上げている。体温が異様なまでに上がり続け、冷や汗が流れては蒸発する。たとえようもない昂揚感が全神経を支配している。

……ただの普通の高校生が、どうしてこの世界で冒険者としてやっていったのか。

その答えが、この能力だ。

能力というよりは、肉体の欠陥を逆手にとったものでしかないけどな。

周知の事実かもしれないが、人間ってやつは、普段から肉体の能力をすべて使って生きているわけじゃない。使用しているのは全潜在能力のうちのほんの一部……せいぜい二割から三割つてところだ。もしも十割の全力を使うとなると、肉体はそのあまりの過負荷にたえられずに崩壊する。だから脳みそが制御装置の役目を果たして、体の力加減をコントロールしているのさ。

ただ、俺の場合、その制御装置が、ものの見事にぶっ壊れちゃまっている。

あれは、俺がこの世界にきたばかりのころだ。なにがなんだか分からなくて、あてもなく野山をうろついていた俺は、山中で一匹の魔物と出会った。たしかゴブリンだったかな。で、当然、かなうはずもなく、悲鳴を上げて逃げ出したんだが、頭の後ろを棍棒で思いつきり殴られた。結果を言うなら命は助かったが、深い傷を負い、そのときの後遺症で俺は肉体のリミッターを自由に解除できるようになったというわけだ。

だから俺は、人間の本来の能力を、完璧に自由に使用できる。

「アキヒコ、シキムラ」

キルドゥーヤが呟いた。

なにか、思い至ったことでもあるのか。

やつの瞳には、理解の色があった。

「そうか、どこかで聞いたことがある名前だと思っていた。く、くつくつく……！なるほどな。思い出したぞ。我らにすら匹敵する身体能力と、珍妙なる真名！なるほど、貴様がそうなのか！」

どこか引きつったような笑い声。

極めて獰猛な唸り声を、やつは上げた。

「アキヒコ・シキムラだと？ 二つ名のほうが通りがいいぞ ミスター《ノー・カウント》ッ！」

《ノー・カウント》。懐かしい名を口にするやつだ。

もう、とうの昔に、どこかの墓場に置き忘れてきた名前だ。

馬鹿なクソガキが馬鹿に生きたがゆえに手に入れた、くだらない二つ名だ。

そんなくだらないものでも、キルドゥーヤにとっては愉快だったらしい。

やつは舌なめずりしていた。

「バルログ公爵、ルドヴィツヒ將軍……そしてジャランバヤ王子！我らが同胞を幾人も葬り、地上支配という崇高なる計画を幾度にもわたって邪魔をした貴様を、まさかこの私の手で始末できる日が来ようとは」

古い話を持ち出すなよな。もう何年も前の話だぜ。

ていうか、全人類抹殺計画っぽい話なんぞ、そりゃ全力で阻止するっての。

キルドゥーヤは酔ったように恍惚として、両腕を大きく広げて掲げ、大声で叫んだ。

「《ノー・カウント》よ！貴様の滅びの日は来たり！」

「略してノーカン先生だ。親しみをこめて呼んでくれたまえ」

キルドゥーヤの横に立ち、その顎の下に銃口をめり込ませて、俺は言った。

「外してみせな」

この距離で、さっきまでのように外せるものならな。

轟音。

密着した状態から、ゼロ距離で銃弾が炸裂。最期の瞬間に吸血鬼が浮かべていた動揺と恐怖の表情をすべて消し飛ばし、鉛の塊が天井めがけてすっ飛んでいく。

頭部の前半分を失って、それでもまだ立っているキルドウーヤの、心臓と、後頭部に、俺は銃弾を叩き込んだ。無慈悲に、情け容赦なく。

キルドウーヤの死体はその場で灰と化し、それもすぐに淡雪のようになくなっていった。

おまえを倒すために、俺はいろいろと小細工を仕掛けたが……最初にして最後の小細工は、小細工を使わなくてもおまえを倒せるということ隠すことだった。それを見抜けなかったのが、キルドウーヤ、おまえの一番の敗因だ。

俺がなぜ《ノー・カウント》と呼ばれているのか。その理由は、いま見せたようなスピードにあるらしい。敵を殺すとき、秒読みすら許さずに瞬時にして殺すから、《ノー・カウント》なのだそうだ。自分でつけたわけじゃないがね。

だが、俺に言わせれば、《ノー・カウント》とは、カウントできない。つまり、数えられていない、という意味のほうが、らしい。つてもんだ。異世界からの侵入者。この世界の住人として数に数えられていないこの俺に、なんともふさわしい名前じゃないか。

……あと、魔法をひとつも使えないからだとか、なぜかレベルを測定できないからだとか、そんな理由もあるらしいが。少なくともいまの生徒たちに知られている由来は、そっちなんだよなあ。

「ひどいひと」

いつの間にか近寄ってきていたルーティが、言った。その声にはなぜか怒りがこもっているように聞こえた。なぜかうつつむいている。「そんな力があるだなんて。一階のミノタウロスときだって、本当は自力でなんとかできたんじゃないですか。……私、馬鹿みたい。嬉しかったのに。あなたの助けになれて嬉しかったのに」

「おいおい、なに言ってるのよ、ルーティくん」

それは、大きな誤解というものだ。

「言っとくけどね、さっきのはものすごく疲れるし健康にも悪いんだぜ。朝のコーヒーに入れる砂糖の量すら減らしてるお兄さんが、そんなほいほいとこんな力を使えるわけがないでしょうが」

事実だ。

吸血鬼の超反射神経と超動体視力を凌駕するために酷使した俺の肉体は、いまにもバラバラになりそうなほど苦悶の声を上げている。こんなの、最初から使いつばなしでいられるわけがない。どうしようもないときだけの、本当の意味での奥の手だ。今回だって使いたくはなかったがしょうがなく使った。

「だからな、ルーティ。あのときは、マジですごく助かったんだぜ。ありがとうな。……邪魔だなんて言って悪かったよ。俺が間違ってた。いつの間にかちゃんと立派に強くなってたんだな」

銃を仕舞って、ルーティの頭を撫でてやる。最初に出会ったときと比べれば、けっこう背も高くなって、成長したもんだなあ。

やっと顔を上げてくれたルーティは、ちょっと迷惑そうに眉根を寄せていたが、俺の手を払いのけたりはしなかった。

「ほんと、ひどくて、ずるいひと」

「まあね。大人はひどくてずるいものだよ」

「……いつか絶対に、あなたの横に立つにふさわしい術士になりますから」

蒼い瞳に決意を浮かべて、ルーティは言った。

俺はというと、けっこう複雑な気分だったりする。

「その気持ちは嬉しいけどね。あんまり俺には懐かなくてもいいよ。なにせ俺は、おまえさんの親父を殺したんだ」

そう。そしてそのときこそが、俺とルーティとの出会いだった。

稀代の屍霊術士にして狂気の復讐鬼、ガルデレール・エルディナマータ。

俺は五年前、あの恐るべき最凶のネクロマンサーとの死闘に辛く

も勝利し、そして、親をなくしたルーティを拾ったのだ。

とはいえ、子育てだなんてそんな器用なこと、俺に出来るはずもない。稀有なほどの才能を持っていたということもあって、マーキアス先生のところに残れることになったのだが……なぜかルーティは俺に懐いてしまっていたりするのだ。

で、俺はというと、そんなルーティの気持ちを嬉しく思う反面、ちよつと、いやかなりまずいんじゃないかと思ったりもする。

やっぱり俺はルーティの父親を殺した男だ。なにがどうなろうと、その事実だけは曲げられない。そしてそんな男と仲良くするなど、残された娘としてはどう考えたっておかしいだろう。

ルーティは俺を殺すべきだし、俺はルーティに殺されるべきなんだ。本当はね。

でもこの娘ったら、よく言えば味のある子なんだが……悪く言えば変わっている。

「そうでしょうか？ いたってまともだと思いますが」

「ええー、変だよ、ぜったい変だって」

「父は復讐心で我を忘れ、死ぬべくして死にました。……彼を妄執から救っていただいた先生にはお礼を申し上げます。それだけです。ですから私と先生の愛を阻むものなど、なにもないのですよ」

につこりとほほ笑む、ルーティくん。

うーん、なにかが阻んでほしい。

……隠してもしょうがないことだからはっきりと言っておくが、半年前、ルーティから愛の告白ってやつをされてしまった。

もちろん断ったがな。

ま、俺もルーティのことは好きだけども、これは恋愛感情なんかじゃないしな。かわいい妹ってかんじ？ だいたい俺は教師なのであって、生徒から告白されてもけつして手を出せないのである。ちやんとした同年代の恋人を見つけたいもんだ。

いつかきつと、まともな幸せというものをルーティに教えてやる。それが俺の使命なんだ。うん、きつと。

「矯正するおつもりなのでしたら、どうぞご自由に。どうせ無駄な努力ですけど」

こっちが不安になるほど自信たっぷりとしているルーティは、俺の右腕に手を触れた。その、血まみれの棒切れに。

「服を脱いでください」

「ええー？」

「変な想像をしていたいてもけっこうですが、今回は治療のためです。マスターからいただいた、とっておきの秘薬がありますから、やたらとときぱきとしたルーティの治療を受けながら、俺は、ため息をついた。

……幸せがダース単位で逃げていつてるんじゃないだろうか、これ？

学園の廊下にある窓から外の風景を眺めて黄昏ていると、背後から声をかけられた。

「また、無茶をしたそうだな」

「んー、そうなのよ。お兄さんってばもう、がんばりすぎちゃって体がガタガタ」

振り返りながら、肩をすくめてみせる。腕の傷はすでに完治している。ルーティの治療が適切だったというのもあるが、この学園には腕のいい治癒術士が山ほどいるのだ。

声の主は、女だった。長くて尖った耳を持つエルフ族。しかもただのエルフではなく、ハイエルフと呼ばれる上位種族だ。年齢は二十代前半つてところだが、長寿を誇るエルフ族だから見た目は信用できない。身長は女にしては高いほうで、たぶん百七十五センチくらいか。腰まで届くストレートの金髪は流れるように、本物の黄金のような輝きを放っている。高い鼻と切れ長の涼しげな瞳、恐ろし

いほど整ったかんばせ。そしてエルフの女というのはたいていがスレンダーな体つきをしているものなのだが、こいつはちがった。やたらと豊満な胸とくびれた腰、肉付きのいい尻や脚のラインが素晴らしい肉感的。それはゆつたりとした緑色のローブに包まれていてもなお、男の視線を魅了してやまない。

エルフ女の名前を、シエラザード・ウォーティンハイムといったこの学園の教師のひとりにして、俺がかつて所属していたパーティのメンバーでもある。

「《イゾルデ大迷宮》に行ってきたのか」

「生徒がひとり迷子になっちゃったもんでね」

「おまえのせいではない。気にする必要はない」

シエラザードの声は硬く、冷たく、そして俺を気遣う慈愛に満ちていた。

ウィルス少年は結局、死体すら見つからず、二度と地上に戻ることはなかったのだ。

ルーモニアという名の大富豪のことは聞いたことがある。救出に向かわされたのは、そのあたりが理由なのかもしれないが……俺にとってはどうでもいいことだった。

大切なのは。

あの少年は、何も知らないただのガキにすぎず、そして俺はそんなガキですら満足に助けてやることもできなかった、真正正銘の役立たずのクズだってことだ。

「気にするでしょ、普通。生徒が死んだんだよ。教師としてはね……やってられないよ」

いまの言葉、自分でも気だるげに聞こえた。

シエラザードの瞳が、険しさを帯びる。

「おまえのせいでは、ない」

「分かってるよ」

「いいや、分かっていない。おまえはいつもそうだ。ひとりで勝手にすべてを背負い込む」

……背負いたくて背負っているわけじゃないさ。ただ、仕方がないだろう。気付けば勝手に背中荷物が重みを増しているんだ。そしてこれを捨てることなど、俺にはとても出来ない。捨てれば簡単に楽になれるのにな。不器用な自分の性根が恨めしい。そして背負いきれない自分の弱さには反吐が出そうだ。

「しかも、またリミッターを外したのか」

「あら、なんで知ってるのよ。……ちょっとだけな。今回の敵ってけっこう強くてさ」

「死ぬぞ」

「はっはっは、大げさな。まあ明日からしばらくは地獄の筋肉痛だろうけど」

「……いまさら忠告することではないが、おまえの肉体はすでに全盛期ではない。十年前からの限界を超えた酷使によってボロボロなんだ」

そんなこと、知っているさ。

自分の肉体なんだから、俺自身こそが誰よりもよく知っている。

もう昔のように大剣も使えず、銃などに頼っていることから、それは明らかだ。

いまの俺には、全盛のころの十分の一ほどの強さもないだろう。けど、それでも俺は戦うよ。

「でもさあ、仕方ないじゃん。生徒の安全を守るためなんだから」

俺がそう言くと、シェラザードはなぜか悲しげに、俺を見た。

つらいな。

仲間にそういう目で見られることのつらさといったら、もう、すごいぜ。

「それはともかくとして」

つらかったので、話題を強引に切り替えた。

「イズルデに入ってみて、どうもおかしいと思ったんだが……やたらと魔物どもの動きが活発だ。そこにいるはずのないほどレベルの高い魔物が普通にいたりするし、ちゃんとした計画を立てて動いて

いる野郎までいやがった。なにか、きな臭い」

「大きな事件の前触れだとしても？」

「さあて、ね。まだ分からんが……その可能性も十分にあるってことだ」

「ゾルディアス先生には報告したのか？」

「うん。ま、先生のほうは先生のほうで、ちょっと動いてるみたいよ」

「……おまえは、動くのか？」

「はっはっは、いい冗談だ、シエラザード。こんなおっさんになりかけのお兄さんに精力的な活動なんて不可能よ。状況を見て、どうしても必要だと思ったなら戦うまでさ」

まだまだ、なにがどうなっているのかも分かっていないしな。

闇雲に戦っていられるだけの体力も精神力もあつた十年前とは違って、いまの俺にはかつてあつたすべてが足りない。残つた数少ない力の使いどころは、よく考えて見極めておかなくちゃな。

「……それにな。どうにもこうにもしょうがないことなんだが、俺の時代はもう終わってるのよ。明日を作る役目は若い連中に任せるさ。お兄さんはゆっくり確実におっさんになって、そしてジジイになって死んでいきたいね」

ああ、そうだ。俺の物語はすでに幕を閉じている。パーティのメンバーも、ひとりとは消息を絶ち、ひとりとは遠く離れた地に旅立ち、そしてあるいは死んだ。六人は散り散りになって、すぐに連絡を取れるのは、こうして同僚として働いているシエラザードだけだ。

黄昏を感じる。

俺の物語ってやつは、きっと、あいつが死んだときに終わりをむかえたのだ。

と、俺らしくもなく感傷に浸っていると、いきなりむんずと襟首を掴まれた。

目の前にはハイエルフの壮絶な美顔。

「な、なんですかシエラちゃん」

「飲むぞ。付き合え」

「はいい？」

いきなりなに言い出すの、この子？

びっくりしている俺に有無を言わず、シエラザードは歩き出す。
「今日は飲む。とことん飲む。おまえのその不景気な顔が蕩けてなくなるまで飲む」

「いや、ちよつ、待つ、俺はあんまり酒には強くないんだって知ってるっしょ!？」

「知っている。知るか」

どっちだよ。

「心配するな。私のおごりだ。先日、いい店を見つけてな。人生が変わる気分を味わえるぞ」

にやりと笑う、シエラザード。超絶の美形ぞろいで知られるハイエルフの不敵な笑みつてやつは、実際に間近で見るとゾッとする。なんていうのかな、本能が告げる危険ってかんじ？

……この子、昔はこんなキャラだったかしら？ などと疑問に思う。

結局、二日酔いと筋肉痛の二重苦によって、俺はつぎの日の出勤をあきらめざるをえなくなった。

まったく、やれやれ、しょうがないな。

いい仲間を持つと苦労する。

だからこの世はやっぱり、悪いことばかりじゃないのだな。

《ティーバック》

目が覚めた。

あたまが痛い。

視界がぐらぐら。首がぐらぐら。

「……最悪だな、これは」

ひどい頭痛。口の中が粘ついていて気持ちが悪い。胃腸が重い。胸焼けがする。

昨夜、飲みすぎたせいだろう。

俺は、見事なまでのステータス異常、その名も二日酔い状態に陥っていた。

「うぐおお……」

うなり声を上げながら、なんとか半身を起こす。

ボッサボサの髪のまま、ぼんやりと思考回路を回転させてみた。

……どうして二日酔いなんかになってしまったんだっけ？

俺は、あまり酒を飲めるような体質ではない。それは自覚している。だからいつもは、こんなに気持ちが悪くなるほど飲みすぎるということは絶対にしない。

となると、こんなになるまで俺に酒を飲ませた人物が存在すると思うのだが。

いた。

いましたよ、奥さん。

俺を二日酔いのどん底にまで叩き落した犯人が、すぐ横に。俺を床で寝させておいて、自分は柔らかいベッドで安眠なさっているお方が。

金細工のような長髪と、白磁の肌。おそろしく整った容姿。どにかいバストと魅惑的なヒップ。とにかく抜群のプロポーションのハielフ、シエラザード・ウォーティンハイム。ようやっと思ひ出した。

あのウィルス少年行方不明事件から、はや一週間。

俺は昨夜、このエルフ女に連れ去られて、無理やりに酒を飲むことを強要されたのだ。いったい何件の飲み屋を梯子したのか定かではない。

よくよく周囲を見渡してみれば、ここは俺の自室ではなく、教員寮にあるシエラザードの部屋だ。俺の部屋はこんなに落ち着いた雰囲気の高級家具とか置いてないもの。

昨夜の状況を、ちよつと回想してみよう。

『……だあいだいなあつ、……ひつく！ あきひこおつ！ 聞いているかあつ！？』

『あ、はい。聞いてます。はい』

『ようし！ ……だいたい、おまえは、無茶をしすぎる！ むかしつからそうだ！』

『いや、でもさあ』

『くちごたえするなああつ！』

『ごめん、謝るから声をもうちよつと低くしよう、静かにしよう、な？』

『ん……おうつ……わかつたあつ、ひつく！ うつく……うえええええつ……』

『ど、どつたの、シエラちゃん』

『わ、私だって、ほんととはこんなに怒鳴りたくないっ……でも、おまえが、おまえがいつまでも無茶ばかりして、私を心配させるから、仕方なく……うえええええつ……』

『ごめん、ほんとごめん。これからは気をつけるから。泣き止もう？』

『う、ううつつ……ぐすつ……ひつ、ひつく……』

『相変わらずの絡み酒のうえに泣き上戸か……手に負えねー』

『なんか言つたかあつ！？』

『いえ、なにも言つてないです、はい！』

『……まあ、いい……。そんなことよりもおつ！ おまえは最近の

世界じよーせーについて、どう思ってるんらろっ!？」

『いや、まあ、大変だよ、いろいろと』

『そうらろ!　だからあ、わらひが、じょーおーさまになって、すごいことしてやるんらろ』

『ははあ』

『みんなお酒のみほーだいできるよーに、ほーりつ変えるんらー!』
『えっ』

『すごい、いい気持ちらー!。みんなお酒飲んでいい気持ちになっら、戦争だつてしなくなるんらよ!　ぐっどあいでいーあ!　んんっぐ、んんっぐ、ぐびぐび』

『シェラちゃん、もうヤバいつて……このへんにしところか?　そろそろ寝ようぜ?』

『うるさい……だいたい、おまえ、まだぜんぜん飲んでないらお』

『いや、俺は下戸だし、勘弁してよ。もう許容量を超えちゃってるし』

『うるさい飲めーっ!』

『な、なにをするきさまー!』

『……えへへー、あきひこー、いっしょに気持ちよくなるー』
などなど。

もはや、人格崩壊してらっしやったよね、シェラザードさん。

昨夜のことは、俺の記憶の中に封印して、けっして外には出さない。墓場にまで持つていくことに決めた。

……というかね、シェラちゃん。

なぜに下着姿なの?

そう、なにやら気持ちよさそうに安らかな寝息を立てているシェラザードは、普段着のローブを足元のほうへと脱ぎ捨てていて、扇情的な下着姿を惜しげもなく俺に晒していたのだ。しかも黒か。破壊的にセクシーだな。

もしも俺とシェラザードがまったくの他人であったなら、俺はここでこのエルフ女を襲ってしまっても無理はなかった。

だが、残念ながら いや、なにが残念なのか俺にはよく分からんが 俺とシェラザードは、お互いのことを知りすぎているほどに知ってしまったている、元・冒険者パーティーのメンバー同士だ。長いことダンジョンの探索をやっていると道中でいろいろあるわけで、俺もシェラザードも、お互いの裸を見たことぐらいはあったりする。

そういうわけで、理性はぜんぜん大丈夫。

俺は心の中で素数を数えながら、とりあえずシェラちゃんを起すことにした。

ちなみに俺はちゃんと服を着ています。念のため。

「おーい、起きろ。そろそろ起きないと今日の授業がやばい」

「ん……？ んー、んう……まだあと五時間……」

「五時間？ 五分じゃなくて？」

「アキヒコ……おまえも知っている通り、われらの寿命は千年を超える。ゆえに時間にはけっこうおらかなのだ……人間がいうところの五分が五時間、十分は三日になる……むにゃむにゃ」

「アバウトすぎるだろエルフ族。いいから起きろってば。あと服も着ろ」

ベッドの下に落ちていたローブを、芸術的な肢体の上にかけてやる。布団ぐらい着ないと風邪をひきそうなものだが、まあ、エルフだから大丈夫なんだろう。華奢に見えて、けっこう丈夫な種族だしシェラザードはぐずぐずしながらも身を起こした。寝ぼけまなこのまま、くしゃくしゃと頭を掻いている。

「……私はどうしてこんな格好をしてるんだ？」

「寝ぼけて脱いだんだろ。言っとくけど、俺が脱がしたわけじゃないよ」

「ふん……おまえにそんな度胸があつたなら、私は苦勞していない」

「……」

「なんの話？ つーか、俺はもう帰るわ。さっさと風呂に入って、学校に行ってくる」

「うん……」

「シェラちゃんもさっさと目を覚ますように。で、ちゃんとメシ食ってから働くんだぞ」

「わかった……」

ほんとに分かってるのかねえ？

ぼんやりしたまま生返事を繰り返すシェラザードを見てみると、ちよつと不安になってくる。

こう見えて普段は冷静沈着、クールな言動を崩さない大人の女だ。その際立った美貌と実力、頼りがいのある性格のため、学園の教師、生徒を問わず、絶大な支持を集めている。学園の内外にファンクラブが乱立していて、統合するかしないかで揉めに揉めているんだっけ、たしか。

そんな超人気美女なのだが……その実態というか、私生活はけっこうだらしないと知っているのは、俺を含め、数少ない人物に限られる。

なにせ酒は飲むわ飲まれるわ、三食のうち二食は平気で抜くわ、時間にはルーズだわ、何日も同じ服を着ていたりするわ、脱いだ下着で部屋を散らかすわ、とんでもない不良エルフだ。

俺と出会った当初は真正正銘、まったく隙のないクールビューティだったんだけどなあ。どうしてこうなっちゃったのかしら。

ため息をついていると、不意にシェラザードは立ち上がった。

「水う……」

呟いて、ふらふらーっと部屋の外に向かっていく。キッチンにでも行くのだろうか。

俺はその後ろ姿をなんとなく見送って、ぎょつとした。慌てて視線をそらし、全力で素数を数える。

……ティーバックか。侮れん子だ。

〈問題児〉

俺もいちおう教師なので、当然、受け持っている科目の授業がある。

迷宮探索のための基本講習……ようするに、初心者のためのチュートリアル。

ダンジョンを歩くときにはこんなことに気をつけましょう、こういうことは危険だからやらないようにしましょう、こういう場合はこういうふうに対処するのがよろしいでしょう、と、そんなことを教えている。

当然、ちよつとレベルが高くて迷宮探索に慣れてきた連中なら、こんな授業には見向きもしない。俺の授業を受けるのは、ピカピカの新人生やら、ヒヨつ子やら、とにかくダンジョンのダの字も分かっていないような超初級者ばかり。

ま、ちよつとショボイのは否定しないが……俺の経験を活かすことによって生徒が育ち、優秀な冒険者にでもなってくれるなら、と思うと、やりがいのある仕事だと感じる。

今日は朝から授業開始。

場所は、学園の誇る超最低ランク初心者向けダンジョン、ただの洞窟。洞窟だけど松明がいろんなところにあるおかげでかなり明るい。いちおう魔物が出没するものの、数は少ないし、スライムやら蝙蝠もときやらの最弱種族ばかり。

とはいえ、やっぱりダンジョンはダンジョンなのである。

「うひょー、俺つえええええ」

ドワーフAが飛び出した！

スライムはおびえている！

ドワーフAのこうげき！

「くられ必殺の斬魔剣　！」

しかしこうげきは外れてしまった！

「あちゃー、はずれちまったよ。しかたねー、もういっぱいだあー」
スライムのターン。

スライムは怒っている！

スライムは仲間を呼んだ！

スライムBがあらわれた！

スライムCがあらわれた！

スライムDがあらわれた！

スライムEがあらわれた！

スライムFがあらわれた！

スライムGがあらわれた！

なんと……スライムたちが合体していく！

スライムたちは、キングススライムブロー三世になった！

ドワーフAはおびえている！

「は、はわ、はわわわ……」

ドワーフAはにげだした！

しかしまわりこまれてしまった！

「ぴぎゃー！　たすけてええええっ」

ドワーフAは泣き叫んでいる！

キングススライムブロー三世の攻撃！　ビッグバンアタック！

俺は、ドワーフの少年がスライムの巨体に押しつぶされてし

まう前に、銃の引き金を引いた。

ドガン、という凄まじい音が洞窟内に響き渡る。

巨大な合体スライムは弾丸一発で木っ端微塵になって吹き飛んだ。
屍餅について呆然としているドワーフくんに歩み寄る。

「あのねー、きみ。勝手に先行しちゃ駄目だって、さっき言ったで
しょ？　ダンジョンは危険なんだから甘く見ちゃいけないの。わか
った？」

涙と鼻水を垂れ流しながら、ドワーフ少年はコクコクとうなずい

た。

俺はその頭を撫でてやってから、うしろに振り返る。

二十人ほどのヒヨっ子たちが、一様にぼかんと口を開けていた。

「はい、注目。スライムは弱っちいモンスターだけど、油断しちゃいけません。半固形だから刃物の攻撃は通じにくいし、消化液を吐き出してこっちの防具を溶かすし、動きは意外と素早い。それと、すぐに仲間を呼ぶ。いまみたいに合体されたら、きみらじゃ手も足も出ないよ。だから先手必勝、さっさと鈍器でグツチャグチャに潰すとか、魔法で吹き飛ばすとか、そういう対処がベターです。消化液が目に入ったらすぐに聖水で洗い流して、保健室に直行してね。分かったひと、挙手してー」

はい、と、手を挙げる生徒たち。うんうん、じつに素直ですばらしい。

と、こんな感じで、俺の学園での仕事は進んでいくのだ。

昼ごろには、今日の受け持ちの授業はとりあえず終わった。

ここからはのんびりと昼寝して定時には帰宅、といきたいところなんだが……そうもいかないのよね、これが。

空を見上げてみると、ちょうどいいところにひとりの生徒が飛行していた。

「おい、そのきみ、ちょっといいかー？」

「なんスカ、せんせー？」

バッサバッサと翼を羽ばたかせながら降下してきたのは、バードマンの男子。

バードマンとはその名の通り、鳥と人間が融合したような姿をしている、亜人の一種だ。鳥の頭と翼と羽毛、人間の手足と知能。それらをあわせもっている。商才を持つ者が多く、仲間想いで、人間

族とはけっこう友好的な関係を築いている、気のいい連中。

見た感じ、高等部の生徒に見えるバードマンくん、俺はちょっと頭を掻きながら言った。

「いやー、五番街に行きたいんだけどさ、いい足がないんだよね。よかつたら乗せていつてくれない？」

「パーティールームのところにスか？ いいスけど、爪で掴むことになりすよ」

「だいじよぶ、だいじよぶ。俺つてけっこう丈夫だから」

「そつスか。んじゃま、失礼して」

と言つて飛び上がったバードマンくんは、その二本の脚の先についている鋭いカギ爪で俺の両肩をがっしりと掴み、そのまま苦もない様子で舞い上がった。さすがは宅配便なども請け負うことが多い種族だ。俺の重量なんてものでもない。

あんまり優雅でもない空の旅を楽しむこと十五分。

やっとこさ見えてきたのが、リノティア学園の居住区五番街。

俺はバードマンくんにお礼を言つて、地上に降り立った。

この学園には生徒たちによって組まれたパーティーが数え切れないほど存在していて、そのひとつにつきひとりの教師が担当官として付き添っている。

担当官のやるべきことは多い。パーティーのメンバー、ひとりひとりの健康管理、精神面のケア、進路指導、戦闘の訓練、多くの学業の指導、スケジュールの管理、果ては恋路の相談に乗ったりと、とにかくなんでもやらなくちゃならない。

……そう、当然、俺にも担当するパーティーがあるのだ。

教師よりも生徒の数のほうが圧倒的に多いので、ふたつやみつつのパーティーを担当するひとも多いが、俺が面倒を見ているのはたったひとつのパーティーだ。

《リノティア・バーニングボンバーズ》。それが、俺が担当するパーティーの名だ。

学園では、生徒たちの組んだパーティーのために、部屋が設けら

れている。そのパーティー専用の一室だ。これをパーティールームという。生徒たちはそこを拠点として寝泊りしたり、戦術を組み立てたり、アイテムを保管したり、いろんな計画を立ててダンジョンに挑んでいくわけだ。もちろん、個人のための個室も、ちがう場所に用意されている。

で、パーティールームのみで構成された建物がいくつもあつて、これの規模だけでもとつともないことになっている。基本的に俺の世界での高校の部室みたいなものだが、ただの学生寮だと甘く見ていると、度肝を抜かされることになってしまう。なにせ増設に増設を繰り返した結果、どここの大都市なのかって規模にまで膨れ上がっているからな。

パーティールームにもレベルというか、序列がある。より優れたパーティーほど、広くて居心地のいい、高級な部屋に入ることができる。学園の発展に貢献したり、メンバーのレベルが上がれば上がるほど、高い階層の、豪華な部屋をパーティールームにできるのだ。

かつて俺が所属していたパーティー《黄金の栄光》がパーティールームにしていたのは、どこよりも背が高く美しい建造物の、それそのものだった。つまり、たとえるところなら、超高級マンションの一階から最上階まで丸ごとぜんぶ、《黄金の栄光》の拠点として使っていたのだ。あそこはもうほとんど王侯貴族の住むところだったな。単なる学生の住むところとしては凄まじすぎた。

《英雄の神殿》と呼ばれるあの建物を目指すことが、ほとんどの生徒が胸に秘めている目標のひとつだったりする。

あそこを使ったパーティーにいたというだけで、将来は国家の要人になること間違いなし。宮廷魔法顧問とか、將軍だとか、そういった輝かしい地位が約束されているとまで言われている。実際、それは間違いじゃない。いや、俺はただのしがない用務員だが。

よつするに、餌だ。美味そうな餌をちらつかせて、生徒たちのやる気を煽っているわけだな。

あまり気味のいい話じゃないが……やる気は必要だ、たしかに。と、俺の担当しているパーティーの部屋を見つけた。

どこよりもみすばらしく見える建物の、一階の、一番奥の部屋。別名、《初級者の寢床》だとか呼ばれる部類の、もっともレベルの低い部屋のひとつ。オンボロの、小汚いところだ。

木造の安っぽくて薄っぺらい扉をノック。

「はい、先生ですよー」

返事はない。

居留守のようだ。

俺はさつさと扉を開けた。鍵は、かかっていなかった。

室内をちよつと見渡してから、ソファに腰掛けてふんぞり返っているひとりの生徒に眼を向ける。

椅子に座ったまま机の上に脚を投げ出している彼の名は、ガゼル・デイブロ。

高等部二年生の、剣使いの戦士だ。

ぼさぼさの白髪。紅の瞳。先の尖った、長い耳。身長は俺よりもちよつと低いぐらいか。シャツの前のボタンを外しているせいで、褐色の肌が覗いている。瘦身は鍛え上げられていて、しなやかな獣のよう。女子に好かれる顔立ちをしているのだけど、眼に宿す光がギラギラとしすぎている。むやみやたらと殺気をまき散らす、手負いの獣のような少年だ。

ガゼルの種族は、エルフだ。それもただのエルフではなく、ダークエルフだった。

この学園は信じられないほど広いが、ダークエルフの生徒となると、けっこう珍しい。

その理由は簡単。ダークエルフが迫害を受けている種族だからだ。エルフは神の栄光を浴びて育つ、清らかな精霊のような種族だという。

それに対してダークエルフは、かつてエルフだった一族が、悪魔の誘惑に負けて暗黒面に墮落した、忌むべき邪悪の種族なのだ、と

かなんとか。

エルフとダークエルフの対立は有名だし、ドワーフやホビットもあまりいい顔はしない。人間族とは、比較的には友好的な関係だが、宗教によってはダークエルフを敵としているところもある。

というわけで、ダークエルフは滅多なことでは人里に姿を現さない。山奥とか洞窟とかの僻地に集落を作って、ひっそりと隠れ住んでいることが多い。

まあ、俺に言わせてもらえば、ダークエルフが邪悪な種族だっていうのは、ただの迷信だ。たしかに、ダンジョンでは敵として出会うこともある奴らだが、人間族の海賊や山賊と遭遇することのほうがずっと数多い。

人間やエルフにだって悪い奴といい奴がいる。ダークエルフだって同じなのだ。それを学園がちゃんと承知しているからこそ、こうしてダークエルフを生徒として受け入れている。ダークエルフの教師だっているんだぜ。

で……このガゼルくんがいい奴なのか悪い奴なのかというと、だ。「ガゼルくん、また勝手に先行してトラップにひっかかったんだって？　だめだよー、そういうことしちゃ。いつも言ってるでしょ、ダンジョンでは慎重な行動を心がけてね、って」

「うるっせーよボケ。人間のくせに俺に意見してんじゃねーよ。死ぬ」

うむ。クソガキです。

やれやれ……もう担当官になって三ヶ月が過ぎようとしているのに、ぜんぜん懐いてくれないなあ。もうずっとこの調子よ、この子。キラキラしたまま、トゲだらけ。俺を見る目は完全に敵を見る目です。

だけどもめない、俺。泣いちゃ駄目。

「あのね、ガゼルくん。俺はこんなんだけど、いちおう教師なの。きみらのパーティーの担当官なの」

「はあ？　知らねーよ」

ぬう……手ごわい。

ガゼルはけっこう実力があるのだけれども、プライドが高くて攻撃的で、チームワークを軽視するので、いろんなパーティーから追い出されてきたという経歴がある。

俺もいままでにそれなりの数のパーティーを担当して、たくさんの生徒を見てきたわけだけど……正直、ガゼルの扱いには手を焼いている。

いったいどうすればいいんだろう？

この生徒どう付き合うのが、俺の教師人生の行く末を占うような気がする。

どうすればいいのか……？

「やっぱり手っ取り早く殺すしかないよな」
そうそう、めんどくさい生徒はぶっ殺しちゃおう。

「うん、マジで洒落にならないよね、ルーティくん」

「そうですか？ 古今東西、気に入らない相手は迅速に殺害してしまおう、というのが常套手段だと思いますが」

俺は背後に振り返って、サディスティンの口を左右に思い切り引っ張った。

「いひゃいふえふ」

うーむ。すべすべもちもちしていて素晴らしい触り心地。ルーティめ、肌の年齢は零歳児レベルじゃないのか？ それにしてもこれは意外と楽しい。

しかし、なんだな、ルーティくん。マジでネクロマンサーよりも忍者とか暗殺者のほうが適性なんじゃないのかね、きみは。神出鬼没すぎるぞ。

俺はルーティの口から手を離した。

ルーティは赤くなった口の端をさすっている。こら、俺を恨むような目で見上げるな。

「攻められるのは好きじゃありません」

「ああ、攻めるのが好きなんだよね」

「はい！」

うわぁ、すごい満面の笑顔。

「ばかじゃねーの、くだらねえ」

うん……否定できないよ、ガゼルくん。

「ま、まあ、ともかく、だ。集合に応じてくれただけでもよしとしよう。珍しく素直に来てくれたね、ガゼルくん。先生はうれしいぞー、マジ泣ける。……うつ……うつ……ふぐうつ、ぐつ、うつうつうつ……」

「泣くなよアホ。だいたい俺だつて来たくて来たわけじゃねーよ。ウサギが泣きまくってウゼーから、しょーがなく来てやったんだよ」
ウサギ……レミリア・キュアフか。なるほど、彼女が頼んだというなら、ガゼルが素直に召集に応じたというのも納得できる話だなにせ、すごいからな、彼女。

……それで、そのレミリアは、どこにいるんだ？

「先生。レミイなら先ほど、蝶々を追いかけて出て行きましたよ」

「ほう、ちょーちょ。レミリアは何歳だっけ？」

「私と同年ですが」

「うん……ちょっち頭が痛くなってきたかな。まあいいや。よし、探しに行こう。ガゼル、ルーティ、手伝ってくれ」

「やだよ、バーカ。めんどくせえ。死ねボケ、カス」

「ルーティくん、頼む。俺は先に行ってるから」

「わかりました、先生」

につこり笑うルーティくと、しかめっ面のガゼルを残して、俺はオンボロパーティールームの外に出た。

背後から、ルーティとガゼルのやり取りが聞こえる。

「そういうわけで連行しますね」

「あ？ んだデメエ、ふざけてんじゃねーぞゾンビ屋、いい度胸……うつ、ちょっ、ふ、ふざけんじゃねえっ、やめっ、やめろおおうつああああああっ」

「確保ー」

なにが起こっているのか、知りたくない。

ルーティ、ガゼル、そしてレミア。この三人が、俺の担当するパーティー《リノティア・バーニングボーンバース》のメンバーだ。

いまだ三人しか集まっていない弱小パーティーだけど、必ず一流の冒険者に育て上げてみせる。と、俺は決意を固くしている。

……が、現状、三人目が蝶々を探して行方不明。

お先は真っ暗なのである。とほほ。

《集合》

「はい、ようやく集合できましたね！ 予定よりも二時間ほど遅れましたが！」

よかったよかった。

二時間かけてようやく《リノティア・バーニングボンバーズ》最後のひとり、レミリア・キュアフさんを見つけることに成功しました。

学園中を走り回ることになりましたが、まあ、衰えたとはいえ、元冒険者なので、この程度のことでは呼吸を乱すということはないのだ。ははは、地獄の訓練を耐え抜いた昔の俺に感謝する。

で、パージェイルームに戻ってきました。

適当に三人を座らせて、俺はその前に立つ。

レミリア・キュアフは獣人族……ライカンスロープとか呼ばれる一族が出身の女の子だ。ふわふわと波打つピンク色っぽい銀髪を長く伸ばしていて、綺麗というよりはかわいらしい顔立ち。やたら胸がでかいのにほっそりとした体つき。そして頭の上からは、彼女の最大の特徴、ウサギのそれに酷似した耳が飛び出している。

ライカンスロープは人間と獣が混ざったような容姿と能力を持つ種族。ま、ひとくちにライカンスロープと言ってもいろいろいるとあって、普段は人間そのものの姿をしていて自在に獣へと変身できる奴とか、レミリアのようにもとの姿が人間と獣とを合体させたような子だっている。全体的に人間に対して友好的で、親交のある種族なんだが、まだまだ詳しいことが分かっていない。

レミリアは反省しているのか、うつむいてしょぼくれていた。耳も本人の感情の影響を受けて、だらんと垂れている。

「ごめんなさい」

「あー、いいいいいよ。でもこれからは気をつけてね」

「はあい！ 先生は優しいね！ 大好き！」

ぱあっと明るい笑顔を広げるレミリア。耳も元気よく伸びる。

あああああ、いい子だなああああ。なんて素直で純真で素晴らしい子供なんだろう。

思わずこぼれた涙をコートの袖で拭う。

「レミリアくんはマジでいい子だよね……先生、感動してきた……ううううっ、泣けるよ本気で。……いつもいつもサディスティンやら不良のクソガキやらに苦労させられてきたけど、きみのような生徒がいるというだけで俺の人生は報われる……くうっ」

「死ねよノーカン」

「先生、あとでふたりつきりでお話しましょうね？」

「うん、そろそろ本題に入ろうか」

ごほん、と咳払い。ちよつとわざとらしくたかもしれない。

「えーとね、レミリアくんは次回からは気をつけてね。かつちりと時間厳守、五分前行動は基本中の基本。これが守れないと命がいくつあっても足りないよマジで。ダンジョンではちよつとこのことで死に繋がるんだから。……集合時間に五分遅れただけで仲間が腹に剣をブツ刺してきたりさあ」

「嘘つけ。そんなめちゃくちゃな奴がいるかよ」

いいえ、いるんですよガゼルくん。世の中にはね、まだ若いきみの想像などはあるかに超越した、めちゃくちゃな鬼リーダーが存在したのですよ。ティーンエイジのトラウマだ。

「いまのは極端な例だけだね。でもそのぐらいのペナルティを背負う覚悟が必要、ってこと。いつも言ってるけど、パーティーにとって大事なのはチームワークだよ。それがちよつと時間に遅れただけで崩れ始めることだってある。わかったかな？」

「はい、先生」

「はあい」

返事をしたのはルーティとレミリアだけ。

ガゼルくんはそっぽを向いてガン無視である。どうしようこの子、挫折しそう。

肩を落としてため息をつく。くそう、負けるな俺。

「えーと、それじゃあ、本題に入ろうと思う。……きみたち、どうして呼び出されたと思う？」

俺の質問に対して、ガゼルくんは無視。レミリアは首をかしげて考え込むだけ。ルーティが口を開いた。

「いよいよ私に愛の告白を……」

「ちがうちがう。生徒に手を出す趣味はないから」

「では、一昨日の《ロイソス山岳遺跡》での探索失敗が原因ですか？」

「あ、うん、そうなんだけど……いきなり真面目になったな……まあ、いいや」

きつとこの場を和ませるためのルーティくんなりの冗句なんだよね、うん。

「んー、俺はルーティくんからちょっと聞いたただけなんだけど、ずいぶんひどいことになったらしいね。失敗した理由をもっと詳しく教えてくれるかな？」

「地下一階でガゼルが猪武者のように独断専行したあげく、見事なまでの無様さでトラップにひっかって猛毒の霧を発生させました。私とレミイも巻き込まれ、全身を蝕む毒の恐怖と戦いながら、なんとか遺跡から逃げ出すことが出来ましたが、脱出したとたんに三人とも意識を失いました。以上です」

「……ああ、適切で分かりやすい説明だ。ありがとう、ルーティくん」

なにこの問題だらけのパーティー。

まあ、今までたいした対策もできなかった俺にも責任はある。

「で、今回のような失敗を二度と犯さないように、どんなことをすればいいと思う？」

「ガゼルがパーティーから抜ければいいのでは？」

「んだとこの根暗女」

平然と言つてのけるルーティくと、牙を剥いて怒りを燃やすガゼル。

険悪な空気、レミリアはただおろおろとするばかり。

俺は頭痛が痛くて馬から落ちて落馬する。

「まあまあ落ち着きなさい。ルーティ、たしかに今回のことはガゼルの突進が原因だと思うけど、本当の原因はもっと根深いところにあると思うんだよ、俺は」

「根深いところ、といいますと？」

今度はルーティが首をかしげる。

うん、簡単なことなんだ。

「このパーティー、盗賊がいないよね」

ガゼルは剣士。

ルーティは屍霊術士。

レミリアは吟遊詩人。

「ちょっとどころじゃなくバランスが悪いんだよなあ。オーソドックスに盗賊と僧侶と魔法使いが欲しいところだね。とくに盗賊と僧侶は必須。……メンバー集めぐらいやろうよ、みんな……」

「興味ねーし」

「忘れてましたあ」

「右に同じく、忘れていました」

駄目だこいつら。どうしよう。

「……よし、今から軽くダンジョンに潜ってこようか」

ま、結局、実戦形式でやってみるのが一番手っ取り早いのである。「今回は特別に俺が盗賊をやります。もちろん戦闘には参加しないよ。ダンジョン内部や宝箱に仕掛けられたトラップの解除が主な仕事だね。で、盗賊つてすごいなー、仲間にいると便利で嬉しいなー、と実感してもらえようにがんばります俺」

いわゆる実践販売というやつである。がんばれ俺。

〈戦闘〉

てなわけで作ってきました《ロイソス山岳遺跡》。

地下一階を生徒三人と先生一人の変則パーティーで探索中。

ここはそれほど危険度の高くない、中級者向けのダンジョンだ。

黄土色っぽい煉瓦が床や壁に広がる、山の内部に網目のようにして張り巡らされた、かび臭いダンジョン。かつての権力者が財宝を隠すために建築させたとされているが、もう発見からかなりの年月が経っているため、めばしいお宝は奪いつくされていて、いまでは魔物が徘徊するだけの寂しい場所だ。

ここの最下層は地下二十階。挑戦可能レベルは九〇。《リノティ・バーニングボンバーズ》のメンバーは全員が挑戦条件をクリアしている、が、そういえば詳しいレベルは把握してなかったな。

先行している俺は、後ろを振り返って訊いてみる。

「きみら、レベルいくつだったけ？」

「一八〇」

と、ガゼル。

「一二〇です」

と、レミリア。

「一九〇です」

と、ルーティくん。

「あれ？ ルーティは一七〇じゃなかった？」

「はい。あのあと調べたら一気に上がっていて驚きました」
ええええ？

たった一度の探索で二〇も上がるものなのか？

たしかにあのとき出会った魔物どもは強敵揃いだったし、最後に倒した吸血鬼野郎は手ごわかった。たくさん経験を積んだらうと

は思う。けど、それにしたって上昇率が半端じゃないだろ……。普通は何度も迷宮に出入りしてやっと一か二ほど上がるかどうかって話なのに。この子、マーキアス先生が見いだしただけはあって、とんでもない可能性を秘めているのかもしれない。

で、「ルーティちゃんすごいすごい」と飛び跳ねて喜んでいるのがレミリア、眉間に皺を寄せて不機嫌そうになったのがガゼル。

「ああ？ てめえ、いつの間にそんなにレベル上げやがった？」

「あなたが惰眠を貪っているうちによ、ガゼル」

自慢げに鼻を鳴らすルーティくと、齒噛みして睨みつけるガゼル。

なんでこんなに不仲なのこの子たち。

おっと。

「はい、ちよつと止まって」

後ろについてきている三人を、手で制止。

「ガゼルくんがひっかかったトラップって、これのこと？」

前方の床の一部、ちよつと盛り上がっている煉瓦を指差す。

ルーティがうなずいた。

「でも、以前と少し場所が違うような」

「こういうのは一部の賢い魔物が仕掛け直したりするからね。でないとダンジョンのトラップなんてすぐになくなっちゃうよ」

「なるほど」

「うん、でもこれはあからさまだから簡単に避けて通れるね。厄介なのは、わざとこうしておいて、避けたほうに仕掛けであるトラップなんだけど……ま、今回はなさそうだ」

しかし、よっぽど猪突猛進に突き進んでいないとひっかからないぞ、これ。

「ただ猪武者やっちゃったのよガゼルくん。」

「ていうかもしかして、完全に初心者と同じなんじゃないか、きみら？ レベルとかそういう話じゃなくて、ダンジョン初心者」

レベルの高さだけでダンジョンを踏破できるものでもない。

実際の探索中には、それに加えて、踏んできた場数　体に叩き込んで覚えた経験こそがものを言う。

この子ら、レベルはそれなりに高いし、戦闘能力もあるのに、なんでしょうか、振る舞いが入学したてのヒヨツ子とそう変わらない。ずぶの素人も同然なのである。

「私は、最近までずっとマスター・ゾルディアスのお手伝いをしていただけでしたから……正直に言うと、迷宮の探索には不慣れです」「あたしはダンジョンが苦手だからあんまり入ったことない……怖いもん」

「クソめんどくせえ。とりあえず出てきた敵をぶった切つてりゃいいんだろーが」

うーん、ルーティとレミアはともかく、ガゼルがやばいことになつています。

「ガゼル……いいパーティーに恵まれたな」

「あ？」

「昔ね、同じようなことをほざいて、直後に頭をかち割られた剣士がいたんだ」

傷痕が残つてハゲにならずにすんだのは本当に幸運としか言いようがありません。

かわいい生徒が同じような羽目に陥らないように、いまからきちんと教育する必要がある。

「戦闘中とはともかく、探索中は、先走るのはやめなさいね。そういうのは盗賊とか狩人とか、身軽さが売りの奴らの仕事。剣士は攻撃力もあるけど防御力もある。奇襲があつたときに体力の低い後衛職を守るのは、頑丈な前衛職の仕事なんだ。おまえがあんまり隊列から離れて先行してると、後ろの奴らが無防備になるだろ？」

「ふん。自分の身を自分で守れない奴らが悪いんだよ」

むう……この子、いつか死ぬぞ。

子供が死ぬ　それも自分の生徒が迷宮で命を落とすだなんて、絶対にごめんだ。

早いところガゼルの反抗期の原因を見つけて対処しないと、本当にまずいことになる。

と、大きな十字路に行き着いたところでわずかな物音に気づいた。背中から壁に張り付く。

「はい、静かにして。ゆっくりこっちに来て」

小声で言いながら、ちよいちよいと手招き。

怪訝な顔の三人を連れてそろりそろりと移動。

来た道から見て右側、俺の背中が向いてる方向の通路から、生き物の気配が近づいてくる。

「まだこっちに気づいてないと思う。魔物……五体から六体かな。

あんまり強くなさそうだし警戒もしてない。不意打ちできると思うから俺の合図で奇襲してみて」

「なんでそんなことまで分かるんだよ？」

「敵意のある足音と匂いがしないからね」

「は？ 匂い？」

「うん。警戒してる生き物は発汗するから酸っぱい匂いがするんだよ。さて、十五秒後に接触だ。用意はいいかな？」

なぜか不満げな顔のガゼルが剣を構えて、ルーティが静かに目を閉じて詠唱を開始、そしてレミリアは取り出した横笛、フルートを口に当てる。

十秒が経った。

さて、どんなものかな、この子らの实力は。ルーティのことは先日の共闘でよく知ったけど、ガゼルとレミリアはあまり分らない。どっこいしょ、と、近くにあった瓦礫に腰掛ける。

最初に言った通り、俺は戦闘に参加するつもりはない。よっぽどまずいことになったら撤退の手助けぐらいはするつもりだが。冷たい態度と言っなけれ……こうしてついてきただけでもかなりの過保護、普通はやらないことだ。

ま、彼らの实力をじっくりと見させてもらおう。がんばりなさい。まず始めに飛び出したのはガゼル。

刃渡り二メートルの凶刃が、唸りを上げて魔物の頭部に食らいつく。

突然の奇襲にまったく対応できず脳味噌を撒き散らしたのは、レッドキャップという魔物だった。真つ赤な頭髮が赤い帽子のように見えることからそう呼ばれる、子供ほどの背丈しかない小柄な老人のような姿をした魔物だ。小さな手斧や短剣などで武装していて、よく徒党を組み、集団で獲物に襲いかかって鬺り殺しにする。残虐な性格の持ち主だ。

さて、まずは奇襲成功といったところかな。ここから相手が態勢を立て直すまでに、どれだけの数を仕留められるか。

残り四体のレッドキャップ。

おっと……それと、一体のレッサーオーガ、か。身長二メートル、肥満しているようにも見える体は筋肉の塊。伸ばし放題の髪と凶悪な光を放つ双眸、黄ばんだ乱杭歯。見た目どおりの馬鹿力が自慢で、棍棒やら長剣やらを振り回す。見たところ、あいつがレッドキャップたちのリーダー格だな。

一体目のレッドキャップを切り裂いたガゼルは、返す剣でもう一体、胴体を撫で斬りにして始末した。

レッサーオーガやレッドキャップたちの動揺した気配。

そのとき響き渡ったのは、レミリアのフルートが奏でる澄んだ音だった。こんな迷宮で聞くには場違いとさえ思える、耳に心地いい旋律。吟遊詩人が得意とする魔法の音楽、呪歌だ。歌を歌ったり楽器を演奏したりして、周囲に魔法の影響を及ぼす。この流れるような旋律は、聴く者の精神を高揚させ、戦闘能力を高める効果を持っていたはずだ。

魔物どもがようやく動揺から立ち直り、完全に敵意を剥きだしにして武器を構え始めた。

が、遅すぎる。

すでにあちらの数はレッドキャップが三体……いや、いまもう一体殺されたから二体か。それとレッサーオーガ一体。ふむ、数の上

ではこっちの圧勝。なにせ、ルーティが準備を終えたからな。

杖を地面に突き刺したルーティを中心として、真紅の魔方阵が浮かび上がる。そこからぞろぞろと這い出てきたのは十体以上もの動く骸骨……屍霊術士ルーティの忠実なしもべ、スケルトンだ。人間の死体から作り出された骨だけの戦士。もっとも代表的なアンデッドモンスターのひとつ。それぞれが剣や盾で武装している。

こういうとき、あのキメラミノタウロスでも使えば、このダンジョンでうろついている魔物どもなんぞ瞬殺なんだろうけど。あいにくと吸血鬼野郎に解体されてしまったので、今はこうして質よりも量に頼るしかないのだとか。

ガゼルの舌打ち。

「気色の悪いもん呼び出すんじゃねーよ」

「あなたもその下品な太刀筋をどうにかしてください。本物の戦士は、」

ルーティめがけて飛び掛ってきたレッドキャップを、一体のスケルトンが迎え撃った。血まみれの手斧の一撃を盾で防御し、あえて身を引いてレッドキャップの体制を崩したところで、その首筋を剣で一閃。鮮やかな手際だ。

「ほら、こうして洗練された動きで戦うものです」

ふふん、と鼻を鳴らして薄い胸を張るルーティくん。

うつむ、あのスケルトン、俺ですら唸るほどの滑らかな動きをする。アンデッドの性能は、呼び出した屍霊術士の實力によるからなさずがルーティ、いい仕事だ。

ま、レッドキャップごときなら、ガゼルたちの相手にはならんだろう。

問題はレッサーオーガか。それでもさほど手間はかからないとは思っけど。

と思っていたら、いきなり気合いの声を上げたガゼルがレッサーオーガにとびかかって一刀両断にしていた。おお、すごい。華奢なダークエルフとは思えないほどの膂力だ。

「悪いが、お上品な剣技なんぞ知らねえんだよ」

吐き捨てるように言うガゼル。

残ったレッドキャップたちは、すでにスケルトンが排除していたふむふむ、この程度の魔物たちは相手にならない、と。やっぱり戦闘力はあるんだよね、この子たち。

「みんなすごいねー。あたし、ぜんぜん活躍できなかったよー」

にこにこ笑いながら言うレミリア。

「レミイはいいのよ、戦わなくても。怪我をしないように気をつけてね」

あれ、そんな優しくそんな顔とかできるんだ、ルーティくん。まるで普通に優しい女の子のようです。

「先生、いまなにか失礼なことでも思っていますでしたか？」

「えっ、いやいやなんにも？ あ、みんなお疲れさん。がんばったね、えらいえらい」

よっこいしよー、と立ち上がる。

「だいたい分かった。個人の能力は高いよね、やっぱり。レミリアはちよつと分からないけど、まあ、吟遊詩人ってのは基本的に仲間の補助が役割だしね。いまのは手の出しようもない戦いだっただけじゃないよ。で、ガゼルはやっぱりちよつと突っ込みすぎ、もうちょい周りをよく見よう。ルーティはもつと積極的に攻めてもいいかなあとガゼルをアシストしてあげて。よし、それじゃあ以上の点を反省した上で、ちゃっちゃと次に行こうか」

と、その前に、もうひとつ仕事があった。

「おっと。モンスターの群れは宝箱を落としていった」

「先生？」

「いや、ごめんねルーティくん。ちよつと言ってみたかっただけで、全員注目してください。ここに宝箱があります」

たぶんレッサーオーガが落としたんだろう。なにやら小汚い箱が床にある。

「普通に開けてもいいんだけど、罠が仕掛けられているかもしれないな

い。猛毒のガスとか石弓、爆弾とかあると困るよね。で、こんな場合、安全に中身を手に入れたいとき、盗賊技能を持つメンバーが必須になってくるのです。具体的には盗賊、狩人、忍者だね。先生としてはやはり専門職の盗賊をおススメするけど、狩人や忍者も捨てがたいかなー」

「……で？ 開けるならさっさと開けるよ」

「おお、容赦ないねガゼルくん。いや開ける、開けるんだけどねー、でもちよつとした問題がひとつある。

俺は、俺たちの背後に振り返った。そこにあるのは迷宮の石壁。

「見学したいなら構わないよ。そんなとこにいないで、もうちょいこつち寄ってみ」

「あ？」

「は？」

「へ？」

「……失礼……いつから気づいていました……？」

ぬるっ、とした動きで、壁の向こうから浮かび上がるようにして現れたのは、黒装束を纏った少年だった。たぶんルーティたちよりもひとつかふたつ年上。背丈は俺と同じくらいあるだろう。その代わりずいぶんとやせ細っていて、華奢だ。長い手足。びっくりするほどの美形。透き通るような色白、すっきりとした鼻筋、睫毛が長くて女っぽい。どこか虚ろな瞳の色は黒く、べったりと重そうな髪もまた黒い。その整いすぎているほど整っている容姿と、特徴的な長い耳……エルフ族か。黒髪黒瞳のエルフというのも珍しいな。

《忍者》

「……気配は……完璧に消していたはずでしたが……」

「完璧だったよー。でも完璧すぎたかな。初心者がやりがちなミスなんだけどね、あんまり完璧に気配を消すと、そこだけぽっかりと不自然に空っぽの空間が出来上がるんだ。だから本当に身を隠したいなら、空気にならないとね」

「……はあ」

周囲との一体化、これが簡単なようで難しいのである。

「で、きみ、だれ？ リノティアの生徒だよね？ 俺は用務員のアキヒコ・シキムラ」

「……高等部二年の……ノアル・ハーミットです」

「そっか。忍者？」

「一応……」

なんだかずいぶんと暗い子だけど、大丈夫だろうか。具合が悪いというわけでもなさそうだけど。

忍者はここからはるか東方の国を出身とする職業で、まあ、ほとんど俺のもといた世界の忍者と変わらない。得意とするのは気配を絶つての隠密行動、周囲の警戒と奇襲の防止、そして暗殺。裏方だけど重要な役割を担う職種だ。

「で、なんで隠れてこっちを見てたの？」

「……みなさんをたまたま見つけて……それで……勉強をしたいと思ひまして……」

「畏の解除の？」

「……はい」

こくりと頷くノアルくん。見たいならそう言えばいいだけなのに。シャイな子なんだろうか。

「それはもちろん全然かまわないんだけど、仲間はとうしたの？
まさかひとり？」

と訊くと、目に見えてノアルくんのおかしくなかった。

なんというか、マジで自殺する五秒前。そんな感じ。どんよりと
黒い負のオーラが立ち昇っている。

「ど、どつたの」

「仲間は……いません……」

「え、なんで？」

「……あれは、先週のことでした」

以下、ノアルくんの事情。

先週までとあるパーティーに所属していたノアルくん。忍者として
パーティーの役に立つよう努力し、がんばってきた。みんな優秀
で、けっこう勢いに乗っていたらしい。その日もダンジョンの奥底
にまで潜ったのだという。

現れた強敵。

奮闘するメンバーたち。もちろんノアルも精一杯の力を出して戦
う。

そして勝利。

いままでにない強敵を倒したことにより喜ぶ一同。

落ちていた宝箱に気づく。

どんな素晴らしい中身が入っているのだろうか？ 全員、興奮が止
まらない。

メンバーの中で唯一、トラップを解除できる、ノアルが宝箱に挑
戦。

罠の解除に失敗。どころか、石弓だと思っていたら爆弾だった。

ドカンと見事に爆発した宝箱。その爆風はメンバーを残らず吹き
飛ばし、体力の低い後衛職の連中に瀕死の重傷を与え、爆弾の近く
にいたノアル自身もかなりひどい怪我を負った。そこからはもう必
死になって命からがら脱出してきた、と。生きて地上に帰れただけ
でも奇跡だな。

「……幸い、怪我は治りましたが……」

「あー、パーティーから外されちゃったのか」

「はい……」

まあ、そのパーティーの子らの気持ちは分からんでもないけどね。

信頼していたのに裏切られた、って気分なのだろう。不幸中の幸いとも言うべきか死者は出なかったそうだけど、だからといって当事者たちにとっては簡単に許せるようなものでもないだろうし。

「で、二度と失敗しないように特訓してた、と？」

「はい。……このあたりの魔物なら、僕でも簡単に倒せますから……」

たしかに、ノアルは強そうだ。レベルにして二〇〇そこそこ？

このダンジョンの魔物ならば容易に倒せるだろう。ひとりでうろついていてもさして怖くないはずだ。安心して畏の解除の特訓に励めるわけか。

「ふーん、だいたい事情は分かった。いいよ、見学してて。それでできればうちのパーティーに参加してくれると嬉しいなあ。メンバーが足りてないんだよね。ちょうど盗賊とか忍者とか探してるところだったし」

「……いえ、それは……ちょっと。……もとのパーティーに帰りたいので……」

「あー、そっか。だよね。うん、ごめん。ま、無理強いはしないし、できないよ」

なかなか、そう簡単にはいかないもんだなあ。

どうしようかなあ、メンバー集め。どうしても盗賊技能の持ち主が欲しいんだけど。トラップ解除も出来ないのにダンジョン突入とか、後ろ向きな自殺志願みたいなもんだし。

ま、それは置いて、いいよ宝箱を開けてみますか。

扉をノックするように、箱の表面を拳でコンコンと叩いてみる。

やっぱり爆弾か。ま、このタイプなら、ちゃっちゃと急げば問題

ないね。

はい、パカッと開けて

開ける前に声をかけられた。

「あ、あの……」

「ん？」

「もう開けるんですか？　ちゃんと調べてからじゃないと……」

振り返ってみると、ノアルが怯えたような表情を浮かべて俺を見ていた。

あれ、なんか変なことやったかな、俺？

「せめて罨の有無と種類くらいは把握しないと……」

「爆弾だね。旧式だから急いで解除すれば大丈夫、準備はいらないよ」

罨の種類は宝箱に近づけばだいたい分かる。触るのは最終確認のため。

「……どうして分かるんですか？」

「味だよ。ほら、甘い味がするでしょ？　昔の爆発物は味が特徴的だからすぐ分かる。あと匂いだね。なんかツンとした柑橘系の」

「えっ」

「えっ？」

「……あの、先生、味って？」

「いや、だから、味だよ。爆弾が近くにあると空気の味が変わるでしょ？」

「えっ」

「えっ？」

なにそれ怖い。あれ、俺がおかしいの？　なんでノアルもガゼルたち三人も俺のことを異星人でも見るみたいに見るの？　なんか変なことでもやったの、俺？

いや、そういえばこんな目で見られたことが過去に何度かあったような。

謎である。

「えっと、ほら、砂糖は甘いだろ？」

「……はい、もちろん」

「うん。爆弾も同じなんだ。だから分かるんだよ。でも最新式のはちよつと苦味がある種類が多いかな。実際に手に入れていろいろ舐めてみるといいよ。この味の火薬は二百年も昔にラザニア帝国のバウルマンが発明したやつでね、味と匂いにクセがある」

で、もう一度、宝箱をコンコンとノック。

「叩くでしょ。音がするでしょ。で、中の様子が分かる。ほら、野菜とか果物とか選ぶときに叩いたりするだろ？ あれと同じ。な？ 簡単だ」

にっこり笑う俺。

呆れた顔の皆さん。なんで？

なんだかちよつと居心地が悪い。

「そ、それでな、開けるんだよ」

ついにご開帳、針金を鍵穴に突っ込んでひねってパカッと蓋を開けて蓋から箱の底に伸びてる細い糸を指先で切って端っこを持ちつつ、その糸が繋がっている筒状の物体をそっと持ち上げる。

「はい解除成功。爆弾だ。衝撃を与えても滅多なことじゃあ爆発しないけど、この糸を引っ張るとドカンといくね。派手なクラッカーみたいなもんだ。水につけると無力化できるよ」

コートの内側から水筒を取り出して、口で蓋を外し、中身の水を爆弾にかける。

無力化した危険物をポイッと捨てる。二度と爆発しないから、もう安心だ。

「これでおしまい。安全に宝物を手に入れられるというわけよ。…

…ああ、銅貨が十枚と銀貨が一枚か、シケてるな……」

ま、子供らの小遣いの足しにはなるだろ。

「……先生」

「ん？」

なぜか俺を見つめるノアルくん。

「弟子にしてください」
えっ、なにそれ怖い。

《新たな仲間。そして水着のお話》

「それじゃあ、本当にうちの子らのパーティーに参加してくれるんだ？」

「……はい。先生の弟子になれるのでしたら」

「うーん、弟子とかよく分からないけど、俺なんかでよければ教えられることは教えるよ」

「……よかった。先生ほどの盗賊の技を教えていただけるなんて……嬉しいですよ」

いや俺は盗賊じゃなくて剣士なんだけどね、一応は。

ま、そんなこんなで、なにやら無事に盗賊をメンバーに入れることができたようです。よかった、安心したぞ俺は。これでうちのパーティーが悪辣なトラップにひっかかって全滅するという心配も、ずいぶんと和らいだ。

全員それぞれの自己紹介もすませたし、こうしてダンジョンを歩く足取りも、ずいぶんと軽く

「待てよ」

「ん？ どしたの、ガゼル？」

「俺はまだそいつと組むと認めたわけじゃねーぞ」

敵意に満ちた目でノアルを睨みつける、ガゼル。

めちやくちや不機嫌そう。なんで？

「エルフと仲良しごっこなんぞやれるかよ。胸糞悪い」

「なんで？ ガゼルもエルフだろ」

と言った瞬間、俺の鼻先に剣の切っ先が突きつけられていた。

今度は俺を睨みつけるガゼルの目には、明確な殺意が灯っている。
「俺は誇り高いダークエルフだ。人間や、エルフみたいな、弱くて薄汚い連中といっしょにするな。分かったかクソ野郎。殺されたく

なかったら、二度と間違えるんじゃないぞ」

うげげげ……この子、怖い。

かつてこれほどまでに俺に対して敵意をむき出しにした生徒がいたでしょうか？ いやいけません。

ま、エルフとダークエルフの関係が破滅的に悪いってことを忘れていた俺が悪いわな、いまのは。

素直に両手を挙げて降参する。

「ごめんな。気に障るようなこと言っちゃったみたいだ」

「ああ。分かればいいんだよ。次は殺すからな」

マジで殺されそうな気配がビンビンします。うつ胃が痛い。

そしてルーティくん、スケルトンを召喚する必要はないよ。と、

目線で合図。

「……んー、ノアルくん、こういう状況なんだけど……きみは大丈夫？」

「僕は……問題ありません……ダークエルフに対して想うところはありませんし。ある程度の距離を保てばいいのでは……？ その彼が、どうしても我慢できないというのであれば……残念ながら、無理に参加することはできませんけど……」

「どうしても我慢ならねーな。クソエルフと同じ空気を吸うと思うだけでうんざりする」

「……いい加減にしてほしいわね。お子さまのわがままにこそうんざりさせられるわ」

ため息をつき、指で眼鏡の位置を整えながら言ったのはルーティだった。

なんだか陰悪なムード。喧嘩の予感。

「あ？ なんだと、根暗女」

「このパーティーはあなたのための玩具ではないし、私とレミイはあなたの不手際に巻き込まれて死ぬつもりはない、ということよ。ハーミット先輩と組むのが嫌なのであれば、あなたのほうこそ出て行ったら？ あなたよりも先輩のほうがずっと頼りになりそうだも

の。もつとも、出て行ったところで、もうあなたを仲間に加えるパーティーなんて、この学園には存在しないでしょうけど」

ガゼルの怒りが燃え盛る炎のようだとすれば、ルーティのそれは絶対零度の氷塊のようだった。思わずこっちまで凍える視線。いかな、本気で怒ったルーティは怖いんだぞマジで。俺ですら泣きたくなる。

なので、怯むこともなく大剣の柄に手をかけたガゼルの胆力は凄まじい。と思う。

「いつぺん死ぬか……？」

「あら。どちらが死ぬことになるか試してみる？　言っておくけどあなたの死体はこの場に捨てておくわよ。再利用する価値もなさそうなもの」

「や、やめようよ、ガゼルくんも、ルーティも……」

一触即発の空気　、おろおろするレミリア、困った表情のノアル。

やれやれ……生徒たちのパーティーの問題だから、本来なら俺がむやみに口出しすべきことじゃないんだが、担当官としてちよつとフォローしとかなないといけないかな。

「はいはい、喧嘩はやめなさいね。ダンジョンの内部でパーティー分裂とか、きみらはよっぽど死にたいのか？　仲間は大切にしよう。チームワークが大事だよ。チームワークが大事だよ。とても重要なことだから二回言っておくね」

「あ？　弱っちい人間のくせに指図するんじゃないぞ、この」

「ガゼル。本当に、本気で、大切なことなんだ。よく聞いてくれ。あのな、ここでは人が死ぬんだよ、本当に。ちよつとしたことで死ぬんだ。トラブルに引っかけたり、魔物に殺されたりして、うちの生徒たちは毎日のように死傷者を出している。とても危険な場所なんだよ」

「だから、なんだ？　エルフと仲良しになれってか？　反吐が出るな」

「うん。反吐が出たとしても死ぬよりはマシだろ？」

ちよつとぐらい仲が悪かったとしても、そんなもの、長いこと組んでいればやがて解決するはずの問題さ。だと思いたい。

でも、なにが不満なのか、激しく舌打ちするガゼル。

「ああ、分かったよ。じゃあ、こうしろ。そのエルフが俺と戦って勝ったなら、喜んでパーティーに入れてやる」

そんなにノアルくんと仲間になるのが嫌なのだろうか。ダークエルフとエルフの仲が険悪なのは誰でも知ってることだけれども、ガゼルの人間嫌い、エルフ嫌いは、もはや病気の段階だな。どうやって更正させればいいのかだろうか。

……ふーむ、こうなると、ノアルがどうするのか……。

「きみがそれで納得するなら……僕はかまわない……」

相変わらず虚ろな視線をさ迷わせているノアルくん。覇気とか戦意とかとは無縁の子だな。まるで真冬の湖面のごとし。恐ろしいまでに静かな気配だ。……強いな、この子。よく鍛錬している。

先生としてはいろいろと迷うところがある場面だが、仕方ないや。どうあっても盗賊は欲しいし。

「しょうがないなー、もう。んじゃ、俺が止めるか、どっちかが参ったというまでやりあってね。三分以内にすませること。では始め」と言った瞬間に剣の柄に手をかけたガゼルの腹部を、瞬時にして間合いを詰めたノアルの手刀が深く抉っていた。

「っ……あ……う」

浮き上がるガゼルの身体。つま先が地から離れる。悶絶するガゼルの瞳は白黒と明滅しながら涙を浮かべ、ぱくぱくと開閉を繰り返す口の端からは涎が垂れ、身体全体が痙攣している。

忍者にとって最大の武器とは、手裏剣やらくないやらではなく、恐ろしいまでに鍛え上げたおのれの肉体そのものだ。極めれば五指で鋼鉄を引き裂き、足刀で敵の首を刈り取る。ノアルはまだまだ未熟だけど、その瞬発力がガゼルの反応を上回り、指先が彼の薄い皮鎧ごと褐色の腹筋をたやすく破ったとしても、なんら不思議ではな

い。

「はい、そこまで！。勝者、ノアルくん」

「……どうも……」

俺に向かつてぺこりと頭を下げる、ノアル。

その足元では、悶絶しながら反吐をぶちまけているガゼルの姿。むごい。

自分よりもレベルの高い忍者を相手に至近距離から戦いを挑むつてのは、ちよつと無謀だったんじゃないかな、うん。

「し、死んじやつた……」

えっ。

と、振り返つてみると、レミリアが呆然とした表情で、地面に倒れているガゼルを見つめていた。

「いや、死んでない、死んでないから」

「死んでる……やだよう、ガゼルが死、死んじやつ……ひっ、うっ、うっ」

ああ。

あああああ、やべえええええ。

なんだか嗚咽を漏らすレミリア。その瞳に涙が浮かんで、溜まっていく。

ちよつと待つてくれ。

こんな音の反響がよさそうなダンジョンの内部で、この子に全力で泣かれたら、俺は死んでしまうかもしれない。物理的に。文字通りの意味で。けっして大げさな表現ではなく。

「ちよつ、待ちなさい、レミィ。ガゼルは死んでないわ、ほら、落ち着いて」

あ、久しぶりに焦った様子のルーティくん。そうだね、きみだつて命は惜しいよね。

でもレミリアは聞く耳を持たない。周囲の声が耳に入っていないんだろう。あんな大きくて立派なフサフサ耳なのに。

だから泣くのだ彼女は。全力で。

「ひっ、うっうっうっ、うええええええ、え、え　　ツツツ！」
ガッン、と脳味噌がハンマーでぶん殴られたような衝撃。

人並みはずれた肺活量と声の大きさを誇るレミリアにとって、本気で大声を出すということは、それだけで他者の鼓膜をブチ破って殺害できる武器なのだ。

なんというガン泣き。ダンジョン内部が空気の振動でビリビリと震え、足元が揺れる。天井からパラパラと埃やら小石っぽいものやらが落ちてきた。

両手で耳を塞いでみても気休め程度にしかない。ガードを無視して容赦なくこっちの脳味噌を殴打してくる音波の暴力。

「ううえええ、え、えええあああああああ、あ、あ、っっ」

天を向いて号泣するレミリアの調子は絶好調。竜族の咆哮ですらここまでのものは聞いたことがない。

いかん。なんか本気で死にそう。吐き気とか目まいがマジやばい。足がふらつく。というかすでに一步も動けそうにない。

ルーティは耳を塞ぎながらうずくまっていて、ノアルくんも同様だ。

あ、走馬灯とか見えてきた。《黄金の栄光》に参加した当時、最初にダンジョンに連れて行ってもらったときのことを思い出す。腹を剣でめちやくちゃに抉られたあげく、ダンジョンの入り口付近で置き去りにされたときのことだ。死ぬかと思った。いまでも死にそう。生徒の泣き声で人生終了とか、本気かよ神さま……。

と、俺がちよつと諦めかけていたとき、泣き声がピタリとやんだ。きょとんとした顔のレミリア。その肩に手を置く、息も絶え絶えといった様子のガゼル。

「ほえ？　ガゼルくん……生きてたの……？」

「勝手に殺すな、バカ。くそっ、最悪の目覚めだ」

咳き込みながら吐き捨てる。

どうやら、ようやく命の危機は去ったようだ。

俺は安心して全身の力を抜き、ため息を深くついた。

「生徒の泣き声で死ぬとか洒落にもならんよ」

「ごめんなさい……」

「いやいや怒ってるわけじゃないんだよ？　ねっ、泣かないでね、うん」

また泣かれたら今度こそ生きていられる自信がないからなあ。

「ところで、勝負はノアルくんの勝ちなわけだけど、さすがにもうガゼルも文句は言わないよな？」

いちおう、確認してみる。

ガゼルはそっぽを向いて激しく舌打ちしながら、

「クソが。約束は守ってやるよ。俺はエルフや人間とは違うからな」
まあ、とりあえず承知してくれたのだからよしとするかな。パーティーとしていっしょに長く組んでいれば、そのうち仲良くなったりもするでしょ、たぶん。たぶんね。きつと。

「……では……よろしく願いますよ……」

「うんっ、あたし嬉しいなっ、メンバーが増えてすごく嬉しいっ！」

「ええ、よろしく願います、先輩。ようこそ、《リノティア・バーニングボンバーズ》へ」

「うん……それが、このパーティーの名前なんだ……？」

あ、それ訊いちや駄目だよ。と俺が言おうとしたのは、どうやら遅かったようだ。

よくぞ訊いてくれました、とばかりに薄い胸を張るルーティくん。あれ、なぜだか目から汗が出るよ。

「はい！　私が三日三晩かけて考えた名前です。私、こう見えても命名することに関しては自信があります。まずは文字の画数や語呂などの基本的な部分から考慮し、さらに私の好みとしてクールで可憐、それでいてどこかけな気な、そう、雪原に咲いた一輪の花をイメージして名づけた自信作なんです！」

なん……だと……？　雪原に咲いた一輪の花……？　ならばバーニングボンバーズというのはいい……。

「そう……クールだね」

いや。きみのほうがクールだと思うよ、ノアルくん。すごいな。まさに雪原に咲いた一輪の花。ガゼルと同じく女の子みたいな美貌だから、なんだかものすごく格好よくて羨ましい。いいなあ。

「俺からお礼を言わせてもらうよ、ノアル。ありがとう。正直な話、メンバーがぜんぜん足りてなくて困ってたんだ。盗賊も魔法使いも僧侶もいないんだからね。これでようやく一歩前進って感じかな。あとは、まあ、回復係と攻撃係をひとりずつってところかな」

「まだまだ仲間が増えるんだよね？ 楽しみだよー」

さっきまで目を泣き腫らしていたレミリアだけど、もうすっかり元気になって、嬉しそうにほほ笑んでいる。うんうん、いい子だ。

「まだまだ未完成なパーティーだけどさ、これからがんばってけばいくらかでも成功していけるから、ノアルも協力してやってよ」

「はい……もちろん」

「うん、ありがと。で、このパーティーのことなんだけど、一応、リーダーはルーティってことになってる。詳しいことは彼女から聞いてね。でもって、うちのパーティーでは基本的にメンバーの自由意志を尊重しているんだけど、俺が作った約束……守って欲しい決まりごとが三つあるんだ」

「……なんでしょうか」

真剣に俺の話を聞いてくれるノアルの姿を見て、俺は不覚にも泣きたくなった。そう、これだよこれ。俺はこういう生徒を待っていたんだよ。ガゼルはぜんぜんこつちの話を聞いてくれないし、ルーティはなにかにつけて俺を苛めるし、レミリアはぼやんとしていて集中していないことが多いし。素晴らしすぎて感涙しそうです俺。涙を堪えて、まずは人差し指を立てる。

「まず、ひとつ。仲間割れは禁止。理由は言うまでもないよね」

つぎに、中指を立てる。

「ふたつ。ダンジョンではリーダーの言うことをよく聞いて、いつでも慎重に行動すること」

いや、守られてない規則なんだけどさあ。はあ。ま、これからは

そんなこともなくなってくれろと信じているよ俺は。うん。
で、三つ目だ。薬指を立てる。

「みつつ。水着を着用してのミーティングは禁止」
「えっ」

「……うん、その反応はよく分かる。すぐよく分かるんだ。でも大事なことからよく聞いてほしい。こんな決まりごとを作ったのは、俺がリノティアの生徒だったころの経験が原因なのさ」

いま思い出しても恐怖のあまり身が凍る、あのおぞましい毎日……。

「いまでも鮮明に思い出せる。あれは、そう、真夏の、凄まじい猛暑の日。事件のきっかけを作ったのは、当時の俺たちのパーティのリーダーだった」

回想スタート。

「いやっほーう、みんな集まったかなー？ ミーティングを始めるよーっ！」

「遅いわよ、フェアライト。珍しいわね、あなたが遅刻すぶうっうっ！？」

「なんだよ、汚いぞ、ユーフィーナ。唾を飛ばすな。だいたい遅刻はしてねえ……まだ五分前だ」

「ちよっ、ちがっ、なにその格好……！？」

「水着を着てみました」

「見れば分かるわよそんなのっ！ 私が訊いているのは、なんで部屋の中で水着なのかってことよ！」

「暑いので」

「だっ、だからってそんなっ、ひ、卑猥な……それっ、ほとんど紐じゃないっ、紐っ！ 正気！？」

「いいだろー、ビキニだぜー。エロくて涼しくて、俺の美貌を最大限まで活かし、そのうえ長いこと着替える必要もない……どうしてこんな素晴らしい衣装の存在に気づかなかったんだろっな？ ふふふ、俺としたことが迂闊だったぜ」

『ま、まさかあなた、その格好で学園内をうろついていたりしないわよねっ?』

『うん。マーキアスのところに用事があったからな、ちょっと行ってきた。学園中の注目を独占できて気分そう快だったぞ。そういや風紀委員の連中が顔色を変えて追いかけてきたが、まさに俺の美しさは罪といったところか……あはははは』

『馬鹿じゃないの!? 馬鹿じゃないの!? 馬鹿じゃないのッッ!?! へっ、変態っ、変態っ、破廉恥っ! ち、痴女そのものじゃないの……!』

『エロかわいと呼べ。もしくはエロかつこいい、エロ美しいでも可。ま、なにはともあれミーティングを開始するぞ。全員、着席。』

……あー、それにしても胸の谷間が蒸れて気持ち悪いな……ちよつと風に当てたほうがいいな』

『アキくん、見ちゃダメえええええっ!』

『さつきからうるせーぞ、ユーフィーナ。見る、ほかの連中を。シエラザードはいつものごとく読書中だ。その本を閉じろ、燃やすぞ。ウィルダネス、鼻くそをほじくるな。手を洗ってこい。ジェラルド、ちらちらとこつちを見るぐらいなら堂々と触りにこい。アキヒコ、おまえはもうちよつとこつちを見る。注目されないとつまらんだろうが』

回想終了。

などということがあったのです。

「頭がおかしいんじゃないのか、その女」

「うん……じつに的確な突っ込みだよ、ガゼルくん。素晴らしい。でもね、本当の恐怖はそこではなく、その一年後。次の年の夏に始まったんだ」

再び回想スタート。

『よし、全員きちんと集まったな? では今日も今日とてミーティングを ちよつと待て』

『……な、なによ、フェアラート……どうかしたの?』

『まったくだな。どうした？ はやくミーティングを開始しよう』
『いや、それはもちろんだが……どうして、おまえらまで水着なんだ？ しかもビキニ』

『おまえが始めたことだろう。去年のおまえが涼しそうだったのを思い出してな、私も真似してみようと思ったのだ』

『そ、そうよ……わ、私だって、す、涼しいほうが気持ちいいもの……な、なかなか快適でいいわねこれはっ！ あ、あははははっ……っく、う、ふぐうっ……』

『泣くほど恥ずかしいなら最初から着るなっ！ つーか、おまえらふたりに挟まれてるアキヒコのほうがよっぽど恥ずかしそうだぞ。』

大丈夫かおまえ。顔が真っ赤なんだが』

『本当だな。大変だ。熱でもあるのか？ どれ、私が測ってやろう』

『ああっ、シエラザード、ずるいわよっ！ ね、アキくん、私が測ってあげるから、こっち向いて？』

『……おまえら……ちよつとは真面目にやらないと殺すよ……？』

回想終了。

「地獄でした。俺はもう目にやり場に困ってミーティングどころじやなかったし、女性陣は騒ぎまくるし、喧嘩し始めるし、男のひとりには鼻くそほじってるし、ひとりには鼻血とか脂汗とか垂れ流してぶっ倒れるし、もうあれはミーティングでもなんでもありませんでした」

まさに地獄でした。

もう、ダンジョンの探索とか、冒険とか、そういう場合にはありませんでした。

「……大変でしたね……」

「分かってくれるか、ノアルくん。やっぱりきみは賢くていい子だ」

「はい。水着は禁止……よく分かりました」

「うんうん、その通り」

「……今年の夏には消してしまう規則ですけどね」

にやりと笑うルーティくん。えっ、なんで俺の背中に寒気？

十年前のお話　《黄金の栄光》（前書き）

このお話では秋彦が異世界にやってきた当初、十年前の出来事を語る
ことになります

語り手は秋彦ではありません

この物語におけるもう一人の主人公とでもいうべき人物です

秋彦が語る現代編とは違い、かなりバイオレンスで容赦がありません
きつと感じる読者さんもいらっしゃるでしょう

ですがこの過去編があつてこそ秋彦の現代がありますので、どうぞ
お読みになってくださいな

十年前のお話　《黄金の栄光》

まったくこの世は地獄だな。いいことなんてひとつもないぜ。

俺は舌打ちしながら、左腕で握った短杖《狂える魔導士の背骨》を振った。高位の魔法使いにしか扱えないレアアイテム。呪文を唱えれば、杖の先から巨大な火の玉が飛び出す。それは俺めがけてすつとんできていた殺人氷柱とぶつかり合い、破壊のエネルギーをまき散らす。氷と炎が互いを殺しあつて、広い室内に凄まじい水蒸気が吹き荒れた。

大声を上げて、俺は叫ぶ。

「ジェラルド！　ウィルダネス！　そんなクズどもにどれだけ時間をかけてやがる、この無能どもがつ！」

「無茶を言うな、フェアライト！　それでも精一杯やっている！　それよりも扉はまだ開かないのか！？」

「も、もも、もう少しです、はい、ちよつ、と、待って！」

ジェラルドの怒号。

ディムの泣き言。

俺は、もう一度だけ舌打ちした。

ここは超高難易度ダンジョン《黄昏の死都》の地下八十九階。

このダンジョンの特徴は、よくある洞窟のようなタイプではないというところだ。周囲は白い大理石のようなもので構築されていて、壁や天井、床にまでも、緑色の光の線が縦横無尽に走っている。視界は十分すぎるほど明るい。神殿……そう、まさに見かけは神殿だな。正体は、古代都市の地下に建造された避難用のシェルター。それが造られてから何千年という月日を経て、魔物どもがうろつく巢窟と化してしまった。

このダンジョンには、たいした罠はない。……が、棲みついてい

る魔物のレベルが高すぎる。リノティアが管理するダンジョンのなかでも、おそらくは最高に近いだろう。学園最強のパーティとして名が通っている俺たちですら、ここにたどり着くまでに幾度となく肝を冷やし、死線をくぐり抜ける必要があった。もっとも弱いディムですらレベル三〇〇、リーダーの俺に至ってはレベル七〇〇を越えているというのに、だ。

俺の背後には、嚴重に封印された扉を開けようと、必死になってパネルを操作しパスワードを入力している、ディム・ウォーキスキンの姿がある。中等部二年生の、チビで臆病な、眼鏡をかけた茶髪のカキだ。

そして眼前、遠くのほうには、招かれざる侵入者である俺たちを殺そうと、爛々と双眸を光らせ殺意をみなぎらせている、数え切れないほどのグレーター・デーモンたちの姿があった。

グレーター・デーモンは、三メートル以上にも届く身長と、筋骨隆々とした黒色の肉体、真紅の瞳、長大な翼、そして頭部の左右からは捻じ曲がった角を生やしている、悪魔族のモンスターだ。極めて凶悪、強力で、人間なんぞ相手にもならないほどの膂力を持っているわ、強い魔法をバカス力撃ってくるわ、ほとんどの魔法はろくに通用しないわ、馬鹿みたいに体力は高いわ、おまけに同種の仲間をどんどん呼びやがるわと、出会っただけで今日の運勢は最悪だと確信できる魔物のひとつだ。それがすでに五十体以上もつようよと集結している。

広大な、ホールにも似た空間。

俺たちは完全に追い詰められていて、いわゆる手詰まりを迎えていた。

金髪オールバックの軽戦士、ジェラルド・ロウ・オツツダルヴァが叫ぶ。

「ユーフィーナ！ 加護をくれ！ なんとかしてでも奴らの動きをくい止める！」

「駄目よ、ジェラルドくん！ ひとりでなんとかできる数じゃあな

いわ！」

「俺もいるぜ、ユーフィーナッ！ 忘れてもらっちゃ困るぜええっ！」

一体のグレーター・デーモンの首を大きな戦斧ではね飛ばし、スキンヘッドのごつい巨漢、ウィルダネス・ドストロイが野太い声を張り上げた。

白いローブを着た赤毛の神聖魔法使い、ユーフィーナ・ソグラテスは、まだぐだぐだと悩んでいるようだったが……くだらねえ。

「かまわねえからやっちなえ、ユーフィーナ。どうせできなきゃ俺たち全員ここで死ぬんだからよ」

「……その通りではあるな。私も援護しよう。全力の力を一瞬に注ぎ、奴らを押し返す」

ハイエルフの魔法使い、シェラザード・ウオーティンハイムが、冷静に、俺の意見に同意を示した。その手が握るのは高位の長魔杖《轟く豪魔》。

ジェラルド、ウィルダネス、シェラザード。三人の決意に気圧されたように、ユーフィーナはようやく覚悟を決めやがった。

「分かったわ。偉大なる我が主よ、この者らに御身の栄光を貸し与えたまえ」

長聖杖《慈悲深く抱擁する乙女》を高く掲げ、ユーフィーナが厳かに唱えれば、俺たち全員の瘦身に偉大な力が満ちた。ほんのいつときだが、パワーが倍増、魔力も底なしに強くなる。

その効果を肌で感じたのか、ウィルダネスが感激したように叫ぶ。「お、お、おっ！ み、みなぎるるああああああッ！」

身長三メートルにも達している巨人族の豪傑馬鹿は、斧を振り上げると、そのまま敵陣に突っ込んでいった。

どこかんと爆発するような斧の一撃が連続する。

そしてそのおかげで混乱したグレーター・デーモンたちの足元を這うように、神速の素早さで、ジェラルドが走る。その両手にそれぞれ持った二本の剣が、魔物どもの足首を的確に切り裂き、奴らの

体勢を崩していった。

「よし、ふたりとも下がれ、私が仕留める！
来たれ！」

大翼の光輪よ、

シエラザードの詠唱。

エルフ女の頭上に、大きな光の輪が出現する。

さすがにでかい魔法を使いやがる。 ならば、俺も気張るとするか。

《狂える魔導士の背骨》を起動。

精神を集中して、呪文をつむぐ。

「偉大なる空虚なる者、黄昏の果てにて待つ者よ。我は汝の力を借り受けたく願う者。汝の望む破滅を望む者。汝、我の願いに応えるのであれば、その力をここに示せ」

「光輝よ！ 煌めき乱舞し、邪悪なる者どもに最期の安らぎを！」

「我が手に集うは焦熱の魔風。対象 目の前のクズどもだッ！
ぶちかませッッ！」

はしたなくも雄叫びを上げてしまった俺の手元から破滅の風が、そしてエルフ女、シエラザードの頭上に浮いている光の輪の中心から極太の光線が、それぞれ同時に発生して、グレーター・デーモンの群れに襲いかかった。

触れるだけで全身が焼け焦げて死ぬ病魔の風が、悪魔の強靱な肉体をも蝕み、殺す。そして鋼鉄をも蒸発させる熱量を持った白色のビームが、奴らをまとめて情け容赦なく薙ぎ払う。

学園に所属する生徒のなかでも、こと攻撃に関する魔法の技量で言うなら、俺が一番、そしてシエラザードは二番手だ。忌々しいことに僅差だがな。

だが、そんな俺たちふたりの特大魔法を受けてもなお、グレーター・デーモンどもはその総数を半分ほどに減らしただけだった。生き残っている連中は、ますますその目に憎悪の炎を燃え滾らせて、こちらに向かって襲いかかってくる。

大魔法の巻き添えにならないようにと一時は非難していたジェラ

ルドとウィルダネスが舞い戻って、前線を維持しているが……それも、いつまでもつものか。

この場での力ぎを握っているのは、やはり、デйм・ウォーキス
キン。学園最優秀の頭脳を持つという錬金術師。俺たちパーティの
命運は、こいつがこの扉を開けられるかどうかにかかっているのだ。
俺でも、できないことはないのだけだな。だがそれだと戦闘要員
がひとり減る。こと戦闘に関してデймは死ぬほど役立たずだ。な
らば必然と、護衛は俺、開錠はデймということになってしまう。
まったく、クソ忌々しい。

「デйм……！ てめえ、いつまでごそごそやってやがる……！」
「も、もうちょっつ、もうちょっつとです、ほ、ほんつ、と、」

「聞き飽きたぜ、その台詞は」
俺は腰に提げてあった鞘から剣を抜き放ち、デймの細くて頼り
ない首に突きつけた。

「あと三十秒だ。それで開けられなきゃ俺がてめえを殺す。いいな
？」

「ひ、は」

自分の首にちよつと刺さっている剣を目にして、デймは涙を流
しながらカクカクとうなずいた。顔面の色はすでに蒼白。小便なん
ざとつの昔に漏らしちまっているチキン野郎。こんなクズに自分の
命運を預けなくちゃなんのかと思うと、情けなくてこっちまで泣
きたくなる。

さらに泣きたくなることに、パーティー一番の善人面した女が怒り
やがった。

「フェアラート！ なんのつもりなの！？ やめなさいっ！」

「うるせえぞ、ユーフィーナ。黙ってる。クズのケツを叩いただけ
じゃねえか」

「そんなこと絶対に許さないわよ……その剣を下ろしなさい！」

「てめえから死にたいのか？ いいから黙ってるよ。こんな土
壇場で偽善者根性を丸出しにしたっていいことないぜ、マジで」

ウィンクしながら言ってる。

色を失った顔のユーフィーナは、まだなにか言いたそうに口をあけたが……残念だったな、それどころじゃなさそうだ、ぜっ！

俺はディムの首から離れた剣で、グレーター・デーモンが振り下ろした長剣を受け止めた。

がきいん、という、甲高い音。

俺の目と鼻の先で、火花が鮮やかな色彩を散らす。

やれやれ、念のために身体強化の呪文をありったけ使っておいてよかったぜ。なにしろ相手は筋肉の塊のような悪魔族だ。膂力だけでいうなら俺など相手にもならないだろうからな。

それでもじりじりと押されてしまうのは、まあ、仕方のないことだ。なにせ敵は両手を使っている。それに対してこっちは片手だ。仕方がない。

なぜ片手しか使わないのかって？

それはもちろん、こうやって、握った杖から魔法を放つためさ。

「弾ける、我が憎悪」

短く告げる。

直後に発生した赤黒い爆発が、至近距離からグレーター・デーモンの頭部に炸裂した。避けようのない一撃だっただろう。まともにくらって、そいつは首から上をすっかりなくし、後ろに大きく吹っ飛ばすようにして倒れた。

グレーター・デーモンのもっとも厄介な点は、無尽蔵に仲間を呼び寄せるところにこそある。一対一の戦いなら、こんなクズに負けるような俺ではない。

……さて。もうすぐ三十秒が経つぞ、ディム・ウォーキスキン。

と、俺が殺意を募らせたところだった。

「あ、開きました！」

歓声を上げたディムの表情を見るまでもなく、巨大な扉が左右に開き、その向こうがわを見せつつある。

俺は思わず、にやりと笑った。

「でかした。おい、おまえら！ さっさと行くぞ、急げボケツ！ このボンクラのドブネズミどもがっ！」

ちよつとでも遅れようものなら、ためらわず見捨てて扉を閉めてやる。

密かに決意した俺の想いとは裏腹に、全員がさっさとこっちに逃げてきた。まあそれが一番だがな。誰かが欠けるとここから先はきついだろう。そのくらいのは、俺だって分かっている。

迫りくるグレーター・デーモンたちを、俺とシェラザードの魔法で蹴散らし、押し返し、足どめしながら、扉の向こうへと撤退する。俺に向かつて、一体のグレーター・デーモンが魔法を放ったのは、そのときだった。

凶悪なまでに燃え盛りながらすっ飛んでくる、大きなファイアボール。

ちよつと魔法を使ったところで、俺は防御魔法を展開することすらできなかった。剣で火の玉を防ぐことはできない。ならばどうすればいいのか。足が硬直していて、いまから横や上に跳んでも間に合いそうにない。ならばどうすればいいのか。

俺はすぐ横にいたディムのわき腹に剣を突き刺して、その矮躯を盾のように前方へと差し出した。

「うえっ？」

なにがどうなっているのか分からないとも言つような、ディムの声。目の前から迫ってくる火の玉も、わき腹の灼熱とした痛みも、現実味を帯びていないのだろう。

だけど現実是非情で、容赦がないのだ。そしてどこまでも現実なのだ。

俺の身代わりとなってファイアボールをもらにくらったディム・ウォーキスキンは、一瞬にしてひどい悪臭を放つ黒焦げの死体となり。俺はそれを、すぐに剣を振って放り捨てた。

閉じていく扉の隙間へと腕をねじこもうとしていたグレーター・デーモンの顔面に、ディムの死体は鮮やかに衝突して、そのまま向

こうがわに飛んでいつて見えなくなつた。

重々しく閉じた、扉。

あれだけ騒がしかったグレーター・デーモンどもの凶暴な怒声も、もう聞こえない。

俺は深くため息をつき、言った。

「やれやれ、えらい目にあつたぜ。気を取り直して先を急ごうか」

「……フェアライト。あなた、なにをしたの」

「あ？」

「デймが　デймが、うそよ、こんなの……！」

ユーフィーナは、完全に閉じた扉を叩き、そこにすがりつくようにして、嗚咽を漏らしていた。まさか泣いてやがるのか？ あんなクズのために？　おいおいやめてくれよ、はっはっは、笑っちゃうだろまったくよ。

その背中に、そつと優しく声をかけてやる。

「尊い犠牲だったな」

「なにを、そんなこと……！　よくもあなたが言えたものね！」

きつ、と俺を睨みつける、赤毛女の蒼い瞳。

俺は薄ら笑いを浮かべてやった。

「俺だから言うのさ。この俺の身代わりになつたんだ……これ以上はないっていうほど尊いぜ。クズにしては上出来の最期だった」

「フェアライト！」

激昂して、俺に掴みかかろうとする、ユーフィーナ。

そんな俺とユーフィーナのあいだに割って入ったのは、ジェラルドだった。

「どいて、ジェラルドくん！　もう我慢できないわ。もう、たくさんよ！　そんなやつでせいでデймは……あの子は優しくて素直な、いい子だったのに！」

つまりは、生きていく能力のないグズだったということだ。

優しい？　間抜けってことだろ。

素直？　無能だってことさ。

いい子？ …… さつさと死んでおいてよかったね。この世は地獄だぜ。

このくそつたれの世のなかで、生きる権利を勝ち取れるのはな…
…いつだって、非情で、根性の捻じ曲がった、悪い子なのさ。

俺の嘲笑を知ってか知らずか、ジェラルドは、ユーフィーナを抱きしめるようにして言った。

「分かっている。きみは、彼とは仲がよかったものな。……だが、ひどいことを言うようだが、そのことについてはあとで議論するべきだ。いまは、先に進もう」

「でも、でもっ！」

「勘違いしないでくれ、ユーフィーナ」

赤毛女を抱きしめたまま、俺のほうに振り返り、ジェラルドは静かに俺を視線で射抜いた。

「私としても、彼女の行為を見過ごそうとは思っていないさ」
ほう……？

ふと目をやってみれば、感情の動きの激しいウィルダネスだけでなく、普段からどこの誰が死のうとも眉ひとつすら動かさなかったシェラザードまでもが、俺を咎めるようにして睨んでいる。

…… やれやれ、まったく、どいつもこいつも偽善者だねえ。反吐が出るよ。

他人が生きようが死のうが、そんなことはどうだっていいことだろう？

大事なのは、自分が幸せであるかどうかさ。

自分を大切にしようぜ、みんな。

そんなに俺に逆らって殺されたいのか……？

俺は肩をすくめて、言ってやった。

「話はまとまったか？ そろそろ行くぞ。意見やら苦情やらは学園に帰ったあとで受け付けるぜ」

そしてパーティのメンバーに背中を見せて歩き出す。

「そうそう。ひとり減っちまったから、新しいメンバーも見つけな

くちな。ま、そっちは任せろ。マーキアスに活きのいいのを調達させるさ」

と言った直後、背後から向けられる怒気や殺気が高まったような気がした。

どうでもいいことではある。

俺は急いでいるのだ。クズどもの偽善に付き合ってやる暇など、一秒もない。

自己紹介が遅れたな。

俺の名はフェアラート。

フェアラート・ウイケッド・セルフィッシュ。

純粹な人間族。

得意とするのは剣と魔法とその他のすべて。

クセのある短めの黒髪と、真つ赤な瞳、そしてすべてにおいてパーフェクトなプロポーシヨンが特徴的な、リノティア学園に所属する十九歳の冒険者。最強の戦闘能力と究極の美貌をあわせ持つ、偉大なる女王。

これでもいちおう、女だぜ。

十年前のお話 《出会い》

「で？ まだなにか言いたいことは？」

地べたにキスをしている男ふたりを見下ろしながら、俺は余裕たつぷりに言つてやった。

ここは、学園が生徒たちの自己鍛錬のために解放している修練場の、その中央だ。広大な空間。足元は柔らかい土。天井は、かなり高い。生徒たちが剣だの槍だの魔法だの召喚獣だの使つても大丈夫なようにと建造されているわけだ。……もちろん、召喚獣や魔法は、教師の許可を得ない限り、原則として使用禁止だが。

そして、そんな修練場をほぼ貸し切り状態にして、俺と、ジェラルドとウィルダネスは戦った。意図して貸しきつたのではなく、結果としてそうなったというだけの話だ。この学園の事実上の頂上決戦だからな。誰もそばに近寄ろうとはしない。雑魚どもは遠く離れたところからこちらを見学している。

勝負の結果はもちろん、俺さまの華麗なる勝利に終わった。

クソ馬鹿どもが。鍛えかたがちがうんだよ、鍛えかたが。

俺たちの装備はそれぞれがダンジョンで使用しているものとほとんど変わっていない。

ジェラルドは、限界まで軽量化した金色の甲冑。ウィルダネスは、丈夫そうなズボンとブーツを履き、上半身はほとんど素っ裸。

俺の装備、その武器は、左手の短杖と、右手の剣。もちろんどちらも殺傷能力のない、模擬戦用の模造品だ。防具として身にまとうのは、これはダンジョンに潜るときと同じ、首から下をすっぽりと覆い尽くすラバースーツ。その上から胸部を守る胸当てやら、足首を守るロングブーツなどを身に着けている。しかしまた胸や尻が大きくなったのかなあ、俺。ただでさえ完璧すぎる肢体だということにこれ以上さらに育つてどうするというのかしら。

ああ、まあ、それはいいや。

いまは目の前に集中しましょう。

「もう意見がないなら、受け付けを締め切るぜー？ はい、しゅーりょー。まったくー、こおんな、か弱い女の子を相手にい、大の男がふたりがかりでえ、しかも手も足も出ないだなんてえ、きみたちにはあ、男としてのお、プライドとかあ、ないんでちゅかあ？」

意識を失つてのびている、金髪とスキンヘッドの頭部を、交互に杖で小突いてやる。うりうり。

この俺は、最強だ。

ジェラルドはレベル四五〇。ウィルダネスはレベル四三〇。合わせてレベル八八〇だからといって、レベル七二〇のこの俺に勝てると思つたのか？

馬鹿が……ねーよ。

パーティの強さがレベルの単純な足し算では決まらないように、おまえらが束になつてかかってくるところで、この俺にはけつして勝てんのだ。自分の能力の使いかたをちゃんと熟知している、賢い俺のような女にはな。

俺はそろそろ馬鹿ふたりを虐めるのにも飽きてきたので、視界の端に立っている女に声をかけた。

「シェラザード。おまえはどうするんだ？」

「……負けると分かっている戦いはしない」

「ははは、賢明だな。おい、ユーフィーナ。いつまで怒ってるんだ？ いい加減に機嫌を直せよ。ディムのことなら悪かった、マジでほら、謝ったから仲直りしようぜー」

シェラザードの隣に立っているユーフィーナのところに歩いていて、握手を求めて手を差し伸べる。

それを勢いよく叩き、払って、ユーフィーナは俺に軽蔑と怒りの眼差しを向けながら言った。

「あなたを絶対に許さない」

「神に仕える司祭の言葉とも思えんね。慈悲深く寛容にこうぜ？」
「……あなたには、神ですら慈悲を与えることはないわ」

「そいつはよかった。神さまから慈悲なんてもらったら、蕁麻疹が出ちゃうよ」

ゲラゲラ笑う、俺。

ユーフィーナの顔が真っ赤になっていく。ああ面白い。こいつはからかって遊べば面白いのだと、最近になってようやく気付いた。損をしたなあ。もっと早くに気付けばよかったなあ。

「そこまですておきなさい、フェアライト。みだりに他人の心を弄ぶのは、あなたの悪いクセですね」

「……みだりに他人の死体を弄くり回すあんたにだけは言われたくねえな」

舌打ちしながら、背後に振り返る。

せつかくいい気分になっていたというのにそれをぶち壊しにした憎むべき男、こいつの名前はマーキアス・グラン・ゾルディアス。男のくせにうつつとうしいほど黒髪を長く伸ばし、死んだ魚のような目の色をしていて、黒装束を見事に着こなしている、この世でもっともむかつく野郎だ。

こいつは俺たちのパーティ《黄金の栄光》の担当官にして、個人的に、俺の屍霊術や錬金術、その他もろもろの魔法の師匠でもある。忌々しいことにな。

三メートルほどの距離を開けて、俺たちは向かい合った。

……ん？

マーキアスの横に、見知らぬ顔がある。

……なんだか頼りなさそうな、陰気なガキだった。

年齢は俺よりもちょっと下、十七歳ぐらいか。少年。茶色つぱくて山ほど寝癖のついた髪。顔立ちはまあ、そこそこ見られる程度つてところか。情弱な女顔でないのは、けっこうなことだ。背丈はそこそこ高い。百七十センチの俺よりもちょっと上か。服装はこの学園の制服だ。

そのあたりは、どうでもいい。

俺が気になったのは、そいつの眼の色だ。色というよりは、帯び

た雰囲気、感情とでもいうのか。そいつのそれは、真っ黒で底のない……恐ろしいまでの虚無の穴だった。おそらくは意図的に、俺と目を合わせようとしていない。

「おまえ……名前は？」

俺は尋ねた。

ガキは応えなかった。

代わりに、マーキアスが言った。

「アキヒコ・シキムラ。 今日からあなたのパーティに加わる、
新たな仲間ですよ」

十年前のお話へ手足

雪が、降っている。いや、降っているというよりは、渦巻き、吹き荒れ、叩きつけられている。目を閉じたくなるほどの吹雪。凍てつく気温。吐く息が白い。視界は真っ白。一面、どこまでも、真っ白。

ここはリノティアの難関ダンジョン、《コーゴ大洞窟》の入り口付近。大雪原の真っ只中。

まだまだ入り口付近とはいっても、さすがに難易度が高いと言われるダンジョンだけはあって、敵のレベルも高い。

身の丈が三メートルを超えるオーガどもの群れと、いきなり遭遇してしまった。

オーガは鬼とか鬼人とか呼ばれることもある。凄まじい体格と、圧倒的な筋肉、人間とは比べ物にもならないほどの膂力をもって、素手で剣使いと対等以上にやり合うことができる、怪物だ。一匹だけならそれほどの敵でもないが、頻繁に群れを形成するので厄介だといえる。

で、そんなオーガどもと遭遇してしまったわけだが、俺は腰の鞘から剣を抜かず、杖から魔法も放たず、ただ傍観しているだけだった。

二十五匹目のオーガの脳天から股間まで一気に大剣でぶった切り、そいつはようやく動きを止めた。生きている獲物の姿が見えなくなつたので、小休止した、つてところだろうか。

最後のオーガ、切断面から血をばしゃばしゃと噴き上げてピクピク痙攣しているそいつの死体を踏みにじり、アキヒコは天を仰いで荒々しい呼吸を繰り返している。

馬鹿が。まだ先は長いのに、こんなところで酸欠になるほど動き回ってどうする。

アキヒコ・シキムラ。くたばっちまったチビ眼鏡の代用として、

マークアスが連れてきた新参者。異世界からやってきたという、変てこなガキ。ボサボサの茶色っぽい髪。瞳は黒い。痩せているが背は高い。装備は、限界まで軽量化された鎧と、分厚くて長大な大剣。まだ戦いかたには粗が多く、無駄な動きばかりでとても効率的じゃない。

だが、たしかに……。

「ふん。たしかに、入学したとは思えない戦闘力だな」

俺の台詞を、金髪を丁寧の後頭部のほうへと撫で付けた軽戦士、ジェラルドが奪い取った。

俺、ジェラルド、ウィルダネス、ユーフィーナ、シェラザード。

五人は誰一人としてアキヒコの戦いに手出しせず、ただ静かに見守っていた。ほんの五分ほどでしかないが。

そう、たった五分で、アキヒコはオーガの群れを殲滅しやがったのだ。

とはいえ、俺はもちろんのこと、ウィルダネスやシェラザードだって、同じことはできる。ユーフィーナはちょっと分かんが、まあ、倒せないことはないだろう。しかも俺たちのほうがもっとスマートに同じことをできる。

驚くべきことは、まだリノティア学園に入学して三日も経っていない、冒険者を志してから三日も経っていない、ズブの素人も同然のアキヒコが、オーガの群れをたった五分で駆逐しちまったという点にある。

オーガの動体視力と反射神経をはるかに超越した、絶対的なスピード。高速で、竜巻のように振り回される大剣の攻撃と制圧力。たいたもんだ。レベルにして、おそらく四百そこそこか。俺の足元にも及ばないが、まあ、ジェラルドやウィルダネスあたりには十分に匹敵するだろう。

それはいい。

それはいいのだ。アキヒコは俺の手駒なのだから……強ければ強いほどいい。

だが……あの、クソガキ。俺の指示も待たずに突撃しやがった。気に入らない。

「おーう、すつげえじゃねーか！　ちつこいくせにたいしたもんだぜ、おまえさん！」

ウィルダネスの能天気馬鹿は、俺の怒りなど知らうともせず、のん気に手を叩いていやがる。この吹雪の真っ只中でも上半身は素っ裸だ。哀れになるほど馬鹿だな。まあ、耐寒性能を上げるための魔法を使っているから問題はないんだが、気分がよくないんだよ、俺の。見ているだけで寒くなる。

アキヒコは反応しない。まだ、荒い呼吸を続けている。その体に触れただけで雪が溶け、蒸発していく。体温が異常に上がっているのだろう。

あれが、リミッターを外した、ってことなのか。脳みそがぶっ壊れちまった代わりに得た、絶大な身体能力、か。

ちよつと見ただけで分かるぜ。あの能力は、破滅を呼び込む。ただの呪いだ。よくある魔剣の話さ。持ち主に山のような財産と栄光を与える代わりに、その身を必ず破滅させる。あれは、そういう能力だ。うらやましくもない。

そんな奴をわざわざ冒険者稼業に放り込むなんざ、マーキアスはなにを考えてやがる？　本人の希望だとか言っていたが……あの野郎、またぞろくだらんことでも企んでいるのだろう。そういう奴だ。悪魔さ。俺がかわいく見えるほどの。

ま、どうでもいいことだがね。俺は俺で、俺のやりたいように動く。このアキヒコとかいう小僧も、せいぜい俺のために利用させてもらうとしよう。

「あ……怪我、してるわよ、あなた」

よせばいいのに、うちのパーティで一番の偽善者ちゃんが動きやがった。

白いローブを身にまとった神聖魔法使い、ユーフィーナだ。気遣わしげに、アキヒコのほうへと歩いていく。回復魔法をかけるつも

りか。

よせよせ、そいつはそんなことなど望んじやいないぜ。それに、怪我といっても、ほんのちょこつと腕にかすり傷ができているだけだ。わざわざ魔法力を消費してまで治すようなものでもない。

だからといって、振り向きざまに裏拳でぶん殴るっていうのは、どうかと思うけどな。

手加減のない一撃のように見えた。

悲鳴を上げて倒れる、ユーフィーナ。

アキヒコはそれを見下ろして、冷たい声で言った。

「俺に近寄るんじゃないよ、化け物」

この吹雪の寒さなどものもしない、絶対零度の声だ。双眸には光がない。虚無だ。

倒れたユーフィーナに、真っ先に駆け寄ったのは、ジェラルドだった。助け起こしながら、アキヒコを睨みつけている。おうおう、マジで怒ってやがる。ま、無理もないが。

「貴様、どういうつもりだ」

「……はあ？ 化け物が近づいてきたからブツ倒しただけだろうが」
「なんだと？」

ジェラルドの瞳が陰しさを増した。

アキヒコは、それでも虚無の瞳のままだった。その瞳で、俺たちを見回す。

「エルフだ？ 巨人だ？ 魔法だ？ ダンジョン？ ……ふざけんなよ……知るかよ、知るかよそんなもん……！ おまえらみんな化け物じゃねーか。手から火を出したり！ 一瞬で傷を治したり！ テレポートしたり、でっかいモンスターと戦ったり……ふっざけんじゃないよ！ おまえらみんな、わけわかんねーんだよ！」

絶望したまま怒る奴というのを、俺は初めて見た。普通はどっちか片方なんだが。

いや……鏡を見れば、いつでも見られるものだったな。

ガキそのものの癩癩を、アキヒコは続けた。

「知るかよ、くそっ！俺は、普通の高校生なんだよ。普通に、二ツポンで、普通に暮らしてただけなのに……こんなわけわかんねー世界で、わけわかんねー連中と暮らすことになって……わけわかんねーんだよ、クソッ！こんなことが現実なわけがないだろ！」

オーガの死体に突き刺していた大剣を、アキヒコは苦もなく引き抜いた。

自分の背丈よりもでかい剣を、あろうことか、俺たちに向ける。

「……教えるよ。あと何匹だ？何匹、化け物を殺したなら、俺はもとの世界に戻るんだよ？あ？知ってるんだろ？どうすりやフラグが立つんだよ？どうすりやクリアになるんだよ？どーすりやエンディングになるんだよ、くそっ、教えるよ、教えるよッ！」

うーむ、おいおい。

さつきからずっと思っていたんだが。

「無様すぎるだろ、おまえ」

俺は嘲笑を浮かべて、一步、前に進んだ。

ハリエルフのシェラザードが、ちらりと視線を送ってくる。無言だが、付き合いが長いから、なにを言いたいのかは分かる。……いやいや、ご期待には応えられないぜ。殺さないからな。

アキヒコは、虚無の怒りを燃え上がらせた。

「誰が無様だつて？」

「おまえだよ、クズ。なんで分かんのかね」

「……てめえ……ああ、そうか。最初はおまえってわけだ？なるほど、最初のボスか。いいぜ、ぶっ殺してやるよ。さっそくフラグを立てられるってわけだ、ははは、こいつはいいやつ！」

なにがそんなにおかしいのだから、アキヒコは愉快そうに笑い転げている。

乾いた笑い声だ。とても、虚ろだ。

俺は、それにはさして頓着せず、左手で握った短杖を、ユーフィーナに向けて振った。淡く光る白い光が、ユーフィーナの腫れ上が

った顔面を即座に癒す。

ユーフィーナは、信じられないものでも見たかのように、俺を見た。

俺は、さすがに苦笑いを浮かべた。

「おいおい、そんな意外そうな顔をするなよ、ユーフィーナ。……俺がリーダーだからな。俺のパーティでのいざこざは、俺が責任をもって処理させてもらうぜ」

アキヒコと、相対する。

手負いの獣のような殺気をみなぎらせているアキヒコは、すでに笑うことをやめて、俺を殺すために剣を構えていた。尋常じゃない質量の鬼気が、熱波となって吹き付けてくる。

「ぶっ殺してやるよ」

「よしよし。ごたくはいいからさつさと来いよ、クズ」

その直後、アキヒコの姿が、俺の視界から消失した。

マジかよ。

予想はしていたが……なんてスピードだ。俺の動体視力でも捉えられないのか。

が、予想はしていたから、なんてこともなかったけどな。

俺は剣を握っている右腕で、視界を覆った。世界が暗闇に包まれる。

「はっ、なんだそりゃ。それが構えか！」

アキヒコの、あざ笑う声。

馬鹿が。こいつは構えじゃない……備えた。

短杖、《狂える魔導士の背骨》の先端が、光を放った。とてつもない、極大の光。

俺が発動させたのは、熟練すればすぐに呪文を唱える必要すらなくなる、単純な魔法だ。暗闇に包まれた洞窟などで、光によって周囲を照らし、松明などの代用にできる、意外と重宝する魔法。普通はそういう使い方しかできないが、俺の持つ莫大な魔法力をもってすれば、無明の暗黒ですら真昼のように変えることができる。

さて。あまりにも明るすぎる光を不意にくらった人間は、どうなるのか？

背を丸めて無様に縮こまるのさ。

俺が右腕を下ろして視界を取り戻すと、足元には、そうやってしまったアキヒコが転がっていた。

剣を、アキヒコの腹に、容赦なく突き刺す。抵抗はなかった。人間の肉体だからな、柔らかいものさ。ずぶずぶ、っという感触はない。するっ、って感じ。

そして、ぐじゅぐじゅとかき回す。アキヒコの腹の内側で、俺の剣が、内臓をぐちゃぐちゃにかき混ぜていく。

聞くに堪えない絶叫が、小僧の口から上がった。ほとんど獣だ。

「ぎゃあぎゃあとうるさいこと」

ため息をついて、もう一刺し。今度は、肩だ。骨に当たって、ガチガチッという硬い手ごたえが返ってくる。

アキヒコは目を剥いて、涎を撒き散らしながら泣き喚いた。

「うるさいって。ちょっと黙れ」

悲鳴を聞くのは嫌いじゃないが、いまは、そういうときではない。魔物どもが集まってくる可能性があるしな。

杖から魔法を放つ。アキヒコに直撃したそれは、沈黙の魔法。魔法使いに対して使い、呪文を唱えられないようにするのが本来の使用法だが、こういう使いかたもある。

口がぴつたりと塞がって開けられなくなった、アキヒコ。

ああ、ようやく静かになった。

「よし、いい子、いい子。で、だ。クズ。まだ言っていなかったが、最初に言っておくべきことがあったんだ」

肩に刺してある剣は、まだ抜いてやらない。

俺は、仰向けになっているアキヒコの胸の上に乗り、背を曲げて、その瞳を覗き込む。おお、いい感じに恐怖の色が濃くなっているじゃないか。うふふっ。

剣を、少しだけ捻った。

凄まじい激痛が走ったんだろう。アキヒコの背が弓なりにのけ反り、鼻から悲鳴が漏れ出る。

「痛いだろう？　これが現実だ」

ものすごく痛いだろ？　肩から、腹から、痛みが襲ってきて、全身全霊をかけて叫びたい気分だろ？　そういう痛みのはずだ。俺がそういうふうに傷つけたんだから、そのはずだ。

クソガキを躰けるためには、やはり、痛めつけるのが一番だよな。「おまえの故郷なんぞ知らねーよ。忘れる。クソの役にも立たん思い出なんぞ消してしまえ。その代わりにこの痛みを覚えておけ。くだらん思い出よりもずっと役立つ。……この痛みが現実だ。この世界は現実だ。そいつを覚えておきさえすれば、おまえはきつと地に足がつく」

もう戻ることもできない故郷のことを思っただフラフラといつまでも泣いてやがる、そんなクソガキなぞ見ているだけでも反吐が出るし、苛立つし、なによりなんの役にも立たないからまったく無駄な存在だ。

この俺のパーティに　いや、この俺の手駒に加わるということであれば、断じて、そんなクズのままでいることは許されない。

「それと、もうひとつ」

もうひとつ、剣を捻る。

また、絶叫。

「俺のパーティにいる限り、俺の命令は絶対だ。無視することも逆らうことも許さん。なぜだか分かるか？」

俺の質問に、アキヒコは首を横に振った。

やさしい俺は、答えを教えてやる。

「俺はこのパーティの頭脳。おまえらは、手足だ。脳みその命令に逆らう手足なんぞ、ただの不良品だろう？」

ま、俺がこいつの馬鹿な行動に対して怒っていた理由といえば、この言葉で表せてしまうのである。

俺に逆らう手足などいらん。

なぜなら、

「《黄金の栄光》は、この俺のみのパーティだ……この、フェアライト・ウィケッド・セルフィッシュさま、ただひとりのな。おまえらは、手足だ。俺の言うとおりに動いていればいい」

ああ、そうさ。俺が作って俺が育て上げた。俺のための居場所。

「まずは俺がいる。シエラザードも、ウィルダネスも、ジェラルドもユーフィーナも、くっついてきた付属品にすぎん。……なぜこいつらがこのパーティにいると思う？」

不思議だよなあ。

ジェラルドだってウィルダネスだって、レベル四百を超えている。はつきりいって、リノティア学園、いや、世界の歴史からいっても非常に桁外れな、百年にひとりの逸材と呼ばれている連中だ。それぞれが独立してパーティを作るだけでも、その栄光にすぎり付こうと、メンバー希望者が国の内外から殺到し、長蛇の列を作る。

だが、こいつらはそうはしなかった。

王を名乗れる器量を秘めながら、あえてこの俺の下で手足となって動くことを選んだ。

どんな運命なのか、この時代、同時期に生まれた天才どもが、俺の配下になることを望んだのだ。

なぜだろうなあ？

「こいつらには、それぞれ大切な願いごとがあるんだよ」

それはたとえば、祖国の復興のためだとか、貧しい家族のためだとか、どうしても見つからない宝物のためだとか、いろんな理由がある。

それらに共通しているのは、たったひとつ。

「天才を超える天才であるこの俺さまの足元にすがり付かなきゃ手に入らない、大切な願いごとなのさ。だから、みいんな、俺を頼ってこのパーティに参加する。だから俺には逆らえない」

笑いが止まらない。

こんなに愉快なことはない。

「《黄金の栄光》に集まるのは手足だ。俺のために動く手足。俺の思い通りに動いて、俺の歩みを快適にするための、ただの道具。仲間なんかじゃないさ。……もう一度だけ言っが、ここは、最初からこの俺ただひとりのパーティなんだよ」

ずるり、と、剣を引き抜く。

先端が真っ赤に染まった刀身があらわになる。

血と油を獣の皮で軽く拭い、鞘に納めた。

アキヒコの腹の上から、どいてやる。

「よく理解しておけ。おまえもすでに俺の手足だ。故郷のことは忘れて、働け。そうすりゃ、いつかは帰れるだろうよ。なにせこの俺と共に歩けるんだからな。異世界に渡る方法だって、そのうち見つかると思うぜ」

これは、いちおう、本気の言葉だ。

来ることができたんだから、帰ることだってできるだろう。

もしも俺の冒険の道中、その方法を発見できたなら、存分に使うといい。もしも見つけられたなら、そして、それまで生きていられたならの話だな。

「おっと、忘れてた」

マジで忘れるところだったぜ。いや、あぶないあぶない。

独断専行、しかもユーフィーナを怪我させた罰は、きちんと与えないとな。

俺は呪文を唱えて、アキヒコに魔法をかけた。

地面に倒れたまま困惑しているアキヒコに、やさしく解説してやる。

「拷問用の暗黒魔法だ。生かさず殺さず苦しめるには、これが一番でな。失血死することも、傷口が化膿することなくなる。だけど痛みはそのまま続くし、魔法を解除しない限りは絶対に治らない。

俺たちがこのダンジョンに潜って、帰ってくるまで、そこで反省してる。ま、十時間ってところだろ」

アキヒコの表情に、絶望が広がった。

深く挟まれた腹の痛み、刺し貫かれた肩の痛み、そして、いつ襲ってくるかも分からない魔物どもの脅威。沈黙の呪文をかけられたままなので、叫ぶことすらできない。

必死になって唸りながら、俺の足元に這いずってくる。

俺はアキヒコの頭部を踏みにじり、大事な手足どもに向かつて、とびっきりの笑顔を見せた。

「よーし、それじゃあ行こうか、みんなっ！ 今日もがんばって冒険しよう」

俺の名はフェアラート・ウイケッド・セルフイッシュ。誰よりも美しく、誰よりも頭のいい、リノティア学園最強の女王。

「フェアラート、おねがいだからもう許してあげて……私なら、大丈夫だから」

「うるさい黙れ。殺すぞ」

ああ、今日も馬鹿な仲間がとっても馬鹿なこと言ってるけど、俺はちゃんとがんばるよ！ えい、えい、おーっ

十年前のお話 〈贖〉

さて、アキヒコは残念ながら……ではなくて、喜ばしいことに、生きていた。

道中、レベルでも上げようといきなり思い立ってがんばっていたから、予想以上に時間が経ってしまったて、十三時間ほど経過してしまっていたんだが、ちゃんと生きていました。ばんざい。

いまはユーフィーナの部屋で手厚い看護を受けているところだ。自分が傷つけた相手に世話をされるとは、情けない奴だ。

俺はというと、《英雄の神殿》と呼ばれる最上級パーティルームの一室、俺のための書斎にこもりきりで、書類を片付けていたところだ。

雪原を駆け巡って洞窟に潜り、魔物どもと死闘を繰り広げ、この肉体は悲鳴を上げて休息を欲しているが、休んではいけない。

冒険者はただダンジョンに潜って戦い続けていればいいという認識は、大きな勘違いだ。やることはたくさんある。

熱いシャワーを浴びて思考を鮮明にしたら、素肌の上からふかふかのバスローブを身にまとい、机と向き合って、さあ、お仕事の時間だ。

購買部には、俺たちがダンジョンで得た宝物の買い取り要請と、各パーティで争奪戦が予想される新製品を優先的に売ってもらえるよう、根回ししておく必要がある。武器やアイテムは言うまでもなく重要だ。回復薬や携帯保存食は、いつでも最新のものを準備しておかなければならない。

生徒会やら風紀委員会などのうるさい連中には、手に入れておいたスキャンダルな情報をさらりと見せつけて黙らせておくのと同時に、あいつらがちょっと甘い汁を啜れるように手配しておく。こうしておかないといざというときに非常にヤバイ。

教員どもには、今回の冒険の最中に記録しておいたレポートを提

出。それと、《コーゴ大洞窟》の内部を細部まで書き記した、緻密な地図だ。こいつは後発の連中にとってこれ以上ないというほどの宝になる。すべて俺がマッピングして、帰ってきてから清書を終えた。売り出せばけっこうな値がつくが、それよりも学園に恩を売ることが重要だ。

貴族冒険者どもの高級社交クラブ《蒼薔薇探求者同盟》から定例の舞踏会の招待状が届いてきていたので、返事を書く。えーと、喜んで参加いたします、ってことを便せん三十枚ほどかけて長大に。

あと、《黄金の栄光》の傘下に加わっている二百ものパーティが一堂に会して集会を開くので、そっちの段取りも進めなくちゃならない。みんないろいろと都合があつて大変だから。俺がしっかりと計画を立てておかないと、ぐだぐだになる。それはよくない。ええと、今週末だと《ホーリー・トライデント》は大丈夫だけど、《紅の音色》の連中は予定があつて来られないのか。じゃあ来週の頭はどうだろう……？

よいしょ、よいしょと羽ペンを走らせ、判子を押し、書類の山をいくつも片付けて、ようやくと落ち着けたのは、すでに空も白み始めたころだった。

今日も徹夜か。ま、いつものことだ。たったひとりで山のような仕事を片付けていれば、自然とこうなる。

だったら助手を使えばいいという話になるんだろうが、あいにくと、性分だね。自分ひとりでやらないと安心できない。

さて、冒険者の朝は早い。あと一時間もすればパーティのメンバー全員が集まってミーティングだ。その前に食事をする必要があるが、時間がもつたいないので水と携帯保存食ですませるとしよう。

ただ、ちよつと休憩……ふう。

と、扉がノックされた。

こんな時間に俺の部屋を訪れるような物好きは、ひとりしかない。い。

「開いてるぜ」

入ってきたのは、シエラザードだった。緑色のローブを着ている。さすがに室内だから帽子はつけてないが。

エルフ女は、わずかに呆れたような色を、その切れ長の瞳に浮かべた。

「また、眠らなかったのか」

「その暇がないのさ。心配するぐらいなら、せいぜいたっぷりと働いて、俺が眠れる余裕を作ってくれよ」

「誰が心配などするものか。おまえは、そのぐらいでは堪えんだろう」

シエラザードの声は冷たい。

まあね。

最後に眠ったのがいつだったか、俺ですらも覚えていないが、ほれ、この通り、ピンピンしてるもの。

「さて。お優しく心配してくれてるわけでもないなら、いったいどんな用件だ？」

「とぼけるな。分かっているだろう」

「あのガキのことか」

俺が言つと、シエラザードは静かにうなずいた。

「あの人間は、危うい」

「だが役に立ちそうだ。爆薬の代わりにはなるだろう」

どかんと一発、使い捨て。

だけど、なにが不満なのか、シエラザードは納得がいかない様子だ。

「私の目的を、おまえは知っているはずだな」

「まあな。どうかしたか？」

死地に飛び込み続ける《黄金の栄光》のメンバーは入れ替わりが激しい。立ち上げた当初から残っているのは、俺と、シエラザードだけだ。付き合いが長いので、お互いのことも最低限は分かっている。

「あの人間は危うい。」

私たちをも巻き込み、滅ぶだろう。いま

「すぐにもパーティーから外すか、もしくは、命を絶つべきだ」

「おやおや……さすがにエルフは言うことがちがう。」

「神に祝福された神聖な種族？ 精霊のごとき清らかな者たち？
ちがうねえ。これが、この俺の目の前にいるシエラザードこそが、
エルフどもの正体さ。」

「何千年も続く寿命なんざ持つちまつてるもんだから、とことん、
生命というものに無頓着。ひ弱で愚かな人間どものことなんざ、虫
けらほどにしか見ちゃいない。冷たくて冷たくて、氷塊そのもの。
だからキラキラと輝いていて、綺麗なように見えるのさ。」

「ま、もつとも、俺だって同じようなものだ。だから俺は誰よりも美しい。」

「しかし、それはともかくとして。」

「やめとけ、シエラザード。あいつはマーキアスの肝いりだ。手を
出せば痛い目にあう」

「おまえでもあの男は怖いか」

「怖いね。なにせ俺ではあいつには勝てん
いまは、まだ。」

「だからその恐怖を克服するために、こうして日夜を問わずに働き
続けてる。おまえも協力しろ、シエラザード。俺に手を貸せば、お
まえの願いはもつと早くかなう。あのガキもな。うまく使えば、い
い道具になるだろうよ」

「シエラザードは、それでもまだ納得がいかないようだったが、や
がて小さく鼻を鳴らした。」

「いいだろう。あの人間の処置については、おまえに任せる。ただ
し、もしものときには」

「殺すといい。どうやっても使えんゴミなら、俺だっていらん」

「それを聞いて安心した。何者であろうと私の目的を邪魔する
ことは許されんし、どんなことだろうと優先されることはない」

「平然と言う、ハイエルフの女。
怖いねえ。そして、頼もしい。」

こいつは気取っちゃいるが、俺と同類に近い。

自分の目的のためならばいくらでも冷徹になれるし、他人の命を踏みにじることに躊躇がない。

だからずつと生き残っているわけだし、俺だって、ほかの連中と比べれば、シエラザードのことを買っているのだ。

「用件はそれだけだ。私はもう行く」

「ああ、まて、まて」

立ち去ろうとしたシエラザードを呼び止めて、机の引き出しからボトルとコップを取り出した。

がんばった自分へのご褒美として用意しておいた、とっておきの逸品。

「いい酒が手に入ったんだ。魂に火が点くような、本物のスピリッツだぜ」

「……いらぬ」

せっかく誘ったというのに、俺を見るシエラザードの眼の温度は、相変わらず素っ気なくて冷たい。

「酒は魂を墮落させる。そのような代物、けがらわしいダークエルフどもならばともかく、この私が口にすることは絶対にありえん。これまでも、これからもな」

と、一方的に言って、シエラザードは姿を消した。空間転移か。普通に扉を開ければいいものを。

ま、いいや。

コップに注いだ火酒をぐびりぐびりと飲みながら、考える。

あの小僧……アキヒコ・シキムラ。

あいつを見ると苛々としてくる。あの瞳。あの、この世のすべてに絶望しているとも言いたげな瞳の虚無を見ていると、どうしようもなくどす黒い気分になってくる。

まったく、むかつく。

誰よりも美しい、この俺さまが……あんなガキの絶望の瞳を、美しいと思ってしまうただなんて。

十年前のお話。〈臆〉（後書き）

これで過去編はいったん終わりです。
次話からは現代編に戻ります。

《化け物》

「ところで……先生……」

「ん？」

ノアルくんが尋ねてきた。

「先ほどから……その……ほとんど魔物に出会っていませんが……なぜでしょうか」

「さあ？ レミリアの泣き声にビビって逃げちゃったんじゃない？」

「ひ、ひどいよう、先生……あたし、そんな大きな声は出してないもん」

さすがに、だれもフォローしなかった。

その後の探索は、本当に快適に進んだ。

さすがレベル二〇〇を超えている忍者のノアルくん。たまに出会う魔物の存在も敏感に察知して奇襲に成功するし、宝箱の罠も無難に解除してくれる。そのおかげで残りのメンバーは戦闘や探索に集中することができて、あつという間に地下五階まで進むことができた。

「今日はこんなところだろうね。みんな、とりあえず学園に帰ろうか」

「そうですね。ちょうど転移装置も見つけましたし」

一瞬にして学園へと帰還できる、紫色の球体。フロアの片隅にぽつんと置かれたこれこそが新米冒険者たちの生命線。これがあるダンジョンでは生徒の生存率が桁違いだ。逆に言うと、この転移装置が置かれていないほど危険なダンジョンの奥底、もしくは発見されただばかりで探索の進んでいない未知のダンジョンなどでは、死傷者が多く出てしまうのだが……。

「んじゃ、みんなは先に帰ってちょうだいね」

「先生はどうなさるのですか？」

「うん、俺は　いやあ、女の子の前でこんなことは言いたくないんだけど、小便したくなっちゃったんだ」

「は？」

「小便だよ小便。もう本気で我慢できない。漏れそう。いますぐここでしたいんだ。そういうわけで、生徒に見られながら失禁するわけにはいかないから、はいいところ帰っておくれ」

ちよつと内股気味に、腰をもじもじとさせる俺。

露骨にドン引きしているガゼルの視線、顔を真っ赤にしたレミリアの反応が心にグサグサ突き刺さる。

ノアルくんはなにかを見透かしたように俺を見つめていて、そしてルーティは、

「我慢しきれず生暖かい黄金水をまき散らす……それを私に間近から観察されて、羞恥のあまり情けない泣き言を漏らす先生……はあはあ……いけない、鼻血が出ちゃう」

変態だ。

水着でミーティングを開始する女よりも、この子のほうがよっぽど禍々しく変態だ。

五年前からずっと見守ってきたつもりだけど、どこかで育て方を間違ったかもしれない。

「勘弁してねマジで。それじゃあ俺はトイレの旅に行ってきます。みんな、今回の反省会は明日にするから、さっさと帰ってちゃんと休むんだぞ。でないと疲れが取れないぞ」

「はい、先生、わかりました……ふふっ、強制飲尿……はあはあ」

「死ねクズ野郎」

「先生、ばいばーい。また明日だねー」

と、転移装置を輝かせてこの場から消えていく生徒たち。

最後の生徒、ノアルくん。俺を静かに見つめる。

「……エルディナマータさんだけは、きっと本当は理解していましたよ」

「えっ、そうなの？　てつきり変態の感性を刺激しちゃったのかと」

「……たぶん、それもあるとは思いますが……。……先生、ご武運を……口惜しいですけど……。僕がいても、邪魔になるだけでしょから……」

「邪魔ってことはないけど。助けてもらってもないってただけだ」
「……そうですか。それでは……」

と、別れの挨拶を済ませて、ノアルもまた地上に帰った。
薄暗いダンジョンの片隅に、ぽつんとひとりぼっちの俺。

静かなー。

静かすぎるなー。

ほとんど魔物の気配が感じられないのは、どうしてだろう？

それは、魔物どもが、自分たちよりもはるかに強大な存在を察知して、その身をどこかに隠しているからだ。巻き添えにならないようにと願いながら、必死で息を潜めているからだ。

人間だって死にたくはない。同じく、魔物だって死にたくはないのだ。

ところで、ここにきて、ひとつの大きな問題が浮上してきた。

「いや、あれだけ言ったらなんだか本気で小便したくなってきたわやべー、どうしょー、くそー」

生徒たちを先に帰すための方便だったはずなのに。

そついや今朝からしてなかったような気がするなあ、あれっ、そう考えるとますます小便したくなってきたぞ……。くそっ、ちよつとまで俺の膀胱……。いやマジでがんばろうよ。ずっといっしょにやってきたじゃん俺たち……。あつちの世界でもこつちの世界でも良好な信頼関係を築いてきたじゃないか……。裏切らない、よな？俺は、おまえだけは俺を裏切ることはないって、信じてるぜ……。……お食事中的みなさま本当にごめんなさい……。

「我らの存在に気づいておきながら、たつたひとりで残るとはな。ククッ、余裕のつもりか？ 愚かな人間よ」

「ごめん、ちよつとトイレに行ってきたもいい？」

わりと真面目に俺は言った。

ダンジョンの暗闇の向こうで、何者かの頭の血管がブチ切れた、ような気がした。

薄暗闇の向こうから浮かび上がった、三体の人影。

漆黒のタキシードとマントを身にまとった、ふたりの男。そして同じく闇色のドレスを着た女がひとり。どいつもこいつも絵に描いたような美男美女で、なんだか傲岸不遜なオーラを発している。その紅い瞳や血色の悪い肌などからして、全員が吸血鬼か。それも高位の。

「……どうやら、この人間、気でも狂っているようだぞ。どうする、兄上、姉上？」

「まあ待て、弟よ。相手はたかが人間だ。我ら三人を前にして正気を保ってられるほうがどうかしている……寛大な心で、無礼を許してやるうではないか」

「オホホホ……ですわねえ、お兄さま。お猿さんの言うことですもの」

どうやらこいつら、兄妹のようだ。会話から察するに、兄吸血鬼、姉吸血鬼、弟吸血鬼といったところか。俺に最初に話しかけてきたのは弟吸血鬼だ。

兄吸血鬼は見事な銀髪をオールバックに整えた壮年の男。落着いた雰囲気。

姉吸血鬼はブロンドの髪を腰まで伸ばした妖艶な美女。高飛車っぽい。

弟吸血鬼は銀髪を逆立てた若い男だ。とくに偉そうでむかつく。ていうかそういうのどうでもいい。なんかこう、トイレ行くのを我慢してるときって、やたらと無駄で意味のないことばかり考えるよね。

「いや、マジで……洒落にらんくらい漏れそうなんですけど。ねえ、行ってきたいい？　すぐ終わらせるから」

「ふん、仕方あるまい。すぐにすませろよ」

「マジで？　やったー。ちょっと待っててね」

で、さつさと物陰に隠れてトイレ終了。

あー、すっきりしたああああ。お花畑が見えました。

「ありがとう。ほんとにありがとう。あんたら、いい吸血鬼だな。握手しよう。俺は四季村秋彦だ、よろしく」

「く、来るな馬鹿者っ！ 手を洗えっ、汚い！ けがらわしい畜生めが！」

「いや、そりゃあ俺だつて洗いたいけど、こんなダンジョンに手ごるな水場なんてないしさあ。水筒の水は使い切っちゃったし、俺は魔法だつて使えないから水を出せないのよ」

「し、仕方があるまい……おい、水をくれてやれ。石鹸もな」

と、兄吸血鬼が命令すると、ものすごく嫌そうな顔をした姉吸血鬼が魔法で水を出してくれて、しかも石鹸まで貸してくれた。おかげで俺の手はすっかり綺麗になった。

「なにからなにまで、本当にありがとう。このご恩はきつと忘れません。では俺はこのへんで失礼させてもらうよ」

「待てこらクソ人間」

ものすごい剣幕の弟吸血鬼に引き止められた。

そんな怒らなくなつていいだろ。ちよつとした冗談じゃないか……。

「で、なんか俺に用事でもあるの？」

「……ふざけたクズだ。兄上、姉上、もはやこの者の血を吸つただけでは満足しませんぞ。八つ裂きにして蝙蝠たちの餌にしてやる」

「まて、まて、弟よ。それはもちろんだが、まず最初にこやつが殺される理由ぐらいは教えてやろう。それが高貴な種族である我らの余裕、そして慈悲というものだ」

「オホホホホ、まったくですわ、お兄さま！」

どうでもいいからさつさと本題に入ってくれないかなあ。と、本気で思う。

「私の名はディナハン。《大地と策謀》のディナハンだ」

「オホホホホ。わたくしは《水と色事》のメルティーナ」

「そしてこの俺は《炎と剣》のキルナガーヤ。我ら三人こそが誉れ高き吸血鬼同盟《血鬼連名》を束ねる四魔将よ」

ふはははは、オホホホホ、わはははは、と高笑いを上げるお三方。俺はもういい加減に帰りたくてしょうがないんだけど、ちょっと気になったので訊いてみる。

「えーと、四魔将……だっけ？ そのわりには三人しかいないみたいなんだけど」

四天王なのに五人いる、みたいな事態が今まさに目の前で。なにこれすごくレア。

あつ、なんだか笑い声がピタリと止まった。

兄吸血鬼のディナハンが苦虫を噛み潰したような表情になる。

「貴様が殺したのだ。我らが末弟にして四魔将最後のひとり、《風と幻夢》のキルドウーヤをな」

「……ああ。あいつか」

ちよつと前に行方不明の生徒を搜索しに行ったとき、そんな名前の吸血鬼と戦つてぶち殺した記憶がある。

「ご兄弟でしたか。それはそれはご愁傷さま。大事な弟さんを殺されたんだから、さぞかし俺に復讐したいだろうね」

「はっ。いかにも猿らしい、低俗な考え方だな」

弟吸血鬼キルナガーヤは、その整った顔立ちをことさら大きく侮蔑の形に歪めてみせる。

ん？ どういうことなの？

疑問に思っていると、兄吸血鬼ディナハンが答えてくれた。

「知つてのとおり、我ら吸血鬼は貴様らとは違つて完璧に完成した種族だ。容姿は美しく、戦闘能力も比類なきほど高く、知能は抜群に優れていて、しかも永遠の生命を誇る。固体として完結しているのだ。それゆえ、貴様らのような血族同士の愛情など皆無なのだ。必要のないものだからな」

「オホホホ。キルドウーヤはそれなりに有能でしたけれど、人間ごときに負けるような者など一族の恥さらし。むしろ早めに死んで

くれて幸運だったと言えますわ。その点では、あなたには感謝して差し上げてもいいぐらいですよ、お猿さん？」

「だが、四魔将のひとりが人間ふぜいにやられて、そのまま黙っているわけにはいかん。俺たちの高貴な誇りと名前に傷がつく。《血鬼連名》の結束の揺らぎにも直結しよう。それだけは避けなければならん。よって、貴様をここで始末することにしたんだよ」

ほうほう、なるほど、そうですか。

「うん？ どうしたのかね、黙り込んで？ 死ぬのが怖いのか？

ははは、仕方のないことだ。貴様らは死の恐怖に怯えながら無様に地べたを這い回る虫けらよ。だからこそ恐れることを恥じる必要はない。我らとは根本的に違うのだから」

「オホホホホ。そうですわね。ま、無様に這いつくばって許しをこうなら、血を吸って殺してさしあげてもよろしくてよ？ ホホホ、わたくしたちに吸血されると、この世のものとは思えぬほどの快楽を得ながら死ねるのよ」

「言うておくが、いまさら生きて地上に帰れるなどとは思うなよ。

貴様は今ここで死ぬ。それは我らが決めた、確定した未来なのだ」
「なるほど」

俺は頷いた。

「よし、じゃあ来なさい。相手をしてあげよう」

そんな俺の台詞がよほどおかしかったのか、吸血鬼たちはお互いのきょとんとした表情を見合わせると、いきなり盛大に笑い始めて、
「死ね、クズ」

「お逝きなさい」

「くたばれ人間」

真正面から鋭い爪を振り下ろすディナハン、真後ろに回りこんでくるキルナガーヤ、そして魔法の詠唱を始めるメルティーナ。

俺の額にディナハンの爪が、首の後ろにはキルナガーヤが抜き放った長剣が、ぴったりと突きつけられて、俺はもはや指一本すら動かせない。ここにメルティーナの魔法をぶちかまされでもしたら普

通に死ねるね。

にやりと笑うディナハン。

「どうした、人間？ 《ノー・カウント》の名が泣くぞ？」

「まあ、仕方がないがな。劣等種族ごときに我らの動きを見極められるものか。ましてや反応するなど」

とりあえず、俺の目の前で、ディナハンの腕が半ばから切り離されて床に落ちた。

背後にいるキルナガーヤの剣も、その柄を握った腕ごと落ちる。

「うーん、弟さんのほうが強かったかもね。レベルは同じぐらいなんだろうけど、あいつはなかなか近づかせてくれなかったからなあ。あんたらは自分からすぐに近づいてくれて助かったわ」

そう言って、逆手に持っていたナイフを、手の中にくるりと反転。切っ先が正面に向くようにする。

このナイフは特注品。鈍く輝く鋼色の刀身が美しく、分厚くて丈夫、さらには切れ味も凄まじい、昔からの愛用の逸品。接近戦では銃などよりもよっぽど役立つし、なにより、いまの俺の衰えた膂力でもたやすく扱えるというのが素晴らしい。人間の一体や二体、こいつ一本で簡単に解体できる。

地面に落ちた自分の腕を呆然と見つめていたディナハンは、断末魔すら上げなかった。その頭のとっぺんから股間まで一直線に血の線が走る。

「ごめん。あんまり隙だらけだったから、とりあえず一刀両断にしておいた」

ついでに、後ろの弟吸血鬼くんも。

血しぶきを撒き散らしながら真つ二つになって倒れた兄弟吸血鬼。その死体はすぐに灰になって、ダンジョンの暗闇に散る。

俺だって伊達に十年もこの世界でがんばってきたわけではないので、この程度はリミッターを外さなくても朝飯前だ。

さて。最後に残ったのは、妹さんだけか。

なんだかただでさえ色の悪い顔をさらに蒼白にしているけど、ま

あ、目の前で兄妹の解体ショーなんて見せられたら、いくら高貴な吸血鬼さまとはいっても血の気が引くのかもね。

ちよつと近づいてみると、いやいやという風に首を横に振る、メルティーナ。

「嘘よ、こんなの……ば、化け物……！ ひいつ、こ、こないで……」

「そんなわがママを言われても困るんだけど」

「ま、待って……話し合いましょう。わたくしたち、お友達になりましょう？」

「そいつは無理だろ」

俺は、逃げようとしてこちらに背を向けた女吸血鬼に向けて銃を撃ち、殺した。

はー、やれやれと帰ってきたのは、我が愛すべき自宅。といつてもリノティア学園の教員用に貸し出されている小さなアパートの一室なんだが。もっと金があれば学園の敷地内に庭付きの豪邸でも建てられるけど、生憎と俺は安月給の平教員なのでそんな贅沢はできません。まあ、そんなに贅沢することは体質的にできない平民なので、俺はこれで満足しているのだ。台所も風呂場もあるから不自由はないしね。

玄関で靴を脱いでいると、

「あら、おかえりなさい。今日は早いのね」

と、奥のほうから声が聞こえた。

「……また入り込んでやがる」

「いけなかった？」

ベッドの上でうつ伏せになっている、幼い少女。

に、見える、クソババア。

身長は百四十センチぐらい、年齢は十代前半に見える。実際は一万歳。身に纏っているのはスカート丈の短い、簡素な部屋着。ほっそりとした華奢な体つき、栗色のふわふわとした髪を肩にかかるくらいまで伸ばしていて、その容姿は天使そのもののように愛らしいが、そのあまりにも可憐な見かけに騙されてはいけない。

少女の名前はクラティア。魔王の側近として活動する、強力にして凶悪な魔界貴族。冒険者パーティー《黄金の栄光》として活動していた俺たちと、二度、死闘を繰り広げた過去がある。

……なんでそんな超弩級の危険物がこんなところでうつ伏せになって脚をパタパタと振りながらきょとんとした眼でこっちを見てるのかというと、俺にも上手く説明することの出来ない事情が複雑に存在するのである。

とりあえずは問いたださねばなるまい。

「あんな。鍵、かかってたろ。玄関。鍵。かかってたろ」

「そうなの？ 空間転移でお邪魔したから知らなかったわ」

空間を歪めて遠く離れた場所へと距離や障害物を無視して一瞬で移動する魔法。

大魔法使いでもおいそれとは使えない超高難度魔法を、なんてことに悪用しやがる。

「かかってたんだよ、鍵。あんな、鍵をかけてるってことは、勝手に入っちゃいけませんよってことなんだよ。これ、人間社会の常識分かるか？」

「興味ないわ」

「興味あれ。つーか俺のベッドを占領すんな。つーかパンツ丸見えだ」

「見せてんのよ」

「ほう。誘ってんのか、クソババア」

「誘ってんのよ、クソガキ」

睨みつける俺と、「ふふん」と鼻を鳴らしながら余裕の目つきで

こつちを見ているクラティア。

……いいだろう。

ここは負けを認めてやろう。

「メシ食ってからな」

「野菜炒めはもう食べ飽きたわよ。今日はもつと淑女をもてなすのにふさわしい料理を作りなさいな」

「ねーよ。そんなレパートリーないから、俺。そういうのが食べたのなら自分で作るか、家に帰れ」

ちなみにこいつの家というのは、もちろん魔王の居城のことである。

適当に野菜と肉を炒めて食卓に並べると、クラティアは「焼き加減が」とか「味付けが」とか不満を言いながらも結局は食べた。

まあ、なんだかんだと不平不満の多い女だが、大概のことは我慢してくれる。

なのでこつちも気楽と言えば気楽だ。

食べ終わってから一息ついていっていると、クラティアが言った。

「最近、うるさい蚊やダニが多いようね」

「……？　なんだって？」

「奴らは……三匹や四匹ほど潰したところでいなくなったりはしないわ。むしろあなたをますます憎み、その血を吸おうと躍起になるでしょうね」

なるほど。

クラティアの言わんとしていることが、やっと分かった。

「ご忠告ありがとさん。　ま、なんとかするさ」

「なら、いいのだけれど。真祖ワムピュルス・グリコラスは冷酷でしたたかな男よ。そして彼はなによりも一族の面子というものを重んじるわ。せいぜい気をつけておきなさい」

仲間を殺されたら黙ってはいない　、か。

そついう点では、俺たちも、奴らも、同じだな。

まあ、特に目の前のクラティアなどを見ていると、魔族というの

がいったいどういうものなんだろうと考えるようになってしまう。
人間ではない、が、人間とまったく違うというわけでもない、人間と敵対する種族。

魔族というやつの正体を、俺は、いまだに知らない。

「私は」

クラティアが言った。

「知つての通り、あなたの味方ではないわ。たとえばあなたが今ここで魔族の手によって八つ裂きにされようとも、私はあなたを助けないし、涙を流すこともない」

……それがクラティアの立ち位置というものだろう。

「なんだ、いまさら？」

「それでも私がこんな忠告をしたのは、むぎむぎとダニどもに殺されるなど許さないということよ。魔界の怨敵、《黄金の栄光》の《ノー・カウント》。いずれあなたを殺すのは、この私なのだから」

艶然と笑う、クラティア。

その言葉は、真実だろう。俺の肌が粟立つのだから。

そしてこの女にはそれを実行するだけの実力が十分にある。

もつとも、それは、俺のほうとて同じこと、だ。

数年前から、なんの因果か付きまとわれて以来、いろいろと馴れ合つてはいるが、俺とこいつの関係は結局のところ、敵同士だ。

……そういう意識があるせいなのか、お互いに遠慮のない付き合いが出来ていて、それが心地よかったりするのが厄介なのだが。

「ところで」

それはともかくとして、だ。

「メシ食ったから、するか」

「よくつてよ。かかつてきなさい、クソガキ」

不敵な笑みをぶつけ合う俺たち。

で、二時間後。

「ああああ、あ、っ、があ、あ、っ、壊れるっ、やめっ、ぎい

いいいいいいッ！ くそつたれっ、ふざけんじやないわよちくし
よおおおッ！ ああっ、死ぬ死ぬ死ぬっ、もう死ぬうっっ…
…！ や、やめやがったらブツ殺すわよ、殺してやるっ、ブツ
殺してやるっ、腐れ人間がああっ、ごっ、っ、死ぬっ、死んじや
うううッ、壊れる壊れるっ、ごわれるっ、ごがああああああ
死ぬ 死ぬ ううッ！
よし、完全勝利。

八年前。

魔王との戦いでリーダーを失い、命からがら撤退した俺たち《黄金の栄光》は、自然と解散することになった。

もともと、フェアラートという女がいたからこそパーティーを組んでいた俺たちだ。

だれもあいつの代わりになれなかった。だから解散した。

メンバーのみんなは、自分の国に帰ったり、どこか遠い異国へ旅立ったりした。

俺も、そうすることにした。

リノティア学園にはあまりにも《黄金の栄光》としての思い出が多すぎて、当時の俺にとっては居づらい場所となっていたから。

だから、目的地があるわけではなかったけれど、とりあえず旅立つことに 逃げ出すことに、した。

シェラザードはつれていかなかった。

唯一、この国に残っていた彼女だったが、俺は、一人でゆっくりと旅をしたい気分だったのだ。

なのに。

ふと気付くと、見知ったロリババアが横に並んで歩いてやがった。

で、それから年月が経つたいま、朝を迎えて目が覚めると、横にそのロリババアが寝てやがる。しかも素っ裸で。

気持ちよさそうにすやすやと寝息を立てているクラティアの顔を

見て、なんとも言えない複雑な感情に駆られてしまう。

こいつ、人類の超天敵で、人間のことなんざ虫けらぐらいにしか思っでなくて、数え切れないぐらいの人間をその手で虐殺してきた、とてつもない邪悪生命体のはずなんだよな。

こうしてみると、普通のロリババアなのにな。

いや、ロリババアって時点でもう普通じゃないんだが。

とにかく、年相応の、十二歳ぐらいの少女に見える。不思議なことに。

「……おい、起きろ」

ちよつと肩を揺すってみる。「んー」と唸って顔をしかめるだけで、目覚める様子がない。

「朝だぞ、おい」

「起きたくない」

「はあ？」

こいつ、本当は目覚めてるのか？

仰向けで目をつむったままクラティアは言った。

「淑女は殿方の口付けで目覚めるものなのよ」

……なに言ってるんだ、こいつ。

またいつものようにどこから仕入れてきた情報に影響されたのか？

まあ、べつに減るものでもないし、かまわないが……。

と思っしたのでキスしてやると、クラティアは驚いたようにいきなり目を見開き、俺から逃げるようにして回転してベッドから落ちた。さらに、

「な、なにすんのよ!」

と、顔を真っ赤にして仰いました。

馬鹿ですか。

「なにつて、おまえがしろつて言っただろうが」

「アホ抜かせ! 言ってるわいよ!」

「いや、だって……」

「うるさい愚か者！ あ、ああ、もう、朝から……き、汚い、腐れ人間の唾液、汚いっ」

腕で口元をゴシゴシと拭う、クラティア。

「あー、はいはい。悪かったよ。二度としない」

「二度と、って、……べつに……そ、そこまでは……」

ぶつくさと呟く、クラティア。

「あ、あなたがどうしてもやりたくて仕方がないと言うなら、これからはさっきの方法で起こしてくれても……」

「どうでもいいけどさっさと胸を隠して股を閉じる。いろいろと丸見えだ」

「……ッ！ ばかつ！」

クラティアは手近にあった自分の枕を引っ掴むと、勢いよく投げてきた。

ひよい、つと避ける、俺。

勢いのつきすぎた枕は、壁に当たると同時に張り裂けた。飛び散る羽毛。汚れる俺の部屋。

「おい。片付けろよ、これ」

「ふん、知らないわ」

そっぽを向く、クラティア。

なんて酷いことをしやがるんだ、魔族め。

時計を見ると、クラティアと遊んでいる時間はあまりないようだ。

「俺はこれから仕事だから、おまえもさっさと帰れよ。ほら、ぱんっ」

足元に脱ぎ散らかされていた、妙にかわいらしいフリルつきのシヨーツをつまんでみせると、ものすごい形相を浮かべたクラティアの腕が凄まじい勢いで奪っていった。

「あなたって本当に最低ね！」

いまにも顔から火を噴きそうなクラティアが、いそいそとシヨーツを履きながら言う。

すでにいろいろと見せ合っているというのに、おかしなことを気

にする女だ。

仕度をすませて家を出る直前、思い出したことがあったので、コートポケットから取り出したものをクラティアに渡した。

それを受け取ったクラティアは、きよとした表情で首を傾げた。

「……鍵？」

「この家の合い鍵だ。持っとけ」

「どうして？」

「おまえ、どうせ次もまた空間転移で乗り込んでくるだろ。いいかげん、そういうのは落ち着かないからやめろ。しょうがないからその鍵を渡しとく。だからちゃんと玄関から入ってこい」

なんかこう、いつでもポンポンと空間を渡って入ってこられてしまうと思うと、精神衛生上、けっこうよくないものがあつたりするのだ。

クラティアは、手の平の上にある鍵と俺を交互に見やっってから、なぜか腕組みして不敵な笑みを浮かべた。

「いいのかしら？　これで私はいつでもこの部屋に出入り自由、いくらでも罾を仕掛けられるということよ。あなたは自分のテリトリ―を自ら敵の手に明け渡したも同然なのよ！」

「いや、もともとおまえがその気になれば仕掛け放題だっただろ、罾とか」

「そ、それもそうね……」

「だから持つてろよ。その代わり、空間転移は禁止な。わかったか？」

こくこくとうなずく、クラティア。

「よし、じゃあ行ってくるわ。またな。鍵、閉めとけよ」

「え、ええ。……わかったわ……」

ぼうつとした顔のまま俺を見送る、クラティア。

「あ……今日の夕食飯、私が作るわ。なにがいい？」

「ん、ハンバーグとか」

「分かったわ。行つてらっしゃい」
クラティアの表情に浮かぶ、淡い笑顔。
小さく手を振ってくる彼女に背を向けて歩き出す、俺。
……なんか、いまさらになつて胸がドキドキしてきた。
敵同士のはず、なんだけどなあ……。。

《魔界十二支族・その一》

この世界の覇権を握っている種族とは、人間族である。というのが、個人によって異論はあれど、おおむね一般的に定着した見解だ。単純に人間族の総数がその他の種族のそれに比べて圧倒的に多く、技術や文明が繁栄しているため、世界の主権を握っていると見られることが多い。

そして、人間族と同盟を結ぶ種族、人間族の隷下として奉仕する下等種族、もしくは人間族とのあいだに相互不干渉の契約を交わしている種族などを総じて、人類と呼ぶ。

広義における魔族と称される種族とは、そういった条件の正反対つまり、人間族と手を組まず、人間族を隷下として扱い、人間族に対して宣戦布告を表明している、不倶戴天の種族のことである。

魔族と一口にいつても、人類の内実が多種多様な種族の混成であるように、魔族もまた、数多の種族が入り混じる混沌とした勢力だ。ブタやオオカミのような獣が魔力によって凶暴化しただけの種族から、人間とほぼ変わらない能力と外見を有する亜人タイプ、そして、人智をはるかに超絶する能力を持つ魔神。

そのすべてを一括りにして魔族と称するのはいささか乱暴なカテゴライズだが、しかし、そうするよりほかに適当な方法が見つからなかったというのが事実だ。

なにせ、彼らの思想、能力、外見、歴史、そのすべてが千差万別。共通しているのは、人類に対する圧倒的な害意のみ。

人類の肉を引き裂き血をすることを最大の快楽とする、尋常ならざる殺意。

ゆえに彼らは一括りにされているのだ……魔族、と。そして魔族の本拠地を魔界と呼ぶ。

全知神エンディミオンは、この魔界を創造し、魔王たるおのれを頂点とする権力のピラミッドを構築した。

貴族統治を採用している魔界では、魔界貴族が絶対的な支配力を持つており、下層の一般臣民がこれに逆らうことは至尊の君主に逆らうことと同義である。

魔界貴族とは、魔界の支配階級、選り抜かれた少数の名門、高貴なる血筋。魔族の中の魔族。

その位には五等爵という序列が存在しており、上から順番に公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵と並ぶ。

実力こそがすべてという魔界においては、当然、爵位が上になればなるほど強い魔族だということになる。

もちろん、代々の当主には魔界大元帥子飼いの貴族院による厳しい審査の目が向けられ、その実力や品性によっては爵位の昇格や剥奪もありうる。

魔界十二支族とは、そんな魔界貴族の頂点に君臨する十二の貴家であり、魔王に代わって平時の魔界を統治する最高評議会である。構成するメンバーは全員が公爵級魔界貴族の当主。名実ともに魔王にもっとも近い地位に座る最強の魔族たち。その影響力は魔界全土に及ぶ。

多忙を極め、つねに魔界各地で活動し、あるいは人間界での暗躍や戦争活動に明け暮れている十二支族は、全員が一堂に会するということが少ない。

が、今日、この日、十二支族が、魔王城に集う。

魔王城の一部、普段は魔界大元帥が政務のための拠点としている《運命宮》の一室を会議の場として。

ランプの魔光によって明るく照らされた室内。

長大なテーブルと、十二の椅子。

テーブルには最高級の紅茶と茶菓子が用意されていた。

壁際には、幾人もの使用人たちが表情に緊張の色を浮かべながら直立している。なにせ十二支族が集まるというのは魔界にとって指

折りの大事だ。使用人でさえ選び抜かれたエリートばかり……その彼らでさえ隠しようのない緊張と不安を抱えている。

会議は魔界時刻において午前十時きっかりに始まる予定だ。

午前九時三十分、最初に会議室の扉を開けたのは、二十代前半の年齢に見える、金髪碧眼の優男。

一八〇センチの長身、引き締まった筋肉質な体つき。簡素なシャツとズボンのみを身に纏った出で立ち。くしゃっと乱れたような金髪。優しい目つき。絶世の美女と見まがうほどの、凄まじい美男子だ。

ルガル・リカンスロpos。《餓狼》、《無双》の異名を持つ男。白兵戦においては無類の実力を誇り、満月の夜には不死身と化す、誇り高き人狼族の長。レベル九〇〇以上。無敵。

狼の王は悠然と歩く。

「いや、いい。ありがとう」

出迎えようとした使用人たちを片手で優しく制すると、ルガルはテーブルの上座から数えて四番目の席に座った。

「まだ、だれも？」

「はっ、リカンスロposさま！ いまだ、どなたも！」

「ありがとう。そうか、私が一番乗りか。少し早く着きすぎたかな

……」

ちよっと心配そうに言って、紅茶を一口、口に含む。

「うん、うまい」

満足そうにルガルが言った直後、再び扉が開いた。

入ってきたのは、身長一九〇センチメートルを越える壮年の巨漢である。

黒く日焼けしたような褐色の肌と筋骨隆々とした肉体、後ろへ丁寧に撫でつけた銀髪、立派なカイゼル髭、周囲を威圧するような鋭い眼光、そして長く伸びた尖り耳。

漆黒の軍服を身に纏い、腰には長剣を提げている。
ケズム・シアオジンリン。闇に染まりしエルフ族、ダークエルフ

最強の豪勇。魔界において比類なき剣術の使い手にして、卓越した魔法の冴えをも合わせ持つ魔法剣士。《魔剣王》。レベル九〇〇以上。無敵。

ケズムはちらりとルガルのほうを見やってから、視線を戻し、無言で自分の席へと座った。八番目の席へと。

「ごきげんよう、シアオジンリン公」

にこやかに言ったルガルに対し、ケズムは会釈のみを返した。

「お互い、早く着きすぎたようですね」

「……他のお歴々が遅すぎるのではありませんかな」

腕組みをしたケズムが、眉間に皺を寄せ、苦虫を噛み潰したような顔をして、重々しい声で答えた。

「大元帥閣下がじきじきに招集をおかけになったというこの会議に遅参など許されますまい。ましてや、我らはそれぞれに責任重大の聖務を背負う身。会議の内容がどうであれ、早く始まり早く終わるにこしたことはありませんね」

「ははは、たしかに。ごもつともです。では祈るとしましょう、そうなることを」

ルガルとケズムの祈りが届いたのかどうかは定かではないが、そもそも祈ったかどうかさえ定かではないが、三名が連続して到着した。

波打つ長髪とふくよかな体つき、慈愛に満ちた表情を浮かべる妙齢の美女、ネロミロス・ムーラン・ア・オー。《スライム・クイーン》。スライム族の原点、偉大なる母にして女王、人間界から魔界へと続く軌道エレベーターの最終防壁の守護を任せし不動の母神ありとあらゆる物理攻撃と魔法攻撃を無効化する最強の肉体の持ち主。レベル九〇〇以上。第五席。無敵。

漆黒の分厚いローブを身に纏い、尋常ならざる邪悪の妖気を発しながら歩く骸骨姿、マレフィキウム・スケレトウス。《邪眼王》、《リッチ・キング》。悪霊と冷気の支配者。眼球のない髑髏顔、空虚な眼窩が淡く紫色に発光している。魔王エンディミオンと魔界大

元帥に次ぐ魔法の使い手であり、得意とするのは時空の操作と因果律の改変。そして睨みつけるだけで相手を殺す魔眼を隠し持つという。レベル九〇〇以上。第六席。無敵。

燃えるような灼熱色の体躯と四メートルを越えるずば抜けた長身、圧倒的な筋肉、乱れた黒髪、額の左右に生えた二本の角が特徴的な、乱杭歯のオーガ。黄金色の双眸は邪悪な殺意に満ちている。《鬼神》イムラーク・ギガンダス。山をも持ち上げるといふ剛力を有し、その莫大な魔力によつて台風を呼び大地震を引き起こす、鬼族の長。レベル九〇〇以上。第十二席。無敵。

「ごきげんよう、みなさん」

「ごきげんよう、ネロミロス殿」

ネロミロスのほがらかな笑みに応えたのはルガルのみだった。

「相変わらずのお美しさ、この瞳が潤うようです」

「いやですわ、リカンスロポスさま。こんなおばさんをつかまえて」「ご冗談を。たとえ陽が沈もうと、あなたの美貌が陰ることはありえません」

ネロミロスとルガルが挨拶を交わしているあいだにマレフィキウムとイムラークは黙って自分の席に座り、ケズムは腕組みしたままうつむくようにして黙している。

「まだ、ほかのみなさんは到着なさってませんのね。よかったわ。わたくしが一番最後になるかと心配していましたのよ」

「その心配には及ばんでしょう。時間に寛容なお歴々ばかりのようですからな」

ケズムが苛立ったようにして言った。

時刻は九時四十分。

「まだ余裕がありますよ、シアオジンリン公。気長に待ちましょう」「気長に、だと？ いまのは俺の聞き間違いか？」

ルガルに対し、わざと驚いたように言ったのは、オーガのイムラーク。

「悠長なこと言ってる場合か！ 気長に、なんてのはありえねーだ

る。ええ、おい？　どうでもいい会議なんざのために貴重な時間を浪費するぐらいならよう、鉄火場で一匹でも多くの虫けらどもをぶち殺す！　肉片に変えてやる！　それが俺たちの役目だろうが！」
唾を飛ばし、腰を浮かせ、いまにもルガルに噛みつきそうな勢いで叫ぶ、イムラーク。

身長四メートルの巨体による威圧感も含めて、その鬼気は、並みの戦士ならば触れただけで狂死するほどに凄まじい。

「どうでもいい会議というのは、言い過ぎでしょう。　ですが、軽率な発言であったということは認めます。申し訳ありませんでした、ギガンダス公」

ぺこりと頭を下げる、ルガル。

イムラークは毒気を抜かれたように「ふん」と鼻を鳴らし、椅子に座り直した。

さらに五分が経ち、三人が到着した。

夜の闇のような色合いのドレスを身に纏った、銀髪の美女。外見年齢は二十代前半、大きく開いた胸元からたわわに実った乳房がこぼれ落ちそうだ。この世のすべての男を魅了するかのようなグラマラスな肉体の持ち主。《傾国》ピラズイモス・テンタツイオーネ。指先の動きひとつで百万人を魅了し操るという、サキュバスの女王。レベル八〇〇以上。第十席。無敵。

杖で床を叩くような音は、《大海魔》ゼーマン・ルイバーク・アシミノークの義足によるものだ。老齡の域にある外見年齢、逞しい体つき。魔界海軍の総司令官であり、魔界海軍旗艦の艦長でもある、偉大なる海の男。白い海賊帽、白いマントと海賊服。右手は鋭いフツク、左足は木の棒の義足。右目は眼帯に覆われ、口元にはパイプをくわえ、そしてなんと髭の代わりに蛸の触手のようなものが何十本も生えており、それぞれがしきりに蠢いては伸び縮みを繰り返している。レベル九〇〇以上。第七席。無敵。

銀髪のツインテールが風雅に揺れた。《墮天使長》ティアンス・エンゲル・アングロスだ。右目が紅、左目が蒼という神秘的なオツ

ド・アイの持ち主。絶大な魔力により天空をも断つという長大なる槍、《神魔槍ネメシス》を背負い、いかなるときでもその表情を動かすことはない、小柄な少女。レベル八〇〇以上。第十一席。無敵。「あらん、みなさんすでに到着なさってたのねえ。あたし、ちよつと遅かったみたあい。ごめんなさい」

サキユバスの女王ピラズイモスが微塵の誠意もない声と表情で言う。

ケズムの眉間のしわがますます深くなる。

ルガルが明るく言った。

「問題ありませんよ、ピラズイモス殿。まだ時間前です。アシミノーク公、お元気そうでなにより……ますますのご活躍とのこと、私の耳にも届いておりますよ」

「おう。ありがとよ、坊主。そっちも調子がいいそうじゃねえか。異民軍の連中をまた蹴散らしたってな。相変わらずのようで安心したぜ」

ガハハハ、と豪快に笑う、ゼーマン艦長。

「ところで、いまんとこ集まってるのはこんだけか？ あと来てないのは、大元帥閣下、グラディバール公、バルログ公、それとヴリコラカスか……」

「アシミノーク公」

ルガルは静かに言い、首をゆっくりと左右に振った。

ゼーマンはルガルの言わんとしたことに気付いたのか、「すまねえ」と小さく言い、黙る。

「いえ、仕方のないことです。バルログ公がお亡くなりになるとは……私もまだ実感できていませんから」
ルガルの言葉は悲しみに満ちていた。

室内に暗い沈黙が落ちる……。

数年前の事件。

第三席、右元帥バルログの死は、全魔界貴族にとつての、否、魔界に住まう者すべてにとつて、あまりにも突然で、あまりにも大き

な事件だった。

それほどまでにバルログは強く、偉大で、敬愛の対象であったのだ。

かの右元帥を実の父親のように慕い、直接の弟子でもあったルガルはもちろんのこと、不誠実が服を着て歩いているようなピラズイモスや鉄面皮の《墮天使長》ティアンスでさえも胸の痛みを覚えたかのように黙り込み、うつむく。

イムラークだけが、舌打ちしそうなほどに顔をしかめていた。そのとき、扉が開く。

午前九時五十五分。

姿を現したのは

《魔界十二支族・その二》

「いやーっ、どうも！ どうも！」

扉を開けるなりペコペコと頭を下げてへらへらと笑う、男。

七三分けに整えた黒髪、黒縁の眼鏡、覇気のない細面、痩せぎすの長身、漆黒の燕尾服。

もつとも気高い血筋に生まれし吸血鬼、《真祖》、《夜魔の王》
ワムピュルス・ヴリコラス。第九席。

「どうもーっ！ たいへん遅くなりました！ いやっ、申し訳ない！ みなさんおそろいのようで！ さすが！ さすがにお早い！ 不覚にもわたくしっ、野暮用で遅参してしまいましたっ、なにとぞご容赦をっ！ もうしわけない！」

室内に、冷氣のようなものが満ちる。

使用人たちの顔が青ざめた。

集った者たちの肺を冷たい空気で満たすのは、最強のダークエルフ、ケズム。

それだけで人間を殺す威力を秘めた視線が、ワムピュルスを射貫く。

「言い訳はどうでもいい。いますぐ席に着け」

「ははーっ！ いやっ、申し訳ないっ、シアオジンリン公！ ただちにっ！ ただちに！」

ペコペコペコペコっ。

ワムピュルスは、およそ吸血鬼族の頂点に立つ男とは思えぬ腰の低さで、何度も何度も頭を下げながら、九番目の席へと座った。

自分の席に座ってから、周りの者に頭を下げることを忘れない。「いやっ、ごきげんうるわしゅう、テンタツィオーネ殿！ お久しぶりでございます！ 相変わらずお美しいっ！ いやーっ、まさに、

まさに、傾国の美貌！ 魔界随一の美貌と謳われるのもうなずけま
すっ、ああっ、もちろんネロミロス殿、ティアンス殿も優劣つけが
たいほどお美しゅうございますよっ、へへっ、いやーっ、これほど
の眼福っ、わたくしっ、天にもものぼるような気持ちでございますっ
！」

サキュバスの女王ピラズイモスは、鼻で笑うようにして冷笑を浮
かべた。

ネロミロスは困ったようにして曖昧な笑みを浮かべる。

ティアンスは完全に無関心といった様子で、ワムピュルスのほう
を見ようともしない。

「あっ、あっ、お久しぶりでございます、リカンスロポスさま！
どうもーっ！ またもやたいへんなご活躍だったそうで、わたくし、
感動いたしました！ なにしるあの異民軍を破竹の勢いで蹴散らし
たそうでっ、ええ、すばらしいっ！ いやあーっ、すばらしい！
さすが、第四席！ ははーっ、わたくしも見習いたいところです！」
「おい、グリコラカス」

海軍総司令官ゼーマンが言った。

重々しく、野太い声。

「ここにいる全員、いまはおまえのおべんちやらなんぞ聞いてやる
気分じゃねえんだ。黙ってな」

「はっ……も、申し訳ありません、アシミノーク公！ はっ、申し
訳ありません！」

ワムピュルスはまたしてもぺこぺこ頭を下げる。

「ふひ、ふひひっ」

頬肉と唇の両端が引き攣ったようにヒクヒクと吊り上がる、奇妙
な笑い方。

ピラズイモスやイムラークが嫌悪感を覚えたようにして目をそむ
けた。

「お褒めのお言葉、ありがとうございます、グリコラカス公」
にこっ、と爽やかに、すばらしい絵画のような笑みを浮かべる、

ルガル。ヴリコラカスの不愉快で卑屈な笑みとは対照的だ。

「ですが、そろそろ会議が始まる時刻のようです。静かに待つとしましょう」

「ははーっ！ まさに、まさに、お言葉の通り！ 失礼いたしましたっ！」

そう言っつてヴリコラカスは、紅茶を口に含む。

ずそぞそぞ、と音を立てて下品に茶を啜る姿に、慈母ネロミロスでさえ顔をしかめた。

「……それにしても、今回の会議はいつたいなにを議題にするつもりなんだ？」

イムラークが言った。

ゼーマンが応える。

「おおかた、北方の戦線についてだろうよ。あつちは異民軍の勢いが強いからな……ケズム、おまえさんの軍だけじゃあ手が足りてねえって話じゃねーか」

「……問題ありませぬ、海軍総司令殿。すでに決着は見えておりますゆえ、近いうちにきやつらの命運は断たれましょう」

「ほう、そうかい。だったらいいんだがな。なんならうちの若い衆を貸してやつてもいいんだぜ。人間どもなんぞ相手にしてもつまらんと騒いでる、血気盛んな連中が大勢いるんでな」

「問題ありませぬ。我が種族の誇りにかけて、必ずや聖務を遂行いたしまする」

ケズムの瞳には、尋常ならざるプライドと覚悟があった。

たとえ次の瞬間に自分が死ぬことが分かったとしても、この戦士は他人に助けを求めないだろう。

ゼーマンは「そうかい」と肩をすくめた。

「気をつけるんだな、ケズム。異民軍は人間どもの比じゃねーぞ」

「それでも、最期に勝利するのは我らであります。ご安心くだされ、海軍総司令。魔王陛下のご威光に泥を塗るような失態は、けっして」

「そついうことを言ってるんじゃないねえ。俺はおまえらの命を心配し

「てるんだよ」

十二支族最古参の一人であるゼーマンの表情に、苦々しいものが浮かぶ。

「一万年間……多くの兄弟たちの死を見届けてきた。慣れちゃったつもりだったが、バルログ公のことで思い知った……俺はやはり、兄弟が死ぬのを見るのはつらい」

深い、ため息。

疲れきった表情。

「ケズム。俺にとっちゃあ、おまえさんも兄弟なんだ。だれだろうと、陛下のご恩寵のもとに生まれた連中はみんな俺の兄弟だ。くそつたれの人間どもや異民軍なんぞに殺されてたまるか」

室内に重い空気が満ちる

(兄弟……？ ふ、ふふっ……)

薄く、侮蔑を込めて笑った者がいることに、だれも気付かない。ただ、その当人以外は。

「全員、そろったようだな」

よく通る、重低音の声。

静かに扉を開いて現れたのは、左元帥、グラディバール。

年齢三十代後半に見える男。

肩のあたりまで伸ばした豪奢な金髪、異様なまでに整った顔立ち、一九〇センチを越える長身と、がっしりとした筋肉質な体躯。

漆黒の生地に黄金の刺繡をほどこした分厚いロープ、荘厳な雰囲気
を身に纏う、貴族風の男性。全身からおびただしいまでの覇者の
気を放っている。

グラディバールが姿を現した瞬間、使用人たちはもちろんのこと、十二支族の面々までもが緊張に身を固くし、その表情に畏敬の色を

浮かべ、立ち上がった。

この男こそが、魔王、魔界大元帥に次ぐ三番目の地位に座る、十支族第二席。

すべての竜族の始祖にして頂点。

《始祖竜》、《冥王竜》グラディバル。

一見すると、ただの人間族の男。しかしながらその正体は、全長五十キロメートルを越える超巨体を誇る史上最強の巨大竜である。

素手で大陸を真つ二つに砕くパワーはもちろんのこと、魔法力においても空前絶後。

天候、時空、因果律、確率を自由自在に操り、超絶的な復元能力による不死身を誇り、その戦闘能力は大元帥クラティアと比肩するという。

レベル、測定不能。無敵。

最強のドラゴンは、その両眼を常に閉ざしている。

これは、おのれのあまりに強大すぎる魔力を制御するためであるという。

グラディバルが両眼を開ける瞬間、大陸のひとつやふたつは消滅し、因果律がねじ曲がって世界が崩壊すると言われる。

満足げに微笑む、グラディバル。

「貴公らはそれぞれに栄誉ある聖務を与えられし身……その多忙ゆえに幾人かは姿を見せられぬかと思っていたのだが、こうして欠けることなく集まってくれたことは、我にとって存外の喜びだ。礼を言わせてもらう」

「もったいなきお言葉……」

「過分の栄誉でございますわ」

ルガル、ネロミロスが慇懃に頭を下げる。

他の者も一様に頭を下げた。

「よい。みな、楽にしてくれ。我と貴公らは志を共にする同胞……畏まる必要などありはせぬ」

だが、だれがこの竜神に対して畏まらずにいられようか。魔王と

魔界大元帥に次ぐ男にして、もつとも誉れ高き戦士と言われる、史上最強のドラゴンに。

グラディバルは自分の席へと歩み、座った。

その瞬間を待っていたかのように、上座に人影が浮かび上がる。

少女。

栗色のふわふわとした髪を肩のあたりまで伸ばし、豪華な純白のドレスで着飾った、天使のように愛らしい少女。

少女が座るのは十二支族筆頭のみに着席を許された、至高の座。そこに座るということはすなわちその者こそが魔界貴族の頂点に位置する、魔王の右に立つ身分だということを意味する。

つまり、魔界大元帥とは、このあまりにも可憐な少女を指し示す。だが、どんな人間族の貴族でさえ気圧されてしまうような圧倒的な高貴さ、美しさを誇る少女でありながら、その華奢で小柄な体躯から放たれる尋常ならざる傲岸不遜な覇気は、どうしたことか。

グラディバルを除いた全員の背筋に冷や汗が流れる。

単身で人類世界全体を脅かす能力を持ち、数千万から数億を越える軍勢を指揮する彼らが、たかが十二歳前後としか見えない少女の姿に、恐怖を感じている。

無理もない。

少女の名はクラティア。

偉大なる魔界の大元帥にして魔界貴族筆頭、魔王エンディミオンの側近中の側近。

《光と風と憎悪の魔神》だ。

グラディバルに向けられることの多い感情は、尊敬、畏怖だが、クラティアに向けられるのは、恐怖のみ。

魔界でもつとも冷酷で残虐な、邪知暴虐の女魔神。それがクラティアだ。

レベルは測定不能。魔界最強。無敵。

魔界開闢以来、一万年の年月を魔王の右腕として送ってきた女傑は、姿を現すなり、こう言った。

「ちょうど、十時ね。会議を始めるわ」

頬杖をつき、余裕のある表情を浮かべる。

「大公爵閣下」

「ルガル。挨拶はけっこうよ。全員、座りなさい」

「はっ」

全員が着席するのを待ってから、クラティアは言った。

「おまえたちをこうして集めたのは、言うまでもなく、重大な議題があるからよ。今日はそのことについて話し合うつもりなのだけだ
ど」

くすくす、と。小さく軽やかに笑う。

「ことによつては、この中のひとりかふたり……消えてもらうことになるかもしれないわね」

だれもが兄弟　ゼーマンの台詞など、クラティアにとっては、なんの意味も持たないのだろう。

魔界でもっとも美しく、もっとも残酷な魔神は、愉快げに、十二支族の面々を見回した。

《魔界十二支族・その三》

クラティアのあまりにも物騒な台詞によって硬直した、十二支族会議の空間。

呼吸することさえ躊躇われるほどの静寂が広がる。

そんな中で最初に言葉を発することに成功したのは、ダークエルフのケズムだった。

「……大元帥閣下。消える……とは、いささか穏やかではありませんな。失礼ながら、いったいどういう意味なのでしょうか」

「そのままの意味よ。会議が進み、その内容しだいによっては、おまえたちのうちの何人かに消えてもらうことになる……文字通りにね」

冷たく言う、クラティア。

その場に集まったほとんど全員が息をのんだ。

大元帥クラティアに限って、その言動がいかに残酷で信じがたいものであったとしても、それが誇張や冗談などであるはずがない。

殺すと言えば殺すし、死ねと言えば死なせる。

消すと言ったら、それは、言葉通りに消すということなのだ。

高まる緊張を感じ取ったのか、クラティアは「ふふふ」と楽しそうに笑った。

「安心なさいな。まだ、もう少し先のこと。とりあえずいくつかの議題を片付けてから……」

だが、安心できる者などいるはずがない。

消える。

消される。

だれが？　いったいどうして？

それぞれが不安を抱えるなかで、会議は始まった。

「てつとりばやく進めましょうか。 ケズム。北の戦線における状況の遅延、この理由を説明しなさい」

やはり、という空気が、十二支族たちにはのしかかる。

魔界の北方領土における異民軍との戦争は、魔王軍にとって開戦当初の予定を大幅に上回る苦戦の連続であり、一進一退の泥沼状態と化している。

異民軍とは、人間界には存在しない魔界特有の勢力だ。その戦力は、人類軍など一蹴できる魔王軍でさえ苦戦を強いられる。

そんな異民軍に対して自分の一族のみで立ち向かうケズムの決意は雄々しい。

しかし、いかなる理由があろうとも、魔界大元帥に言い訳は通用しない。

「……いまだ異民軍を駆逐できておらぬこと……痛恨の極み……」

口が、錆び付いたようにゆっくりと動く。

クラティアと目を合わせること避けている。

ケズムをじいつと見つめるクラティアの双眸が、底知れぬ暗闇に繋がっていた。

（化け物……め……。見えぬ……果てが……）

史上最強の魔法剣士たるダークエルフの背中を冷や汗が濡らしていた。

「……あえて申し開きをさせていただくならば……かの地は我らにとつてあまりにも未知。慣れぬ土地で戦う以上、予定通りにはまいりませぬ……」

「呆れたわ」

はつきりと失望の色を含めた、ため息。

「地の利は人の和に如かず。たとえそこがどんなに不利な土地であろうとも、おまえたちが本当に一致団結した軍団であれば問題はなはずよ。……使えないわね、ダークエルフは」

「……なッ、なんと……!？」

「プライドばかり高くて言い訳や意気込みだけは一人前の無能ども……まるでおまえの一族のようね、ワムピュルス？」

クラティアの、にっこりとした笑み。
ただし目はまったく笑っていない。

ワムピュルスは、縮こまるようにして頭をぺこぺここと下げ、両手をこすり合わせた。

卑屈な笑みが浮かぶ。

「ふひ、ふひ、恐縮です、ふひひっ」

「なにがおかしいの？」

見えない一撃が、ワムピュルスの横つ面を殴打した。

勢いよく椅子から転げた落ちたワムピュルスの口から、折れた奥歯と血が飛ぶ。

「ごっ、ごげっ」

床に這いつくばる、吸血鬼の王。

いまの一撃の正体を確認できた者はいない。

クラティアは自分の椅子に座ったまま動いていないし、指一本すら動かしていない。

だというのに、遠く離れたワムピュルスを攻撃できた。
魔技である。

さらにクラティアは言った。

「ワムピュルス。だれが席を外してもいいと言ったの？ 座れ」

ワムピュルスの身体が、彼自身の意思とは無関係に立ち上がった。
まるで見えない腕が持ち上げたかのように。

さらにその腕はワムピュルスを無理やり席に座らせ、顔面を凄まじい勢いでテーブルに叩きつけた。

何度も何度も、沈んだ顔面を持ち上げてはまた叩きつける。

「ぶげえええっ」

眼鏡のレンズと鼻の骨と前歯が砕ける音がした。

テーブルに血が広がる。

だれも、なにも言わなかった。

常軌を逸した仕打ちに、だれも、ワムピュルスでさえ、抗議しようとしていない。

ただ、凍り付いたような沈黙が広がる。

「ケズム」

「はっ……」

「たしか、おまえには妻と三人の子供がいたわよね」

ケズム・シアオジンリンの顔から血の気が引いた。

「おまえに五ヶ月の猶予を与えるわ。それまでに異民軍を攻略できなければ粛清よ。ただし、それまで、一ヶ月ごとにおまえの子供を下から順番に処刑する」

「お、お待ちくだされ、大元帥閣下……！」

「我が栄光ある魔界帝国に待ったはなしよ。最初は一番下、次はその上、……四番目に妻を処刑するわ。よかったわねえ、ケズム。おまえの順番はいちばん最後にしてあげる。五ヶ月も与えてあげるのだから感謝することね？」

悪魔の裁可である。

これほどまでに残酷で無慈悲な命令があるだろうか。

ケズムはテーブルの下で血がにじむほど両拳を握りしめ、歯ぎしりをした。

「……否……！一ヶ月も要りませぬ……！」

「そう？やる気が出たようでよかったわ。覚えておくことね。つまらないプライドはその身を滅ぼす。おまえたちなどしょせんは歯車に過ぎない。いくらでも代えがきく部品でしかないのだから。」

……ゼーマン」

「は……」

「おまえの軍から兵を可能な限り北へ向かわせなさい。できるわね？」

「もちろんでさ」

「お願いするわ。では、次に、ピラズイモス。人間界での諜報活動の結果を報告しなさい」

会議が進む。

人間界、魔界、それぞれの戦争の進行状況、新たな作戦の概要、方針の変更など、さまざまな議題が上がる。

十件ほど議題を片付けたところで、クラティアが言った。

「さて。一段落ついたわね。では、そろそろ本題に入りましようか」

十二支族が固唾をのんで見守るなか、クラティアが目を向けたのは、第三席。

そこは、空席となっている。

「八年前、私たちは偉大な英雄を失ったわ」

大公爵、右元帥バルログ。

魔界最強の《獄炎魔神》、ありとあらゆるものを焼きつくすフレーム・ジャイアント。

大元帥クラティアの右腕として、グラディバールと並び立つ勇者として称される、誉れ高き無敵の戦士。

彼が人間の冒険者に敗北し、死亡してからというもの、八年もの長きにわたって、その席に座る者は現れなかった。

座ることが出来る者などいるはずもなかった、という表現が正しいかもしれない。

異例なことなのだ。

通常、十二支族の席というものは欠けない。このレベルの魔族ともなるとまさに無敵、何者かに敗北するなどまずありえないし、もしもそんなことがあったとしても、すぐさま代わりの魔界貴族が空席を埋める。

が、今回に限っては、そうではない。

だれもバルログの代わりをつとめることが出来ない。

第四席のルガルでさえ、繰り上がって第三席に座ることを辞退した。

それほどまでにバルログは偉大すぎた。

ゆえに、今日まで三番目の席は、現れるはずのない新たな主人を

待ち続けていたのだ。

「彼の代わりになれる者はいない。彼は齒車ではなかったのだから。でも、だからといって、我ら十二支族の席のひとつをいつまでも空いたままにしておくことは出来ないわ」

クラティアの言わんとしていることを全員が悟った。

ついに、十二支族の椅子すべてが埋まるのだ。

新たな貴家の当主を迎え入れることにより、魔界最高評議会は再び完全となる。

となると、第三席を受け継ぐのは最強の人狼族、ルガル・リカンスロポスだ。

上位の席が空いた場合は下位の者が繰り上がり、新参の当主が十二番目の席に座る。それが古くからの慣わしなのだから。

十二支族の序列は、席の数字がより少ないほど、一に近いほど高くなる。

これでルガルは、十二支族第三席、右元帥の地位を得ることになる。

「……閣下。いささか急なお話ですね……」

困惑するルガル。

「そうね……まあ、おまえが困る必要はないわ。いままで通りにやればいいのよ」

「はっ？」

「とにかく、紹介しておきましょうか。　　入りなさい」

クラティアが言うつと、扉が開いた。

現れたのはひとりの少年。

外見年齢は人間で言うつと十五歳ほどだろう。身長は一六五センチほど。

ほっそりとしていてしなやかな体つき、滑らかな褐色の肌と、しっとりとした艶のある黒髪が腰まで伸びているのが特徴的。

その出で立ちほとんど全裸に近く、上半身にはなにも身につけておらず、わずかに下半身に腰布を巻いているだけ……その腰布と

て透き通るような薄い布地で作られており、しかも下着などはいっさい着けていない。代わりのように、黄金や宝石類などのアクセサリーで全身を着飾り、目の覚めるような財宝のオーラを立ちのぼらせている。

褐色の少年は、危険なまでに美しかった。中性的で伶俐な顔立ち。紫色のアイシャドウによって飾られた目元、その視線は、男女を問わずに欲情させるような、抗いがたき妖しい淫気を孕んでいる。

頭部には、彼が見かけ通りの人間の少年ではないことを証明するように、立派な二本の角があった。

左右のこめかみの上あたりから生えた黄金の角は、やや捻れながら後ろに向かつて伸びている。

「やあ、みなさん。初めまして。ナハースの当主、ザハブ・フェツダ・ナハースです」

満面の笑みを浮かべる、ザハブ。
クラティアとグラディバルを除いた十二支族の面々に、戸惑いと不信の空気が広がる。

末席に加わる新参者とはいえ、十二支族の一席を得るほどの貴族なのだから、魔界において名家の中の名家であることは当然。

だが、ならばなぜ、ナハースという家の名をだれも聞いたことがないのか。

「ナハース……？」

「知らない。どこの公爵家だ……？」

ゼーマンやイムラークが小さく言った。

ザハブは手を振って否定する。

「あ、ボク、公爵じゃないです。伯爵です。ま、とつくの昔に没落しちゃって中央からは遠のいてますから、みなさんが知らないのも当然だと思います」

困惑の次に広がったのは、動揺の気配。

「伯爵……！？」

「ばかな。伯爵家ごときが十二支族に……」

最高評議会たる十二支族を構成するメンバーは全員が公爵級魔界貴族。

ザハブは公爵でもなければ侯爵でもなく、さらにその下に位置する伯爵だという。

もしもザハブが十二支族に加わるのだとしたら、これは、魔界開闢以来の大事件だ。

どよめく貴族たちを無視して、ザハブは歩き出す。

そして、十二番目の席に座るイムラークを無視して通り過ぎ、それどころか十一番目の席も九番目の席も七番目の席も通過して、三番目の席を手で掴んで引いた。

「おい!？」

鬼の王、イムラークが驚いたように声を上げた。

だがザハブはそれすらも無視して、空席となっていた第三席に着席したのだ。

しん、と静まりかえる、会議室。

クラティアが言った。

「大元帥クラティアが貴族院の長として、ナハース家の当主、ザハブ・フェッダ・ナハースに命じる。現時刻をもってナハース家の爵位を伯爵位から公爵位へと昇格。右元帥の地位を与えると共に、大公爵を名乗ることを許可するわ」

「ありがたく。謹んでお受けいたします」

ぺこりとクラティアに向かって頭を下げたザハブは、次の瞬間、あるうことか、そのすらりと長く伸びた両脚を持ち上げると、優雅な動作でテーブルの上に乗せた。

「いやあ、それにしても嬉しいなあ。なんといっても右元帥になれたわけだし、こんなに頼りになりそうな部下が九人も出来ただから」

妖しき少年は優越感に満ちた笑みを浮かべた。

その瞳が、第四席以下の面々を見下していることは、火を見るよりも明らかだ。

それが証拠に、ザハブは言った。

「ん？　ところでキミら、ちょっと頭が高いんじゃない？　とりあえず最初の命令だ。ボーッとしてないでさっさと頭を下げろよ、間抜けども」

その台詞を火種として、まるで爆発のように
会議場に、殺気が満ちて膨れあがった。

《魔界十二支族・その四》

魔界十二支族　その戦闘能力は、各人が人間界における一国の軍事力に匹敵、あるいは凌駕するという。

天地を揺るがす貴家の当主たち九名による殺気が、ザハブを打ちのめす。

その余波を浴びただけでも使用人の何人かは失神したが

褐色の妖しき少年、そのふてぶてしき笑みを悠として崩さず。

「いやだなあ……本気で怒らないでくださいよ、みなさん」

両手の五指を組み合わせて腹の上に置き、重心を後ろへと傾ける。
「冗談ですよ、冗談。ねえ……いきなり右元帥に大抜擢されて調子に乗っちゃった新参者のお茶目な冗談くらい、軽く流してくださいよ……あつはつはつ」

口調だけは直すも、眼は変わらない。

自分以下の九人を見下す眼だけは。

「……説明を願いたい、大元帥閣下」

重々しく口を開いたのは、《リッチ・キング》マレフィキウム・スケレトウス。

一同の顔に、多かれ少なかれ驚きの色が浮かぶ。

千年に一度しか口を開かぬという男である。

「その小僧が十二支族に加わるという決定そのものには異論はない……が、なぜ、第三席なのか。その席は言うまでもなく、かの大バ
ルログ公のためのものであったはず……それを受け継ぐ以上、その
者にもそれ相応の実力、品性、家柄、実績が問われることは必定」
「もったもなことだわ」

「で、あるにも関わらず、そのナハースなにがしとやらには、
そのどれひとつとして感じることは出来ぬ。かような者が第三席に

座るとあらば、バルログ公を侮辱するも同然ではないか。説明を願いたい、大元帥閣下。……もしも閣下の答えに我が得心できぬのであれば、」

この場にて一戦を交えるも、やむを得ず。

おそるべき悪霊と冷気の支配者マレフィキウムは、クラティアを相手にしてそう言いきった。

髑髏が身に纏うローブがふわりと浮き上がる。

クラティアの周囲の空間が歪み、軋んだ。

尋常ならざる魔力の波動。

地鳴りのような音が響く。

クラティアとマレフィキウム、お互いの放つ傲然たる魔力がぶつかり合っているのだ。

まさに、一触即発。

クラティアは言った。

「説明をする必要はないわね」

「……なんと？」

「ただひとつだけ言えるのは、今回の人事には高度な政治的判断があつたということよ。その結果として、この、」

いまだにテーブルの上に乗せてあるザハブの脚を指差し、

「汚い脚が、偉そうに置いてあるというわけよ。いい加減に下ろしなさいな。はしたなくってよ」

じろりと睨みつけられて、慌てて脚を下ろしたザハブが、「えへへ」と小さく舌を出した。

マレフィキウムはもちろんまだ納得がいていない様子だったが、

「その理由、いつかは？」

「そうね。少なくともあなたには教える必要があるわね。……あなたのバルログへの真心、感謝するわ」

「礼など無用。……委細承知」

それきり、沈黙を決め込んだ。

クラティアはマレフィキウムから視線を外すと、一同を見渡した。

「さて。もちろん今回の決定に関しては納得がいけない者も多いでしょう。けれど覚えておいて欲しいわね。これは私の判断であるということを」

「冗談じゃねえ」

火炎のような熱さを感じさせる言葉が、クラティアの台詞を途中で遮った。

第十二席、《鬼神》イムラーク・ギガンダスだ。

灼熱色の肌を持つ鬼族の王は、黄金の瞳でザハブを睨みつける。

「大元帥閣下。俺は絶対に納得がいきませんぜ。なんでこんなモヤシ野郎がいきなり入ってきて第三席なんですかい!?」

「……理由を教えることは出来ないと言っているでしょう」

「だからそれが納得できねええええっ!!!」

イムラークが大きくテーブルを叩いた。

クラティアの魔力によって守られているテーブルが壊れることはなかったが、この城そのものが揺らぐような衝撃が走る。

鼻息も荒く、イムラークは言った。

「俺が！ この俺が末席なんだぞ！ 鬼族最強の、この俺が！ そんなモヤシ野郎よりもずっと強い、この俺さまがあああっ！」

大きく振った鬼の腕が、轟、と唸りを上げた。

イムラークの双眸が強く輝き、乱杭歯の隙間から蒸気のような熱い吐息がしゅうしゅうと漏れ、黒髪が怒りのあまり持ち上がった。

莫大な魔力が怒りを孕んで赤色に染まり、イムラークの周囲に浮かび上がる。

「で？」

クラティアは、落ち着き払った様子で、くだらない三文芝居でも見たかのように熱のない声色で言った。

「勝負だ！ 俺と勝負しろ、モヤシ野郎！ 俺以外の奴が第三席に座るのが仕方ないとしても、それは、そいつが俺よりも強ければの話だ！ 俺よりも弱い奴が十二支族に加わる資格なんぞ……ましてや第三席に座る資格なんぞあるはずがねえッッッ！」

怒号。

空気を震わせる怒鳴り声に、ザハブの小柄な身体など吹き飛んでしまいそうだ。

そして、静かに目を閉じるルガルがいた。

（正論です、ギガンダス公。そしてありがとうございます……私が言い出す手間が省けた）

人狼族の長は、あくまでも静謐に事態を見ていた。

（大元帥閣下の深いお考えに異を唱えるつもりは私にはありません。加えて権力欲もない。が、それとこれとは別の話。偉大なるバルログ公の後継者たる者ならば、それ相応の実力を披露してもらわなければなりません）

碧眼がザハブを見据える。

（ギガンダス公が挑むのはまず間違いなく純粋な実力勝負。……しかし私が見たところ、あなたの実力はどんなに高くてもレベル七〇。それではレベル八七〇を越えるギガンダス公の相手にはならない。一瞬でひねり潰されることでしょう。かといってこの勝負から逃げれば笑い物になる。右元帥を名乗るなど夢のまた夢。……レベルの差が一〇〇以上も離れた下位の者が上位の者に勝利する可能性は、限りなくゼロに近い。さて、あなたはこの単純きわまる難問をどう攻略するつもりなのですか、新たな右元帥殿？）

そこで、ルガルの瞳が驚きによって見開かれた。

それは、ザハブの表情を見たからだ。

ザハブは浮かべていた……焦燥、後悔、憤怒、虚勢、そういった、ルガルが想像していたどんな顔とも違う、おぞましきまでの余裕の笑みを。

「あー、あー。つまり、ボクと決闘したいってことですよね？ いいですよ」

勝てないはずの勝負をあっさりと承諾した、ザハブ。

憤怒の色に染まっていたイムラークの口の端に笑みが浮かんだ。

（馬鹿が！ まんまと乗ってきやがった）

二人の勝負は、この会議室で行われることになった。
大きなテーブルを置いてもまだありあまるほどのスペースがこの部屋にはあるのだ。

鬼族の王と、褐色の少年が対峙する。

単純な体格差だけとってみても、両者の優劣は歴然としていた。
身長四メートルを越え、圧倒的に筋骨隆々としているイムラーク。
美しいが、腕力などまるで持ち合わせていなさそうなザハブ。

膂力の差は明らか、では魔力はというと……これもまた、イムラークの圧勝。

始まる前から勝負がついている決闘。

立ち会うクラティアが言った。

「二人とも当然のこと承知しているでしょうけれど、いちおう、ルールをおさらいをしておきましょうか。なにせ久しぶりのことですものね」

魔界十二支族の序列は原則として不動の数字である。任命時にクラティアから与えられた席のまま上下に変動することはない。

が、例外というものが存在する。

ひとつ、上の序列の貴族が死亡、あるいは退位した場合、その者よりも下位にある者全員の序列が繰り上がる。

ひとつ、魔界大元帥クラティアの貴族院権限行使による強制人事。
ひとつ、魔王エンディミオンの絶対的下知。

ひとつ、下位にある貴族が上位にある貴族に対して挑戦し、これを成し遂げ、席を奪い取った場合。

魔界貴族を管理するのは魔界最高の権威を誇る機関たる貴族院。

十二支族といえども、魔界貴族の範疇。

貴族院には、十二支族のためだけに、貴族院創設者たる魔界大元帥の立ち会いのもとで序列を奪い合う、冷酷苛烈な決闘制度が用意されている。

「制限時間は十秒。イムラークはその時間内にザハブを倒すことを厳命。ザハブは全力にてイムラークを殺し、おのれの序列を守りな

さい。……言うまでもなく、この戦いに引き分けはありえなくてよ。勝者は敗者に情けなど無用、敗者は生き恥など晒すものではないわ。そして――

クラティアの全身から、絶対零度の鬼気が立ちのぼる。

「万が一、十秒が経過した時点で双方が生存していた場合、私が魔界大元帥の名において肅清を行うわ」

すなわち、この勝負、なにがどうなるうとも死の華が咲く。

それが一輪なのか二輪なのかは勝負の結果によるが、どちらにしてもザハブが咲かせるのは間違いないだろうということは、全員が認めるところだ。

ぐふふ……と、イムラークは笑う。

（チョロいっ。チョロい勝負だぜ……赤子の腕をひねるよりも簡単だ！ いいの！？ いいの！？ マジでいいのっ！？ これで俺は第三席！ このモヤシをぶち殺しただけで第三席！ マジかよっ、すげえっ！ 俺が……この俺が……ずっと末席に甘んじてきた俺がッ、一気に第三席イイ、ひゃっはあああああ、みなぎるうんっ！）

甘美な妄想に酔いしれるイムラークは気付かない。

ザハブがこうも簡単に勝負を受け入れた理由など、想像すらしていない。

だから、簡単に足元をすくわれる。

たやすい、と笑っているのは、あちらも同じなのだと、気づけない。

「はい、クラティアさま」

ザハブが、手を挙げた。

「このままじゃあ勝ち目がなさそうですから、代理を立ててもいいですか？ たしか、そういうのも有りでしたよね？」

クラティアは眼を細める。

「よくってよ。たしかに、この決闘では、代理の者を用意して戦わせることが認められているわ。ただし、その代理が敗北した場合も、

「あなたが肅清されることになるわよ」

「あ、大丈夫です。それでいいです」

うなずく、ザハブ。

イムラークが、大音声の笑いを轟かせた。

「ガーッハッハッハ！ こいつはとんだ間抜け野郎だ！」

太い指が、ザハブを差す。

「いいか？ 意味がないんだよ、どんな代理を用意しようが！」

「俺たち魔界十二支族は、魔王陛下を除けば魔界最強の集団だ。俺たち以上に強い奴はこの魔界に存在しない！俺たちに勝てる奴はこの魔界にはいない！そして、この場でおまえに味方する奴なんぞ、だれひとりとしていない……」

ちらり、とクラティアとグラディバールのほうを見やる、イムラ

クラティアはくりとつなずき、グラディバルはなにも言わなかった。

ザハブの代理として戦うつもりはないという意思表示だ。

それは、ほかの十二支族の面々として同じこと。

「ぐふふつ、つまり！　どんな代理を用意しようが、俺には勝てないのさ！　てめえの負けは確定だつ、グヒヤハハハハハハハハハハ！！　おらつ、さつさと連れてこいよ、役に立たない代理人をよおおおおつ、ぐひやはははははっ！！！」

どこまでも届くような、イムラークの高笑い。

その声に混じって、

「げっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃっ」

怪鳥のごとき笑い声が、聞こえた。

どこまでも有頂天を極めていたイムラークの顔色が、一瞬にして真っ青になった。

何人かの使用人が、気を失ってその場に倒れた。

誇り高き人狼族の長、ルガル・リカンスロposが我が目を疑って硬直した。

無敵の肉体を持つスライムの女王、ネロミロス・ムーラン・ア・オーが「ひっ」と短く悲鳴を上げた。

《邪眼王》マレフィキウム・スケレトウスの全身の骨が軋む。偉大なる海の男、ゼーマン・ルイバーク・アシミノークの「お」という唸り声。

ダークエルフの王、ケズム・シアオジンリンが無意識に身体を後ろへと退いていた。

《真祖》ワムピュルス・グリコラスの卑屈な笑みが消え、その顔から表情がなくなった。

サキュバスの女王、ピラズイモス・テンタツイオーネが齒をカチカチと鳴らし、寒さに震えるようにして自分の身体を抱きしめる。

《墮天使長》ティアンス・エンゲル・アンゲロスは、無表情のまま、自分の槍を咄嗟に握りしめた手を震わせた。

グラディバルが眉間に皺を寄せて表情を険しくし、クラティアは、忌々しげに鼻を鳴らした。

（御大将……！？ まさか代理とは……信じられん、このお方を動かすとは……）

こめかみから冷や汗を垂らすルガルが、余裕を見せつけるザハブを凝視する。

（それほどまでの男だというのは……！？ ザハブ・フェツダ・ナハース……！）

その視線の先で、ザハブは気安く手を挙げて言った。

「やあ。来てくれたんだね、ありがとう。うれしいよ、ベーやん」

「ひっひっひっ。しょうがねえよなあ、友達の頼みだからな」

いつの間にか扉の前に立っていたその男。

年齢は三十代半ばといったところの人間族。

短く刈った白髪、精悍で野性味のある顔つき、二メートルを越える身長、極限まで鍛え上げられた全身の筋肉、白く分厚いコート、黒いシャツと白いズボン、そしてその口元はこの世のすべてをあざ笑うかのような笑みを浮かべていて、葉巻をくわえている。

「よう、久しぶりだな、おまえら。俺だよ、役に立たない代理人だ……げっひゃっひゃっひゃっ！」

傭兵国家ヨルムガルドの大首領、《傭兵王》ベーゼ。

その降臨の意味をもっともよく知るのは、絶望の表情を浮かべる
イムラークであろう。

《魔界十二支族・その五》

傭兵国家ヨルムガルドは、リノティア学園のあるギアラ大陸から海を渡ったはるか北方、人間世界の極北に位置する新興国だ。

建国からわずか百二十年という、歴史的には未熟な国でありながら、その科学技術力、保有する戦力は、数多の大国とも同等以上に渡り合う。

ヨルムガルドは非常に特異な点を持つ国であり、その理由は三つある。

まずひとつ、傭兵国家の通り名が示すとおり、かの国の大半の民が傭兵であるという点。傭兵とは金で買われて動く兵隊。ヨルムガルドの傭兵の戦闘能力はおそろしいほど高く、極めて優秀、一騎当千の猛者揃いということと知られ、多くの国が重用している。ヨルムガルドは世界各地の戦場に彼らを派遣し、彼らの利益と権利を保護する。一切れのパンのために人を殺す荒くれ者どもにとって願ってもいない雇用主なのだ。

ふたつ。ヨルムガルドが位置する場所。

地図で見ると本当の極北である突き出た半島は黒く塗り潰されている。そこが魔王領、大魔王エンディミオンの支配する禁断の地。そこでは朝日は昇らず、闇夜がすべてを支配する。全土を濃密な瘴気が包み込み、草木は枯れ果て、大地は荒み、おそろべき凶悪な魔物どもが歩き回り、一度でも足を踏み入れれば生きて帰ってきた人間はいないとされる、地上の地獄。

ヨルムガルドはその魔王領を半円状に取り囲むように広がる、人類の絶対防衛ラインでもあるのだ。

百二十年前、このラインが現在よりもずっと人間世界に大きく食い込んでいたころ、人間と魔物の戦いの最前線に、無名時代の建国

王バーゼがふらりと現れた。そして二十五万匹の悪鬼どもをたったひとりで笑いながら殴り殺し、やがて降臨した大魔王と一週間にも渡る死闘を繰り広げたすえ、ついには魔王を追い返し、魔王領を大きく押し返したのだ。

大魔王エンディミオンは無限の魔力を操る怪物。呼吸をするように地震を引き起こし、台風を呼び、隕石を落とす、無敵の存在。魔物というよりは強大な悪神。それと正面から素手で対等に渡り合ったのは、人類の歴史上、ヨルムガルド建国王バーゼをおいてほかにはいない。両者の戦いは地形を変え、空を真っ赤に染め、海を割ったという。

そして特異な点の三つ目、それは、ヨルムガルドが人間の国でありながら、けっして人類の味方ではないということだ。

ヨルムガルド国家元首、《傭兵王》バーゼ。

邪悪をその名とする、この世の悪の頂点である。

百二十年以上を生きる不老の肉体、いかなる死をも超越した不死の肉体を持ち、その戦闘能力は人間でありながら超高位の魔界貴族をも凌駕する。

バーゼが好むのは、流血と、殺戮と、破壊と、混沌。

無敵にして不死身、邪知暴虐を極める最強の王は、気の向くままに壊し続ける……人間を、文明を、国を、平和を、秩序を。

そして今日もまた、いくつかの生命が彼の手によって破壊されてしまうのだろう。

クラティアは小さく舌打ちした。

（ザハブめ……自信ありげだったのはやはりこういうことか……厄介な男を動かしてくれたわね……）

バーゼの戦闘能力はクラティアにとっても驚異的だ。

だが、バーゼという男の最大の問題点は、戦闘力という単純な点にはない。

なによりも厄介なのは、その性質。

この男こそはカオスそのもの。

いかなる道徳、いかなる法律をも無視して無軌道に暴れ回る、圧倒的な狂気と悪意。

予測のつかない暴力。

殺戮と破壊を撒き散らす混沌。

そついった邪悪な気質こそが本当の意味で厄介なのだ。

（……たしかに、この男ならば何者にも負けないでしょう。少なくとも殺せるかどうかで言えば私や魔王陛下でも無理ね。その点ではまさに鬼札だと言えるわ。けれど理解しているのかしら、ザハブ？ おまえが切ったカードには猛毒が染みこんでいるということ。たしかにそのカードで相手を殺すことはたやすい……でも、自分の指にも毒が触れることになるのよ）

そしてその猛毒はザハブ自身をも殺すだろう。

ベーゼは、そついう男だ。

真の意味で平等。

敵も味方もなく、ただ気まぐれに殺すのみ。

「まさかあなたが出てくるとはね。いつザハブと知り合ったの？」

「ひっひっひっ。昨日だよ。助けてくれって頼まれてな……わざわざ俺の城にまで足を運んでそんなことを言うんだ、聞き届けてやりたくないじゃねえか。すぐに分かったぜ。こいつは俺の友達になる男だってな」

ベーゼのウィンクに、にこりと笑って返すザハブ。

「ふん。またぞろ、よからぬことでも企んでいるのでしょうか」

「おいおい。そついうのはおまえの十八番だろう？ 勘違いするな、思い違いもはなはだしい。おまえたちは俺のことを凶悪で、無慈悲で、邪悪だと誤解している」

「まさか！ 誤解なんてしていないわ、微塵もね」

誤解などしていない。

確信しているだけだ。

「なーんか、引っかかるが、まあいい。とにかく真実の俺は義理人情に厚く、心温かく、人殺しなんて絶対に出来ない男なんだ……本

来はな…… テディベアのように優しい男だ」

だれも、なにも言わなかった。

クラティアは呆れたように嘆息し、ザハブはにこにこ笑ったまま
ノーコメントを決め込んでいる。

「で？ その心優しいあなたは、自分の王国を放り出して、わざわざ魔界にまでやってきたというわけね？ ザハブの手助けをするために？」

「げっひゃっひゃっ。……俺の王国、ヨルムガルドか。あれは、もういいんだ」

「は？」

「飽きたんだ」

ベーゼの表情に、他意はなかった。

悪意も、狂気もない。

飽きた、と。

ただ本当に、心の底から、そう言っている。

「だから、さっき、片付けてきた」

少しばかり時間を進めることになるが、二時間後、クラティアのもとへ血相を変えた兵士が飛び込んできた。

報告によれば、辺境魔王領の周囲を取り囲むヨルムガルド傭兵国家の消滅を確認。

それは文字通りの消滅であったという。

王城、要塞、家屋、いつさいの建造物が跡形もなく消滅。

ヨルムガルドで生活を送る、およそ一千万人の傭兵の消滅。

あとにはただ、百二十年前の風景が広がるばかり。

まるで、ヨルムガルドの存在など、夢か幻かであったかのように。そして現在。

「ヨルムガルドは、いいオモチャだったよ。最近にはなくスペシャルだった。だが、さっきも言ったが、俺は本来、人殺しや争いなどに向いていない男だ。もうあんな血みどろの日々にはうんざり、飽き飽きしたんだ……だから、もう、いいんだ」

クラティアの背筋でさえ凍るようだった。

この男とは、たとえ幾星霜、付き合ったとしても、絶対に理解し合えない。

いったいどこまで、他人の人生を踏みにじることに躊躇がないのだ。

「これからは平穩で争いのない生活を送ることにするよ。そうだな、海、海がいい……大海原が見える場所にでも小さな家を建てて、そこで釣りをしたり泳いでみたりしながら過ごすことにしよう。美人の嫁さんでも見つけてな……ひっひっひ」

そして数十年、数百年が経てば、そういった生活にも飽きるのだろつ。

飽きたらまた殺戮への渴望に目覚め、新たなるヨルムガルドを建国するのだろつ。

無限の邪悪だ。

ベーゼの視線が、イムラークのほうを向いた。

先ほどまでの高笑いはどこへやら、イムラークは、滑稽なほど震え上がり、青ざめた顔に絶望の暗黒を広げている。

「イムラーク。おまえが俺と決闘するんだって？」

「お……慈悲を……御大将……」

身体をカタカタと震わし、いまにも泣きそうな声で言う、イムラーク。

一度でも両者の合意を得たが最後、決闘が中止されることはない。つまりイムラークはなにがどうなるうとも、目の前の悪鬼と戦わなくてはならないのだ。

ベーゼは、暖かく爽やかな笑みを浮かべた。

「どうした？ 顔色が悪いぞ？ 安心しろよ……なにもしない、なにもしないさ」

「お願いです。お、俺は、あなたに逆らうつもりなんてありません……慈悲を……おねがいです……」

「なにもしないって言うてるだろつ？ イムラーク、俺とおまえは

友達じゃないか。俺はおまえのことをガキのころからよく知ってる。おまえに名前をつけてやったのは俺だし、よく遊んでやったし、いっしょに戦ったことも一度や二度じゃないだろう。おまえの嫁さんだって、俺が見つけてきてやったんじゃないか！ その俺が、おまえに酷いことをすると思うか！？ それどころか、喜べ、イムラーク。……わざと負けてやる！ おまえは俺のことをおもいきりぶん殴れ。そして俺は死んでやる。おまえは第三席だ！ どうだ、嬉しいだろう？ うん？」

イムラークは、床に這いつくばって震えていた。

「お慈悲を……お慈悲を……」

ただその言葉だけを繰り返し、許しをこう。

「ひっひっひっ。なんにもしないと云ってるだろう」
だれもが知っている。

ベーゼには慈悲など微塵もなく、友情や温かさなどありえない。

「ところで、イムラーク。何秒で殺してほしい？ おまえは友達だ。俺は、友達の願いをかなえてやりたい。友達のことが好きだからなあ」

「う、うああああああっ、ちくしょおおおっ」

いきなり立ち上がったイムラークが、その豪腕を振りかざした。空間ごと粉碎するようなパンチが、ベーゼの顔面を打ち抜く。

イムラークのパンチは人体など紙くずのように破壊する威力を持っている。

鮮血が飛び散り、ベーゼの頭部の上半分が消失した。

だれがどう見ても即死だ。

脳味噌は全生命体にとって重大な器官であり急所でもある。

頭部を破壊されても復活できる者など、魔界貴族の中にもごくわずかしいない。

ましてや、ただの人間族が死を免れるわけではない

この男以外は。

下半分だけになった顔のベーゼが口の端をつり上げて笑い、「チ

「ツチツチツ」と指を振った。

そして、まるでダメージを負っているように感じられない声色で、淀みなく言う。

「クラティア。決闘開始だ。合図を頼む」

「……はじめ」

クラティアが言ったのと同時に、イムラークの断末魔の絶叫が響いた。

魔王城を揺るがす悲鳴は、九秒間きつちりと続き、そして、十秒を間近にした時点で、ぴつたりと止んだ。

永遠に。

《魔界十二支族・その六》

（うーわ、こいつはちょっとグロいなー）

ザハブは苦い笑みを浮かべた。

鬼族の王の無惨な死体を見下ろしての感想だ。

殺戮に対しての忌避は薄いほうだと自覚している。目的のためなら手段は選ばない。そのザハブが顔をしかめるほどなのだから、イムラークの血液と臓物の飛び散りようは常軌を逸していたのだ。

（悪いね、ギガンダス公。そのうち墓前に花でもそなえてあげるから許してよ。あんたに恨みはなかった……ぶっちゃけ、だれでもよかったのさ。ボクの右元帥就任祝いのための生け贄は。決闘という便利なシステムがあつたから、挑発しまくって釣れた奴をまとめて御大将の餌食にしてやるつもりだった。ま、釣れたのが末席のギガンダス公だけだったのはちょっと残念だったね。けど贅沢は言わないさ……ボクは憤み深いからね）

ザハブ・フェツダ・ナハースは考えた。

自分は地位ある者だろうか？

自分は実績ある者だろうか？

自分は実力ある者だろうか？

自分は歴史ある者だろうか？

否。

断じて否である。

ザハブ・フェツダ・ナハースは確固たる地位もなく、輝かしい実績など皆無で、たいした実力もなく、盤石の歴史など手にしていない。

ならば、そのような無名の新参者が十二支族に加入することを、

ましてや第三席、右元帥の地位に座ることを、第四席以下の魔界貴族たちがすんなりと了解してくれるだろうか？

否。

これもまた、断じて否。

ならば、と、ザハブ・フェツダ・ナハースは考えた。

殺せ。

殺してしまえばいい。

必ずいるはずだ……十二支族が本当に誇り高き魔界貴族ならば、この若輩者の右元帥就任に対して声を大きく異を唱える者がいるはずだ。

そいつを、殺せ。

ひとりでもふたりでも、できるだけ数多く。

できるだけむごたらしく始末しろ。

血祭りに上げてしまえ。

そしてその惨死をもって、ザハブ・フェツダ・ナハースの旗印としよう。

みんなが文句を言うならば。

だれも文句を言えないようにしてしまえ。

そしてザハブ・フェツダ・ナハースは考えた。

どうやって殺そう？

どうやってむごたらしく殺そう？

残念ながらこの手で実行するのは不可能だろう。

この手はあまりにも貧弱だ……繊細な指先は男や女をベッドの上で喜ばせることにはだれよりも長けている、が、握り拳で戦うには不向きだし、魔力だってけっして高いほうではない。

魔界十二支族は文字通り魔界最強の貴族たちだ。

ザハブではかなわない。

ザハブでは勝てない。

ならば話は簡単だ。

十二支族でさえ簡単にむごたしく殺せてしまうほどの猛者を、

ここに連れてくればいい。

ザハブの行動は素早く、簡単だった。

ヨルムガルドに足を運んだ。

《傭兵王》 ベーゼに面会した。

媚びを売って身体を売った。

這いつくばって《傭兵王》の靴を舐めて頼み込んだ。

プライド？

魔界貴族としての誇り？

そんなものはザハブにはない。

あるのはただひとつだけ。

貪欲で、狂的で、際限のない、無限の、名誉欲。

ありあまるほどの富が欲しい。

絶対的な権力が欲しい。

このうえないほどの名誉が欲しい。

欲しい。

欲しい。

欲しい。欲しい。すべてが欲しい。

（身体を売る……靴を舐める……屁でもないね。屈辱？ なにそれ

？ あははは。本当の屈辱ってのはさあ、そんなことじゃないよ。

人間の糞を食うことだって、指を差して笑われたり惨めに敗北する

ことだって屈辱じゃあない。……本当の屈辱はさあ）

ザハブの、イムラークを見下す瞳は、どこまでも暗く冷たい。

そして、その唇からは愛想笑いでさえ消え去っていた。

（名前を残さずに死ぬことだ。……この世に生まれた証拠、生きた

あかしすら残せず、志し半ばにして朽ち果てることだ。死は屈辱な

んだよ、ギガンダス公。あんたは惨めだ。死んだのだから。あんた

のことはみんなが忘れてゆくだろう。この先、幾星霜、あんたの名

を覚え続ける者などいないだろう。ボクは違うぞ……！）

拳を握り、ザハブは唇を噛んだ。

ザハブにとって今回の一件で怖かったのはただひとつ、ベーゼが

いつもの気まぐれを起こして決闘を時間切れまで長引かせてしまうことだった。

その場合、決闘のルールに従えば、イムラークだけでなく、ザハブまでクラティアに肅清される羽目になる。

いちかばちかの賭けだった。おそらく、生まれて初めての。しかも、ずいぶん分が悪い賭けでもあった。

（けれど勝ったぞ。ボクは勝った）

勝負は好きだが、命をかけることだけは絶対に拒否する。そんなザハブが決死の覚悟で挑んだ勝負は、実を結んだ。

……これでザハブの後ろにはベーゼがいるということアピールできただろう。実際は二度とベーゼに頼るつもりなどないが、その影をチラつかせるだけでも効果は絶大だ。

握った拳が震える。

歓喜だ。

飢えた野心が、やつのことで餌にありつき、歓喜の唸り声を上げていた。

（そして、こんなところで終わるつもりはないぞ……ボクは……大元帥になる男だ……！）

ザハブの右元帥就任が一応は十二支族全員の認めるところとなり、会議が終わると共に彼らと使用人たちが退室したあと、部屋に残ったのはクラティアとグラディバルだけになった。

第一席に座り、静かに紅茶を飲むクラティア。

そのクラティアに背を向けるかたちで、窓の外へ向いているグラディバル。

両者はしばらく無言のまま過ごしていたが、やがてクラティアが言った。

「これから、忙しくなるわね」
「そうだな」

クラティアとグラディバールの関係は、とても深く重々しい。魔王軍における立場としては、大元帥たるクラティアと、それを補佐する左元帥グラディバールということになっているが、そもそも二人には主従という背景がある。

一万年以上も昔、大魔法使いクラティアが作り出した二体の使い魔。

それが、グラディバール、そしてバルログだった。

ゆえにグラディバールは魔王への忠誠はもちろんのこと、クラティアへの絶対的な服従をも誓っている。

そしてクラティアのほうも、そんなグラディバールには全幅の信頼を寄せているのだ。

クラティアが公私について心置きなく語ることが出来るのは、このグラディバールのみだろう。

「やはりザハブは危険な男だね。能力は有用だけれども」

「面白い男ではないか。なりふりかまわぬ野心家というのは見ていて心地いいぞ」

「またあなたはそうやって遊び心を……悪い癖よ」
ため息をつく、クラティア。

「あの若造は飢えた獣よ。餌をやれば尻尾を振るように見せかけて、こちらの手首ごと食いちぎろうとしているわ。用済みになり次第、早めに処分しておかないとね」

冷酷な、微塵の暖かみも感じさせない声で、クラティアは言う。

「危険な刃物だけれど　　ワムピュルスを片付けるためには、うってつけの武器となるわ」

クラティアとワムピュルス・ヴリコラカスは、長いあいだ、水面下で静かな争いを繰り広げている。

波風も立たない、本当に静かな、些細な戦いだ。

だが両者は着実にお互いの陣地を奪い合い、相手を蹴落とすため

の罫を仕掛け続けている。

けっしてワムピュルスがクラティアに対して明確な憎悪をぶつけてきたり、正面から睨みつけてきたりするわけではない。

それどころか、クラティアに害を及ぼす意味のある事件の背後からワムピュルスの影があつたことなどない。

だがクラティアには分かるのだ。自身の周囲に張り巡らされた罫から、ワムピュルスの臭いが漂うことを。

おそらくは、かつて、ただ一度だけ、ただ一瞬だけワムピュルスが垣間見せた、獰猛な殺意の記憶が、クラティアの警戒心を煽り立てているのだろう。

それでもクラティアがワムピュルスを排除できないでいるのは、ひとえに、彼が政治の面においてとてつもなく優秀であるためだ。

彼の発明した魔法の道具、卓越した政治的手腕、吸血鬼同盟によるネットワークなどが、どれだけ魔界の発展を助けたのか、計り知れない。

それゆえ、クラティアといえども、ワムピュルスを一方的に粛清することは出来ない。たとえその牙が自分の首筋に迫っていると知っていても、だ。そんなことをすればクラティア自身の評価の低迷、失脚に繋がりがかねないのだから。

「私ができる嫌がらせといえ、せいぜいあの男の顔面を陥没させてやることだけだものね」

「それでも十分に酷いと思うがね……あまり直接的な暴力を使うのは慎みたまえ」

そんなクラティアの前に現れたのが、ザハブだ。

ザハブには野心と行動力、固有の特殊な能力があつた。

クラティアは決めた。

ワムピュルスを排除するために、ザハブに手を汚してもらう、と。「吸血鬼には、もっと無能で臆病な頭を与えましょう。魔界帝国の秩序と規律のためには、ずば抜けた知能など必要ないのよ。……腹の探り合いなど疲れるだけだわ……」

クラティアはまた紅茶を口に含んだ。

グラディバルはすべてを理解しているように、それ以上は語らない。

「……ヨルムガルドが消滅したとなつては、人間界への攻勢も本格的に再開しなくてはならないわね。異民軍への対応を遅らせてでも

……」

「大丈夫なのかね？ 我としては人間界よりも異民軍の排除を優先すべきだと思うのだが」

「忘れないで。私たちの怨敵はあくまでもあの世界の人間どもよ。なによりも優先すべきは、人間どもに苦痛と絶望を味わわせながら殺すこと……永遠に殺し続けること。それだけが。それだけが、魔王陛下や私の心を満たしてくれる」

クラティアのどす黒く濃厚な憎悪が、ティーカップに亀裂を走らせた。紅茶が漏れ出たが、それすらも一瞬で蒸発していく。

（危ういな……私怨というものは厄介だ……我にも気持ちは痛いほど分かるがね）

グラディバルは言った。

「だが、人間界には、彼がいる」

「……ふん。あの人間のこと……？」

「再び人間界で戦火を広げるとなれば、彼にも危害が及ぶかもしれないぞ」

クラティアは、せせら笑うように言う。

このうえなく邪悪で冷酷な表情。

「冗談はよしてちょうだい。あんな男のことなど、なんとも思っていないわ。《ノー・カウト》は魔界にとっての怨敵よ。いずれむごたらしく殺すために、弱点と情報を集めているだけ。それだけよ」

「そうか。それはよかった。だが、クラティアよ。そういうことなら話は簡単だ。わざわざあなたの手を煩わせるまでもない、いますぐにでも我があの男を滅してくるが、どうかね？」

「え」？

大元帥クラティアが、その表情を硬くした。

余裕たっぷり浮かべていた笑みが、ひきつった。

紅茶を飲もうとしてティーカップを持ち上げる手がわずかに震えているのをグラディバルは見逃さない。そもそも中身はこぼれ出たしまっている。

「ま、待ちなさい、グラディバル。そう性急になることはないわ。時間はたっぷりあるのだから、じっくりと情報を集めてからでもかまわないのよ」

「しかし、言うまでもなく《ノー・カウント》は危険な人間だ。そんな男のところにあなたを長く置いておきたくはないな。やはり我が人間界に出向いて始末してきたほうがいいのではないか？　すぐに終わるぞ」

「待ちなさいと言っているでしょう！？　……いいこと、グラディ

バル？　よくお聞きなさい？　彼はとてつもなく危険な男なのよ…… 普段は優しそうに見えるくせに、戦場、とくに夜戦では獣のように獰猛なの。私も今までに数え切れないくらいヒギイボコオさせられたわ……」

「ひぎいぼこお？」

「あ、あの人間が得意としている攻撃のことよ！　恐ろしい技よ…… あやうく負けそうになったことが何度もあったわ。ま、まあ、最後に勝利するのはいつでも私ですけどね！　ヒィヒィ言わせてやってるわ！」

「ふむ。……とにかく迂闊な手出しは禁物ということか？」

「そう！　その通り！　私の許しもなく勝手に動いては駄目よ、いい！？」

「了解した。よく分かったぞ」

（我の思っていた以上の重傷だということがな……）

胸をなで下ろしているクラティアのほうに目を向けながら、グラディバルは思った。

気付かれないように、やれやれと肩をすくめてみる。

（あの青年のことだから信用はできるが……直接、話し合っておかねばなるまい。機会を見つけて人間界に出向かねばな）

その夜。

「しかし、なんだなー、あれだよなー」

「なによ」

「おまえ、貴族で大元帥のくせに料理とか上手だよな」

「そ、そうかしら？」

「ああ。絶品だな。どこでこういう料理の作り方とか覚えてくるの？」

「こ、こんなもの、自分で少しお料理の本を読んだだけよ。ありとあらゆる魔法を扱うこの私にとって、いかなる料理であろうとも兎戯のようなもののよ」

「へえ。すごいな」

「ふ、ふふふ。と、当然よ」

（言えない……グラディバールに教わっただなんて言えない……）

「まあ、なんだな、家庭的でいいよな」

「えっ」

「家庭的な女のほうがいいんじゃないか。俺はそう思うが」

「えっ」

「……なんだよ」

「な、なんでもない……ふ、ふふふ、ふふ、そうかしら……ふふ……」

……

「さて、メシ食ったし、するか」

「えっ！」

「なんだよ」

「……い、いやよ……どうせまた、ヒギイボコオするんでしょう……?」

「しない、しない。ヒギイボコオしない」

「う。うそよ……」

「ほんとだつて。今日はおまえの好きな感じにしよう」

「わ、私の好きな……って、きゃっ!？」

「ラブラブな感じ」

「ら、らぶらぶって……駄目よおつ、私たち、敵同士なんだから……」

「……こういうのはあ、んんっ」

「じゃあ、今夜だけ、敵同士つての忘れよう」

「……ん……うん……今夜だけよ……今夜だけえ……」

「これで何度目の今夜だけ、だった？」

「し、知らないわよ、ばかあっ……!　もう、そんなところ触るな

あ……っ!」

《ポイント制度》（前書き）

話の時系列としては前回からちょっと戻って、《鍵》の続きから。十二支族会議が始まる数時間前からといったところです。

《ポイント制度》

クラティアに見送られて出発してからしばらくすると、俺と同じようにこれから仕事というシェラザードと出会った。

朝の挨拶を交わし、四方山話に花を咲かせる。

が、俺と彼女では目的地が違うので、途中で別れることになった。
「んじゃ、俺は担当のパーティーの連中と話があるから、居住区のほうに行くね」

「ああ。私は中央区で魔法学の講義だ。……最近、そちらのパーティーの調子はどうなんだ？　なかなか手を焼いていると聞いているが」

「大変だよ。でも新しいメンバーが入ってくれたし、いよいよ本格的に活動できそうな気配かな。そっちの担当パーティーは？」

「私のほうは、相変わらずだ。手のかからない連中だから助かっているよ」

シェラザードが担当しているのは、もうすぐ《英雄の神殿》に手が届くんじゃないかとまで言われている超有力パーティー、すなわちリノティアのトップに近い現役最強クラスの冒険者たちだ。すごい。

リノティア学園は、上空から俯瞰してみると大きな円を描くような形をしている。まず真ん中に中央区、リノティアの本体とでもいうべき馬鹿でかい校舎が置いてある。生徒が講義を受けたり、職員室があったり、いろんな行事が行われたり、文字通りの学園の中枢だ。

で、その中央区の周囲をぐるりと囲むようにして、居住区だの、実習区だの、工業区だのと、それぞれの目的ごとに整理された区画が順番に並ぶ。イメージとしてはルーレットとかピザとかそんな感

じ。

「じゃ、がんばってな」

「ああ。おまえもな。 ところで、アキヒコ」

「ん？」

「なんだか女の匂いがするような気がするのは、私の勘違いか？」

□元はにつこり笑ってるのに目が笑ってない。

「いや……気のせい……だと思っよう……うん」

「そうか。それならいいんだが。また近いうちに飲みに行こうな、アキヒコ。ふたりつきりで。ふたりつきりでな」

「いや……俺、あんまり酒は……」

「飲みに行こうな？」

「……うん……わかった……」

「よかった。楽しみにしている。ではな、アキヒコ」

シェラザードの背を見送りながらカタカタと震える俺。

なんで震えてるの俺。

ただひとつだけ言えるのは、女って怖いということだけだ。

ドキドキしながら歩みを進める。

居住区五番街、《リノティア・バーニングボンバーズ》のパーティールームに直行。

ボロつちくて薄っぺらいドアを開ける。

木製の椅子にちょこんと座っているルーティと、ノアル、レミリア。窓際の少し離れたところに置いてあるソファに寝そべっているガゼル。

パーティーのメンバーはすでにみんな揃っていた。珍しいこともあるもんだ。大抵、ガゼルかレミリアがいないんだけど。

「はい、みんなおはようございます」

「おはようございます、先生」

「おはよー、先生！」

「チッ」

「……おはようございます、先生……」

「うんうん、おはよう。元気な一日は元気な挨拶から始まるからね、これをおろそかにしてはいけないよ」

なんかひとりだけ挨拶じゃなかった気がするけど、きっと舌打ちに「おはよう」の意味がこめられていたのさ。俺はそう思いたいです。

「さて。さつそくですが、昨日の反省会も含めて、今日の活動を決めていこうと思います。まずご存知の通り、昨日の探索中にメンバーが増えました。しかも忍者です。これは素晴らしいことだね。みんな、ノアルくんに拍手しよう」

ぱちぱちぱち。俺とルーティとレミアが拍手。ガゼルくんガン無視。無表情のノアルくん。

「ノアル、こんなボロっちいパーティールームでごめんね」

「……いえ……あまり気になりません……」

「そう言ってもらえると助かるな。……けど、いつまでもこのレベルの部屋ではいけないよね。せめてルーク、いや、ビショップルームぐらいは確保したい」

ゆくゆくはナイトとか、クイーンとか。

「せんせー」

「なんだい、レミアくん？」

「その、ルークとかビショップとか、どういう意味なの？」
えっ。

なにやらニコニコしながら質問してきたけど、この子……まさか、そんなことも知らないのか……？　ちよつとボケた子だとは認識していたが、これは、想定外の大物なのかもしれん。

「いや、入学式の日とかに説明されたよね？　ねっ？」

「わかんない。忘れちゃった」

「ぬう、手ごわい」

仕方がない。説明するでしょう。

「俺たちのいるパーティールームだけど、これは明確にクラス分けされているんだ。もっとも下級のポーンルーム、《初級者の寢床》。

これが最下層。で、ここから始まって、いろんなダンジョンを探索したり、学園の発展に貢献したりすることによって、どんどんパーティーの地位が上がる。それと同時にパーティールームもどんどんレベルアップするのだよ」

最下層のポーンルーム。そこから順番に、ルークルーム、ビショツプルーム、ナイトルーム、クイーンルーム、キングルームと、どんどんレベルアップ。

レミリアは不思議そうに首をかしげる。

「それって、なにかいいことがあるの？」

「ある。すごくある。ここはポーンルームだからボロっちいけど、上級のナイトとかクイーンの部屋はマジすごい。広いし、風呂とかついてるし、日当たり良好、ベッドとか絨毯とかフカフカで気持ちいいよ」

「すごい！ キングルームは！？」

「もつとすごい。ていうか建物の外側だけならすぐに見えるけどね」
「どこ？」

「ほら、ここのだ真ん中にでっかいのがあるでしょ？ 一番高くてもどこからでも見えるやつ。あれ、丸ごと全部」

「ほええ」

口をぽかんと開けて驚くレミリア。

いや、俺も最初は驚いたなー、あれは。

「キングルームは《英雄の神殿》と呼ばれる。あそこに住めるのはただひとつのパーティーだけだ。現役最高峰の、もつとも学園に貢献した連中だけがあそこを使うことを許される。それだけに設備も立地も最高で、上級貴族の邸宅と比べても遜色ないほどなんだ」

「すごい、すごい！ 先生は、あそこに住んだことがあるの？」

「あるわけねーだろ。バカか、おまえ」

そっぽを向いたまま冷たく言ったのは、ガゼルだった。

「あそこに到達できた連中の将来は王都の要職か地方の大領主か、ってところだ。こんなところでシヨボい用務員なんてやってられる

かよ」

「えー？ 先生、どうなの？」

「ん、どうだったかなあ……もう八年も前のことだからね、忘れちゃったな」

語るようなことでもない。

というか俺の場合、《英雄の神殿》を使っていた《黄金の栄光》に途中参加しただけなので、自慢できるようなことではない。賞賛されるべきは、ゼロの状態からパーティーを立ち上げてあそこまでのし上がったフェアライトだ。どれだけ困難な道のりだったのか想像することすらできない。けど、あいつはそれを成し遂げた。彼女が権力を得るために選んだ手段のほとんどは褒められるようなものではなかったけれど、少なくとも、あいつにはこの学園の最強を名乗ってもいいほどの実力があつた。だから《英雄の神殿》、リノテイアの頂点に辿り着いた。

あとからやってきてフェアライトの実績に乗っかっただけの俺が、「俺はあの《英雄の神殿》に住んでいたことがあるんだぜ！ 最強パーティーの一員だったんだぜ！」だなんて、そんな恥知らずなことを、言えるはずもない。

俺はただの用務員、兼、しがない教師だ。それで満足している。

「あ、そういえば、ノアルの以前のパーティーはどの部屋だったの？」

「……ビショップルームです……」

「ふむふむ。じゃあ当面の目標はそこだな。きみら、レベルは高いんだから、ほんとはいまだにポーションルームとかありえないのよ。がんばればいけるよ、ルークとかビショップにも」

「はいっ、先生、しつもん！」

「お。なんですか、レミリアくん。なんだか元気いいね。やる気が出てきた？」

「うん！ あたし、お風呂とか好きだもん！ お風呂のある部屋がいいな」

「そっか、そっか。やる気があるのはいいことだよ。もつと早く言っておけばよかったな、こういうのは。で、質問って？」

「あのね、いろんなお部屋があるのはわかったんだけど、それってどうすればレベルアップできるの？」

「ああ、なるほど、それをまだ説明していなかったな。」

「ポイントを溜めればいいんだよ」

「どうやって？」

「ふむ。いろいろな方法があるね。まず、ダンジョンの探索を進めること。学園が管理しているダンジョンの最下層まで到達できると、そのダンジョンの難易度に応じたポイントが貰える。まだ未開のダンジョンだと、地図を作って学園に提出すればかなりの点数を稼げるよ。あと、メンバーが実習や筆記テストでいい結果を残すとか、行事に参加して活躍してもいい」

「それだけ？」

「いや。まだあるけど、一番手っ取り早いのは、依頼を受注して達成することだね。みんな、生徒会室に行ったことはあるよね？」

「当然、あるはずだ。」

生徒会室は、名前どおり、この学園の生徒たちの自治組織である生徒会の大本営。そこで行われるのは生徒たちと学園側との連絡の橋渡しやら、行事の運営、生徒たちの活動の管理と把握などなど。あと、パーティーのメンバーを入れたり外したりするとき、パーティーのリーダーとそのメンバーが生徒会に顔を出して書類を提出しないといけない。

「で、あの生徒会室の壁一面に張り紙がたくさん張ってあるのは見た？」

「ええ。あれが、どうかしたんですか？」

「あれに依頼の内容を書いてるんだ。依頼するのは生徒とか教師、この学園の関係者だね。内容は、いろいろあるよ。作りたい薬品の素材が足りないから採取してきてくれ、だとか、どうしても倒せない敵がダンジョンに居座ってるから倒してくれ、だとか。たまに行

商人の護衛とか、村の近くに住み着いた魔物の駆除だとか、学園の外からの依頼もある。そういう切実なお願いを生徒会は聞き届けて、内容を審査して、問題ないようなら壁に張るの。そのとき、その依頼を達成できればどれだけ学園に貢献できるか、ってポイントもつけられるわけだね」

そして、依頼を受ける冒険者たちは、生徒会室の張り紙を眺めて、自分たちで達成できそうだな、と思ったなら、生徒会に依頼の受注を伝えるわけだ。で、見事に依頼達成、クエストをクリアできたら、依頼者からの報酬と、それとはまた別に、生徒会からポイントが贈られる。

と、ここまで説明すると、ルーティくんは感心したようにうなずいた。

「それはすごいですね。どれくらいの依頼を達成すれば、ビシヨッブルームに上がれるのでしょうか？」

「んー、たしか五〇〇〇ポイントは必要だったと思う」

「私たちのパーティーが溜めているポイントは？」

「限りなくゼロに近い。きみら、サボりすぎ」

「あう」

そんなしょんぼりするなよ、ルーティ。

「いや、ごめん。ちよつと俺も放任主義すぎたのは認める。ま、実際、落ち込む必要はないと思うよ。何度も言うけど、きみら、レベル高いし才能あるから。ほんとはルークに上がるのも苦労するところなんだけど、一気にビシヨップまでいけるかもしれない。とりあえず、いま張り出されてる依頼を見てこようか」

「それと……僕の、メンバーとしての登録も……」

あ、まだやってなかったんだ？

そういえば昨日はダンジョンの内部でノアルと出会って、そこで話が纏まっただけであって、今日は今日で朝からここに直行か。生徒会室に行ける余裕なんてなかったのか。

「んじゃ、まずはそれからだな。行くところは同じだし、同時に済

ませよう
「

というところで、俺たちはさっそく出発した。

《生徒会》

生徒会といっても、この超広大なりノティア学園の生徒たちの顔となる組織なのだから、その規模も権力も俺のいた世界のそれとは桁外れである。

彼らは、一般の生徒たちから立候補して選挙で当選することによって、生徒会への参加を許される。さらにそれぞれが得意な部門の修行を積み、結果を出すことに成功すれば、書記やら会計といった役職に就けるんだけど、書記だけでも何十人もいて、そこにも序列がきちんと設定されているし、書記の頂点、書記長とか存在する。会長はもちろんひとりだけど、副会長とか十人くらいいたと思う。

だれも彼もが選ばれたエリートで、本人たちも、そのことに誇りを持って職務にあたっている。若いけど、ちゃんとしたプロ意識を持ちながら仕事をする、すごい奴らだ。

ただ、生徒会での仕事が忙しすぎるので、いったん生徒会のメンバーになってしまうと、ほとんどダンジョンに潜ることができなくなる。その代わり、一ヶ月ごとに学園から相当な額の給料を貰えるし、専用の豪勢な寮生活を約束されるし、食堂で食い放題で無料券が貰えるし、学園中のほとんどあらゆる場所にフリーパスで入れるようになるなど、いろんな特典が用意されているので、選挙に立候補する生徒はあとを絶たない。

サッカーゲームができそうなほど広い生徒会室。五階建ての建造物の、一階だ。生徒会の活動の場として使われているのが一階と二階。三階から五階までは、生徒会メンバー専用の学生寮としての機能を持つ。

数え切れないほどの机と椅子が置かれたここでは、生徒会の連中が絶えず忙しそうに走り回り、山と積まれた書類が山脈を作ったり、その書類がぶちまけられて怒号が上がったり、ひたすら紙にペンを走らせる音が永久に続き、そして罵声が上がって机を勢いよく叩く音がする。いつ来てもやかましい場所だ。活気があるとも言う。

《黄金の栄光》時代にはほとんど来なかった場所だな。むしろ教師になってからのほうがよく足を運ぶようになった。うちのパーティーのために必要な手続きはみんなフェアライトがやっていたし、依頼なんぞほとんど受けたことがなかった。あいつは、そんな暇があるならさつさと新しいダンジョンに、って感じだったし。

ここには知り合いの生徒もいるから挨拶しときたいんだけど、彼女も忙しいだろうし、俺たちの用事もたいしたことではないし、さつさとやることをすませよう。

受付の女の子に挨拶。

「こんにちは」

「あ、シキムラ先生。こんにちは。なにかご用ですか？」

「うん。うちのパーティーに新しいメンバーを加えたいのよ。ノアルくんっていうんだけど」

「分かりました。では、こちらの書類に、パーティーのリーダーと、ノアルさん本人の署名をお願いします」

テキパキとした様子で書類とペンを取り出し、受付の机の上に広げてみせる女の子。

ずらりと机が並んだ受付だけでも、十人くらいの生徒会メンバーが働いている。

手続きは簡単なもので、すぐに終わった。冒険者のパーティーっていうのはけっこう頻繁にメンバーが入れ替わることも珍しくないもので、そんなに複雑な手続きなど誰も歓迎しないからね。すぐに終わらせるように簡略化されているのだ。

この手続きをしておかないと、ちゃんとパーティーのメンバーとして数えられないし、本人の評価にも繋がらないからね、大事だよ。

「さて、ありがと。依頼を見てくるわ」

「はい。また来てくださいね、先生」

ひらひらと手を振って受付の女の子と別れる。あちらも小さく手を振って、笑顔で送り出してくれた。将来はいいお嫁さんになれるそうな子だ。

「むう」

「どしたの、ルーティくん」

「いえ。なんでもありません」

「……？ さて、あそこの壁にびっしり張られてるのが、お待ちかねの依頼です」

ほんとに壁一面、びっしりと張られている。

でっかい壁の一面を大学ノートページくらいの大きさの紙が埋め尽くしているというのは、はつきり言って、異様な光景です。キモい。あれ一枚ずつ、それぞれすべて違う内容の依頼である。ただ溜め込んでいるんだろう。

依頼者はさっきの受付に顔を出し、用紙をもらってそこに依頼内容とメッセージ、用意した報酬を書き記し、提出する。すると生徒会がその内容を審査して、この依頼ならば達成するとどれだけポイントを与えられるかってところを吟味した上で、最終的にあの壁に張るのだ。

「すごい数ですね」

「上のほうにあるのは、どうやって見ればいいの？」

「横のほうに脚立あるでしょ、ほら、あの馬鹿でかいの。あれ使うんだよ」

「え、やだ。あたし高いところ嫌いだよ」

「……では、僕が……」

天井まで十メートルくらいある。脚立の高さもそれくらいだ。身軽な忍者であるノアルなら、簡単だろう。

お願いすれば生徒会の連中が代わりに取ってくれるんだけどね。でも自分たちで目を通したほうが手っ取り早い。

「さて、達成できそうで、しかもなるべく報酬やポイントが美味し
いやつを探そうか」

「依頼によって、貰えるポイントにも差がありますか？」

「もちろん。当然、だれにでもできる簡単な依頼ではちよつとのポ
イントしか貰えないけど、難しい依頼だとたくさん貰えるよ。みん
な、手分けして依頼を探してきてくれないかな。そしたら、俺がそ
の中からちよつどいいのを選んであげる。今回だけね。次からは自
分たちで見つけるんだぞ」

てなわけで、依頼の搜索が始まった。

高いところにある張り紙を、脚立に乗ったノアルが見る。

目線の高さにあるものを、ルーティとレミリアが。

低いところにあるのは、ガゼルが。

で、俺は、端っこのほうでうろつろ。ないかなー、ちよつどいい
の。

俺たちのほかにいろんなパーティーの連中が依頼を探しに来て
いて、いいものはすぐに受注されてしまう。基本的に、ひとつの依
頼を一度に受注できるのは一組のパーティーだけなので、条件のい
いものは早い者勝ちだ。なるべく早く探さないと。

ずいぶんと古い依頼もある。

だれからも発見されず、新しい依頼を上から張られてしまって、
そのまま埋もれてしまったのだろう。

……おや？ これは？

俺は一枚の、古くて黄ばんだ依頼用紙を見つけた。

『腕っ節に自慢のある連中、大募集！ 俺は喧嘩が大好きなんだが、
最近はどうも胸を熱くさせる相手がなくてつまらねえ！ てなわ
けで喧嘩の相手を募集するぜ！ 人間だろうがドワーフだろうが、
種族なんてどうでもいい！ 人数も関係ねえっ！ その腕っ節で俺
を熱くさせれば依頼達成、報酬は金貨三百枚だ！ じゃあな、闘技
場で待つてるぜ！』

依頼者、ウィルダネス・ドストロイ。達成によって贈呈されるポ

イントは七〇〇〇点、か。大型の竜種の討伐に匹敵するポイントだな。ちなみに普通の人間なら金貨一枚で一ヶ月くらい遊んで暮らせる。

なにやってたんだ、あいつ……。

そういえば、一時期、闘技場でそわそわしてたなあ。やがて目に見えてガッカリしてたけど。これの相手を待っていたのか。

だれも来ないよ。だれも死にたくないだろうし。

俺はその張り紙をそのままにしておくことにして、新たな依頼捜索を再開した。

で、二十分が経過。そろそろ、いいだろう。

「はい、集合」

ぞろぞろ集まってくるバーニングボンバーズ。

「みんな、これは！　と思う依頼を見つけられたかな？　では先生が選り抜いてみせますので提出してください」

えーと、ルーティは五枚、レミリアは七枚、ガゼルは二枚、ノアルは四枚か。

一通り、目を通す。

「ふむふむ。……んー、ルーティはなかなかいいのを選んでくるね。この魔物の討伐は報酬もポイントもそれなりだ。でももうちょっとランクを上げて大丈夫だよ。レミリアはちよつと簡単なのを選びすぎかな。キノコ採集はもつとレベルの低い子たちがやるものだしガゼルは無謀すぎる。きみらでは《梯子山脈》の火吹き竜とか絶対に倒せないから。もう一枚のほう、《コーゴ大洞窟》のフロストジヤイアント、遭遇した瞬間に凍え死ぬよ。……おっ、ノアルの持ってきた依頼はいい感じじゃない？」

《暗黒の洞窟》に住み着いたクイーン・アントの討伐、か。クイーン・アントは、ジャイアント・アントという名の蟻たちを統括する女王蟻だ。その名の通りの巨大な蟻たちだけど、性格は極めて獰猛、強力な顎で人間を甲冑ごと食いちぎるし、うじゃうじゃと群れて襲いかかってくるし、女王の指揮下で抜群のチームワークを駆使

し、非常に高度な戦術を展開するので、ただの蟻だと侮ってはいけません。簡単に返り討ちにあう。

そいつらが《暗黒の洞窟》というダンジョンに巣を作り、探索しているパーティーにとってとてつもなく凶悪な邪魔になっただけで、やつつけてほしいという依頼なのだ。クイーンを失えばジャイアント・アントたちは烏合の集と成り果てる。それからならば、どうとでも料理できるだろう。だから、群れそのものの殲滅ではなくクイーン・アントの討伐依頼なのだ。

依頼者は、《暗黒の洞窟》を攻略中のパーティーのリーダーたち数名。報酬は金貨十枚と、何冊かの魔道書や数種類の薬草などの詰め合わせ。依頼達成によって貰えるポイントは、五〇〇〇点。

「こいつを達成できれば、一気にビショップルームに行けるな」

「ほんと？　すごい！」

「……んー、ただ、四人ではちょっと厳しいかもしれない。クイーン・アントつて、レベルにすれば二五〇から三〇〇くらいの強さだったはずだよ。いまのきみら四人なら大丈夫だとは思っただけど、もうちょっと確実にいききたいかなあ」

まさか担当官であるこの俺が、この子たちを絶体絶命の死地に追いやるわけにはいかない。ちゃんとこの子たちの実力に見合った依頼を見つけてあげないと。

いまの《リノティア・バーニングボンバーズ》の戦力なら、ルーティのスケルトン軍団で蟻どもを制圧し、レミリアの呪歌で全員の実力を底上げして、ガゼルとノアルの攻撃でクイーン・アントを仕留めることは、たぶん、可能だ。

けど、ダンジョンの内部では、なにが起こるのかまったく予測が不可能。

ふとしたことで大怪我をしてしまうことや、予想外の強敵が現れて全滅の危機に直面することも、よくあることだ。

やっぱりメンバーが足りない。回復役がないことには、この子たちを送り出して安心できる気がしない。われながら過保護だとは

思っけど、生徒というのはものすごくかわいいので仕方がないのだ。
「僧侶とか欲しいよね、やっぱり。司祭とか。回復魔法を使える子が」

「こだわりますね」

「いやいや、当然だよ、ルーティくん。きみら、ダンジョンの奥で怪我とかしたらどうすんの？ 傷を治療してくれるメンバーは必須なんだよ、マジで」

そんなメンバーさえいたなら、この依頼で決定なんだけどなあ。
惜しいなあ……。

でも、仕方がないな。

ルーティが持ってきた、もうちょっと簡単なほうの討伐依頼にしておこう。数をこなせば五〇〇〇点くらい、すぐに溜まるだろうし、生徒会室のはるか向こうのほうでズドーンという音がしたのは、そのときだった。

「せんせーっ！ アキヒコ・シキムラ先生 ！」
うん？

この聞き覚えのありすぎる、生徒会室を丸ごと震わせるほどの大きな声は？

百メートルほど彼方で、書類の山脈が吹っ飛んだ。大勢の生徒たちから絶望の悲鳴と怒号が上がる。

舞い散る紙ぶきを背景にして仁王立ちしているのは、俺のよく知る女子生徒だった。

長身の、ありえないくらいわがままなボンキュボンスタイルを、リノティア指定の白い制服で包み込み、短いスカートの下から真っ白い脚が長く伸びている。

髪型は、いわゆるドリル。黄金のような色艶を放つ髪の毛を腰に届くほど伸ばし、何本もの縦ロールにして背中に垂らしている。手入れにもものすごく手間がかかりそう。後頭部を大きな青いリボンが飾っている。

吊り上がり気味の大きな瞳には光り輝くような意思が満ちていて、

口元は不敵にほほ笑み、女帝のような貫禄を感じさせる。ちよつと威圧感のある容姿だが、凄まじい美人であることに間違いはない。

彼女の名は、エストレア・ブレイブハート。

「先生。彼女は何者ですか？」

「ん、一年前まで俺が担当してたパーティーのメンバー」

「先生ッ！　いますぐそちらに行きますわ！」

えっ。

と思つたときにはすでに遅く、エストレアは床を蹴って跳躍して
いた。

百メートルの距離、俺たちと彼女たちのあいだに置かれていた机
や椅子などをすべて軽やかに飛び越え、たつぷり三秒ほどかけて、
エストレアは見事に俺の眼前へと豪快に着地した。

ものすごい音と振動が、足元を揺るがす。

爆乳が、物理法則にしたがつて大きく上下に運動。全身の筋肉を
バネにして着地の衝撃を完全に吸収したのだろう、軽く身を屈めた
状態から背筋を伸ばすエストレアは、いまの常識外れのジャンプを
見せたあとだというのにバランスを崩した様子さえ見せない。相変
わらず圧倒的な身体能力の持ち主だ。

エストレアは俺を見下ろし、満面の笑みを見せる。

「お久しぶりですわね、先生！　こちらにいらしていたのでしたら、
お声をかけてくださればよかったのに！」

「ああ、ごめん。忙しいだろうから、わざわざ呼び止めるのもどう
かと思つたんだ」

俺は、かなり高い位置にあるエストレアの顔を見上げた。

エストレア・ブレイブハート。身長、三メートル七十センチ。
花も恥らう十六歳、巨人族の女の子である。

《エストレア・ブレイブハート》

「みんな初対面だね？ この子はエストレア・ブレイブハート。

見ての通りの巨人族で、ルーティやレミアと同じ年だ。一年前まで俺が担当官だったパーティーのメンバーで、いまは生徒会の副会長のひとり。エストレア、この子たちは俺がいま担当しているパーティーのメンバーだ。その人間の女の子がルーティで、獣人族の子がレミア。ダークエルフのガゼルと、エルフのノアル」

「みなさん始めまして！ わたくし、エストレアと申しますの！ シキムラ先生にはたいへんお世話になりましたわ！ 以後、どうぞお見知りおきを願いますわね！」

両手を腰に当てて、大きな声で名乗るエストレア。

バーニングボンバーズもそれぞれ挨拶をして、俺たちの自己紹介は終わった。

「それにしても、先生！ 三ヶ月ぶりにお会いできて嬉しいですわ！ こちらにはどういったご用件で！」

「うん、ちょっと依頼でも受注して、パーティールームのレベルを上げたくてね。俺たちのいまいるパーティールームって、ポーンルームなのよ。せめてビショップには上がっておきたいなあ、と」

「まあ！ そうでしたの！ そうですわね、ポーンルームはいけませんわ！ わたくし、あの狭苦しい部屋だけではどうにも好きになれませんでしたわ！ それに、ネズミや黒い虫もたくさん現れますし！ 思い返すだけでも忌々しい！ わたくし、不衛生な場所は嫌いなんですの！」

「はっはっは。だよねー、エストはネズミとか出ると本気でビビッてたもんな」

「せつ、先生！ そんなことはありませんわ！ わたくし、ネズミ

を怖がってなどおりませんわよ！ ただ不衛生だから嫌いなだけで、怖いわけなどあるはずがございません！ ええ、そうですとも！ あんな小動物、どうして恐れる必要があるのでしょうか！」

顔を赤く染めて講義するエストレアだったけど、この巨娘が小さなネズミを相手に本気で泣きながら逃げ回ってパーティールームを全壊状態にしたという事件は、当時のメンバーたちなら誰もが知るところだ。

「……で？ なんの用なんだよ、デカ女？」

不機嫌そうに顔をしかめたガゼルが言う。

エストレアはきょとんと目を丸くした。

「デカ女？」

「デカブツ女って意味だよ、馬鹿が。さっきからくそデカい声でキンキン喚きやがって、うるさくてたまらねえ」

ああ、やつちまった。

次の瞬間、エストレアの左脚が大きく持ち上がって、足の裏がほぼ垂直に天を向いた。パンツ丸見え。

直後、神速で振り下ろされる、かかと落とし。綺麗な弧を描いたそれはガゼルの鼻先をわずかに掠り、床に直撃し、派手な音と共に木材を散らす。

「……女性巨人族の平均身長を五十センチしか上回っていませんわよ、おチビさん」

絶対零度の視線で見下ろしながら、エストレアは言う。

いまの攻撃に、まったく反応できなかったガゼルは、驚きに目を見開き、脂汗を垂らしている。鼻の頭から血が流れていた。

ま、エストレアがわざと外していなければ確実に即死、彼の全身が原型を留めない挽き肉に成り果てていたことは疑いの余地もないので、無理もない。鍛え上げた巨人族の肉体は、それそのものが凶悪な鈍器であり刃物だ。とくにエストレアの美脚は二メートル以上のリーチを誇り、それによって繰り出される蹴り技は、竜族が振り回す尻尾のようなものだ。当たれば肉が爆ぜて骨が砕けて死に至る。

…… エストレアに身長の話は禁句だ。

巨人族というのはその名の通りの巨人の種族。

人間よりもずっと体格がよくて馬鹿力の持ち主だと思っていれば問題はない。

ほとんどの巨人族の身長は三メートルを越し、男性の平均身長は三メートル五十センチ、女性の平均身長は三メートル二十センチくらいだと言われる。俺の昔の仲間、ウィルダネスは、ちょうど平均くらいの身長だったわけだ。

そういうわけで普通は男よりも女のほうが背が低く、そこらへんは俺たち人間と変わらないんだが、まあ、人間にもよくあることのように、エストレアは他人よりもちよつと背が高く成長するように生まれてきた。人間の女性に換算すると、だいたい一九〇センチくらいの身長らしい。

巨人族の中で生きるだけなら、きつと問題はなかった。強さを求め、おのれを鍛え続けて一生を終える巨人族にとって、恵まれた体格はもつとも喜ぶべきことのひとつ。女性であってもそれは変わらない。

幼いころから図抜けた体格によって活躍し、多くの賞賛を浴び、名誉を勝ち取り、そこに誇りを持っていたエストレアは、当然、巨人族社会から旅に出てこの学園にやってきてからも、それを活かして頑張っていた。

けど、彼女の獅子奮迅の戦いぶりを見て、憧れや信頼ではなく、どす黒い妬みや恐れを抱く連中が現れた。

エストレアに対するいじめが始まった。

その当時のことは、俺がまだ担当官ではなかったころのことなのでよく知らないが、とにかく苛烈で、陰湿、言葉にすることもできないほど酷いものであったらしい。

とくに、身長に対する言葉の暴力は、凄まじかったのだそうだ。いままで自分の体格について誇りを持ち、それを素晴らしいことだと信じていたエストレアにとって、彼らに馬鹿にされることはと

ても信じられないことだったし、著しくアイデンティティーを傷つけられる事態だった。

正直な話、三メートル以上も身長のある連中が五十センチ高からうが低かろうが、人間にとってはさほど変わったようには思えない。ただの、幼稚な難癖をつける理由のひとつにすぎなかったのだろう。けど、エストレア自身は、そうは思えなかった。

俺が最初に出会ったときのエストレアは、それはもう、酷い状態だった。

心も身体もズタボロにされ、だれも信じられなくなり、ヒステリックな言動を繰り返した。ついにはパーティーのメンバーたちや担当官さえも彼女を見放し、だれも彼女を助けようとはせず、エストレアはいつ自分の命を自分で絶つてもおかしくない状態だったのだ。そこからなんとかして新しいパーティーのメンバーに加えて、必死に手を尽くして立ち直らせて、いまのように元気なエストレアが復活したんだけど、やっぱり過去のことはトラウマになっているみたいで、いまだに身長の話をするとうるさく怒る。

俺はガゼルとエストレアの間を遮るようにして立ち、頭を下げた。

「ごめん、エスト。ガゼルには、その、おまえのことを話してないんだ。だから言っていていいことと悪いことの区別がついてない。俺のせいだ。すまん」

「お、お顔をお上げになつてくださいまし、先生。あなたが謝るようなことではございませんわ」

慌てたように言う、エストレア。

よかった、なんとか殺戮ショーが始まることは防げたようなので、一安心。この子がその気になれば、ガゼルを素手で解体するのに五秒もかからない。

「ま、まあ、わたくしも少し声を大きくしすぎたことは認めますわ。なにせ久しぶりに先生とお会いできたものですから、ちょっと興奮してしまいましたの。ごめんなさいましね、おチビさん」

「……クソが。馬鹿力の化け物め、さっきのはデメエの卑怯な不意打ちだ。勝ったと思うんじゃないぞ」

「あら！ 化け物というのは褒め言葉ですわ！ レディに対して使うのはどうかと思いますが、わたくしは女である以前に誇り高き巨人族ですもの。強さを言葉で表現する方法としての化け物呼ばわりなら、大歓迎ですよ！」

オーッホッホッホ、と、手の甲を口元に当てて高笑いを上げるエストレア。

鼻の頭から流れる血を拳で拭いながら、ギリギリと齒軋りするガゼル。

俺は肩を落としながら、ため息をついた。

「はいはい、そこまでー。喧嘩はやめてください、お願いします。」

……んで、エストレア、最近の調子はどう？ 副会長の仕事はたいへん？」

「ええ、とても。たまに会長を撲殺したくなりますし。ですが、やりがいのあるお仕事ですわよ。人を使うことにも慣れてまいりましたの。これも先生のご指導の賜物ですわ」

「エストはいい子だなー。最近ちよつと忙しくて会いにこられなかったけど、元気そうで安心したよ」

「うふふつ。先生こそ。お元気そうでなによりですわ。……ところで、受注される依頼は、もうお決まりになりましたの？」

「それが、まだなんだよね。候補はあるんだけど。この、クイーン・アントの討伐。でも、うちのパーティーの戦力が、ちよつと心許なくてね」

「それはいつたい？」

「ぶつちやけ回復役のメンバーが足りません。この子ら、屍霊術士と剣士、吟遊詩人と忍者なのよ。万が一のことを考えると、回復の手段もなしにダンジョンに送り込むわけにはいなくて」

いまから僧侶とか司祭とかの子を募集しても、新メンバーを確保したところには、この依頼、すでにどこかのパーティーが受注してし

まっているだろうしなあ。けっこう美味しい依頼だし。

「なもんで、とりあえず今日のところはもつと簡単な依頼を受けることにしました」

「あら、先生。それはいけませんわ。ぜひ、その依頼をお受けになつて下さいな」

「えっ。いや、メンバーが」

「はあ。先生、わたくし、ちょっとがっかりいたしましたわ。あなたの前に立っている女は何者ですの？ それとも、わたくしの職業なんて、もうお忘れになってしまわれたのかしら？」

「……マジ？ メンバーになってくれるの？ 生徒会は？」

「ご心配には及びませんわ。 セバスチャン、カモン！」

優美な仕草で、パチン、と指を鳴らすエストレア。

すると、どこからともなく、するすると滑るような動きで、ひとりの男子生徒が現れて、エストレアの背後に立った。影のように目立たない、特徴のない顔立ちの男の子だ。

「お呼びでしょうか、副会長」

「わたくし、こちらのパーティーに参加することにいたしましたの。しばらく生徒会はお休みさせていただくわ」

「左様でございますか。では準備をいたします」

「ええ、お願い。……ごめんなさいね、迷惑をかけて」

「いいえ、副会長。あなたが理由もなくそんなことを言い出すような女性ではないということは、だれもが知っていますよ。それでは失礼いたします」

と、恭しく一礼すると、セバスチャンなる男子生徒会メンバーは、またしてもするすると滑るような歩みで去っていった。むう、隙のない動き。かなりの使い手と見た。

「そういうことでよろしいですね、会長！？」

大声を張り上げる、エストレア。

けれど、その声を向けた先の巨大な机に人影はなく、一般の生徒会員たちが血相を変えて「会長がまた逃げたぞ！」「探せ！ 草の

根を分けてでも探し出せ！」「あのサボリ女っ、今度ばかりは絶対にゆるさんっ！」などと怒号を上げている。

「……また逃げたようですね……まったく……」

エステレアが嘆息するのも無理はない。

現在の生徒会長である少女は、生徒会の頂点に立つ存在でありながら、極端にやる気のない究極のサボリ癖の持ち主らしいからな。

口癖は「めろんめろん」とか「だぴょん」らしい。

なんで生徒会長なのか不思議でたまらん。

副会長のひとりであるロン・オールドーくんの補佐による当選だとは聞いているけど。

「まあ、事後承諾でも大丈夫でしょう。ということで、わたし、あなたがたの仲間に加えていただこうと思いますの！ よろしいかしら！？」

「ルーティ、どう？ 結局、ルーティがリーダーだから、決めるのはおまえだよ」

しばらく考え込む様子を見せてから、ルーティはエステレアを見上げた。

「あなたの職業は？」

「聖騎士ですわ。回復魔法を使い、分厚い重装備に身を包み、あらゆる職業の中でも特に高い防御力を誇ることは、ご存知でしょ？」

失礼ながら、あなたがたのパーティーには防御力が足りないと思いますの。先生と同じ意見ですわね。たしかに攻撃力は申し分なさそうですね、それでは万が一のことがあった場合、簡単にパーティーが瓦解してしまいますわ。ですから、わたくしという鉄壁の盾を仲間に入れることは、とってもプラスに働くでしょうね」

「……あまりにも正論。断る理由はないわね。むしろ話がうますぎて困惑しているわ。どうやらあなたのほうが私よりもずっとレベルが上のようなけど、私がリーダーのままでも構わないかしら？」

「もちろんですわ。わたくし、大恩あるシキムラ先生にご恩返しをしたいだけですもの。だれがパーティーのリーダーであるかなんて

些細なことですわ。それに、見たところ、あなたはとても切れ者のようですし、問題ないでしょう」

そこで、話は纏まったようだ。

ルーティとエストレアはほほ笑みあう。小さな手と大きな手が、しつかりと握手を交わした。

「ようこそ、《リノティア・バーニングボンバーズ》へ」

「まあ、素敵なお名前！」

「やっぱり分かる！？」

「ええ。燃え上がる情熱を感じますわ」

「……雪原に咲いた一輪の花なのに……」

「は？」

「……なんでもないわ」

いやあ、そのセンスはなかなか理解されないと思うよ、ルーティくん。

で、レミアやノアルも異論はないようだし、エストレアは新たなメンバーとして歓迎された。ガゼルはやっぱり不満げだったけど、多数決には逆らえない。

うーむ、俺はつくづく幸運だ。

ホッとして胸を撫で下ろす。

「よかったー。これでクイーン・アントの討伐依頼を受注しても大丈夫だね。エストが仲間になってくれたなら心配なんていらないよ。ありがとね」

「とんでもございませんわ、先生。それに、わたくし、最近は机に向かつてばかりで体が鈍ってしまいそうでしたから、鍛え直すためのちょうどいいチャンスだと思っておりますのよ。……あ、そうそう、わたくし、副会長のお仕事を辞したわけではありませんので、生徒会に戻らなければいけないこともあるかもしれませんの。ですがもちろんパーティーのメンバーとしての役割を片手間に済ませたり、疎かにすることはございませんので、ご心配なく。わたくし、どんなことにも全力投球、完全燃焼がモットーですよ！」

《リノティア・バーニングボンバーズ》五人目のメンバー、エス
トレア・ブレイブハート。

元気いっぱいのお嬢さまは、こうして俺たちの仲間となっ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8646x/>

がんばればくらのノーカン先生！

2011年12月19日17時47分発行